

---

# アクスベリ。

白紙描写

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

アクセスベリ。

### 【NNコード】

N5555X

### 【作者名】

白紙描写

### 【あらすじ】

アクセスストロベリー：従姉と結婚するまでの物語

「許してください。そして、御免なさい。」

あくせすはべりべつ…

「うわ～アイスが溶けてるー。」

粉塵購買 コトシラは、街で買ってきたアイスを確かめたのは、ク  
ビルトノノセルと言つ田舎町に到着した後の事だった。

「やばいなー、腐ってないか?」このアイス

『我バルト王国』の首都『ノキベ』のある一角にある商店『ハジ  
キ』の味の良さは認めるも品質の良さは一役買つてない。  
アイスをペリつづくのは、家に帰つてからのお楽しみとばかりに、  
懐に収めていたのが運の吸きだつたと、改めて解釈する。

コトシラは、今年で17だ。

独り立ちもあと3日、ワクワクが止まらないのです。

「仕方ない」

一言告げて、無性にアイスの袋をじじ開ける。

「やべ、手に垂れた」

不器用なのか、ストロベリー味のそれが盛大に、手にかかるのだった。

「友達居ねーのに、この少慘事、どうにかしておくれよ…」

無情に、ショッキング。

明日は、襁褓破壊試験が待ちかねているのに、気分転換に、ろくにアイスも食えない有り様。

ああ、いつその事、家を出て、立派な剣士になりより、勇者になつてやううか。

⋮

甘くはない。そんなに、人生甘くはない。

黒砂糖よりも、甘くはない。分かつてる。理解している。

世界は何を中心として、回つていると思つ?

「それは、太陽を中心として、地球がグルグル回つているのだ。何処にも中心なんてない。中心は誰かが決める物なのだからだ」

決まらない言葉を言い放ち、地元を翔る。

次回

本編は、まだ始まつてはいない。

続けて、

## 地域

地元の空氣はとてもなく、何事にも代え難い独特な味をしていた。していたのではなく、している。

何か特徴のある町並みでもなく、本当に何もない地味な所だ。田舎とこう物は…

でも、無くなつては成つてはならない場所もある。

その様にして、鑑賞に浸つていると、つかの間の出来事と、悪夢がおそつたのだ。

地面から息なり、何かが飛び出してきたのだったからだ。

「うわ、」

凄い勢いで急展開を迎える。少しばかし、休憩したかったんだけど、それは、待つてはくれなかつた。

「なんだ。何が起きた?考える時間くらうぐだぞこー。」

んなこと、言つて、体勢崩して、すつゝりんだ俺。コトシワは、体勢を崩しながらも現場を伺う。

するとそこには、語彙では表現できない。怪物が居たのだ。

「ば、化け物!」

その通り化け物、しかし、コトシラにはそんな語句は、関係有りません。

だってコトシラは、背中にいつもながら背負っているはずの、大剣を所持していなかつたからです。

コレは大変です。なにが大変かと述べて説明するのなら、さつき、そうほんの今さつき、開封したばかりのアイスが地面に引き寄せられ…

クッチャクチャに、成つたからです。

「せ、せっかくのアイスが…」

残念なことです。気分転換にしては長すぎる散歩を得て、手に入れたアイスが、瞬きする間もなく、「食べられない」と様子へと変貌したからです。

衝撃的ですね。

このほんの一時の幸せを実現するために、果てしなく遠いと、錯覚する道のりを自前の一本足で、せっせと歩んで来たのにも関わらず…

見れば、現実は皮肉の固まりですね。

言わんばかりに、地べたに溶け染みるアイス。

「あ、あ、あああああ…」

言葉も詰まり、話す言葉も感想も言えないコトシラ。

こうなつてしまえば、前方の語彙では表現できない怪物は、見えていません。

終わりましたね。コトシラ。

コトシラの最後は、儂くアイスとともに散ることであつたよ。  
さらばコトシラ。

バイバイコトシラ。

コトシラのことは、墓場まで忘れない。

コトシラ万歳。永久不滅のコトシラは英雄だ。

動き始める怪獣。唸りをあげ、高鳴る罵声と憎悪と共に、襲いかかる。

距離にして、身と鼻の先。

後がないコトシラ。

旋律と穿孔が彼をみすぼらしく罵る。

!

その時だった、僕らナレーターだつて諦めていた刹那。

奇跡が起きたのだ。

イトコの古見子が直撃寸前の怪獣をなぎ払った。

過去形のよつに、怪獣は、5時の方角へ水気になり、溶けていった。

「あ、あああああ

「トトシラはまだ、アイスの棒を双眸で見つめ眺めていたのだった。とても悲しそうだ。

「何してこのへトトシラ? もつ怪獣は、葬ったわよ?」

怪鬼とは、先ほど、5時の方角へ飛んでいたあれだ、言わば、雑魚モンスター。

「だ、だって、お姉ちゃん。アイスが、僕のアイスが…」

トイコの古見子は、ベボコトトシラと違つて、優秀な二刀小刀使い、とってもかっこいいです。

なので、トトシラをお姉ちゃんとあえて呼んでいる。

「何を言つてこらの? アイスなんて、ドコにだって、売つてこるじやない?」

違うんですよ。古見子さん。トトシラは懸命に歩いたとの『あいす』が食べたかったんですよ。

噛み合わない。対人関係ですよ。もつ

「おれ…おれ…」

頑張れ、トトシラー

「おれ、自分をいじめて、美味しくアイスが食べたかつただけなんだ…けど、もう、どん底です…」

おい、「コトシラ」何を言つていいんだ?

「…」

古見子さん退いてる…やばい退いてる…ビーフとか、コトシラを正常化しておくれよ。

「大丈夫。あなたは大丈夫よ」

大丈夫。ちよつとばかし無責任過ぎはしませんか?

「お姉ちゃん…」

ああ、読めてきた。だめだ!こいつ卑くどうとかしないと…

「おれ、頑張る…こいつか、きつと世界を取り巻く剣士に成つてやるー!」

よく言った。上辺だけの素晴らしい言葉をよく言った、お前はある意味勇者だ。

次回

取り巻くそれは、更新系

「とりあえず、誰からぶつ殺しましょつか？」

「物騒な言語は控えましょ」

僕の悩みという物を赤裸々に、話しあげく、第一声がこんな調子だから困る。

もう少ししばかり、優しい言葉遣いで励ましてくれないものかと、少しばかり困る。

「だつてあんた、クソ弱いじやん。だから、人を殺めて経験値稼ぎでもしたらどうよ？」

相談テーマは、明日の試験対策で先ほどのアイスの話しさ、なんの関係もないただの漫才とかと思つてくれ。

「僕らのスキルがレベル数値で決まるんだとしたら、たまつたもんじゃない、試験にレベル差とか、撃破数とか、関係ないしスキルを観るから、アイツ等、」

スキル…すなわち、学歴とか資格とか。

アイツ等…審査員とか、審査員とか。

「あら？ 弱音を吐くのね。あなた、」

私なんて、物の数分で合格したわよ的な態度をとる。

「仕方ないだろよ、おれ、落ちこぼれとか、出来損ないとかの部類に位置する人間だし……」

生きがいと言えば、苦労のあとのお菓子や食べ物（主に洋菓子）なのだから、武道家はびっくりする。

「別に私だつて、才ある人種ではなかつたわ。ただ普通の凡人生だつた……」

「つてか。僕より一つしか変わらないのになんて切実な談話なんだ。深刻でクソ真面目な人生相談をやつてるようで気持ち悪い。

「所で、試験つて聞いた感じじや。盛り上がりそうなイベントだけど、勿論、壮大な生き残り大乱闘とかしたちやつたりするのよね？」「いや、違う！今年は筆記試験だ！」

「言田は早とちりと来たか、この人は、局面での切り替えが早くて、翻弄される。

「実技じゃないの？……なるほどね。去年がそうだつたから、今年は無いのか。」

無いのではなく、筆記ね。

……だとすれば、まだチャンスは巡つていて事になるのか。

僕、体育会系ではない方の人材だから。

夏休みに一時ピークを迎えて、学問に禿げくんだものだ。

その所為か、冬休みはダルさと寒さのダブルアタックがクリティカルヒットしたもんだ。ペンも握っていない。

その成果は総合的に、絶対値0。

大した成果は得られないまま、猶予や期限が詰みついている。

最近は、試験対攻略本なんかをペラペラしている始末だ。

「なんだか、実技でフルボッコされる方がよっぽど、ましになつてきた…」

本音語るコトアシラ。つまりおれ。

「頑張れとしか言えないのが、偶に傷だらけ」

日本文語を的確に連ねて語りあつてもらいたいな。意味が分からぬ。

「所でここ、僕の部屋何だけど、勝手にゲームに電源入れるの止めてくれないかな?」

黄、古見子さんに保存データ消された事があるトラウマがフラッシュバックしたため、そんな事を言うのである。

「凡人は、凡人らしく、凡人以下なら凡人以下らしくだ」

名言でもないが、なるようになれ、普通を願うのも贅沢だとか、言う方向性で語るね。

独り立ちつてのは、保護者の管理から外れ、一人でこの世界に生きていくなくてはいけない。行政側の勝手なルール。

古見子は、どこの警備団体に所属してゐるし、今回の件では暇つぶしが妥当な選だらう。

しかし、どいつもこいつも平和ぼけで退屈だ。獣鬼なんて、相手に

ならない。

昔は、恐れるケダモノや邪なゲテモノが闊歩していたに違いないのに、人々の高度成長し続けたあげくって言い伝えた。

「まあ、どうにかしてみせるよ…」

試験落ちたといひで、取つて碎かれるわけでもないし、死ぬわけでもない。

僕は僕らしくやると、人生歩きを楽しむとこよひじやなか。

「ハントローラー、一つしかなくて対戦や協力は出来ないが、作業をしている様子を伺うだけでも十分に楽しい」

と言いつつ、体育座りで古見子さんのゲームテクを眺める。17才。

「何よ？ そんなに私のショーティング避けテクのが凄いの？」

凄い手つきで、向こうから迫る玉石を交わすわ革す。18才。

：  
一人っ子の俺には、何か、物々しいく暖かい光景。ああ、何だろ？  
この気持ち。

お姉ちゃんとかいなくて、友達とかもいなくて、ほとんど生きている価値感が感じ取れなかつた俺に、こんなにも、和やかで誰かに譲れないようなこの感覚は…

「あのや…」

力チカチ

力チカチ

「何よ？」

「何だろ…か」

「？」

ゲームに夢中なのは分かる、だがしかし、今日の俺は多分狂っているのであらう。

「ゲームがあきたら、一晩言わせてくれるか?」

何もないに等しい。殺風景な私室には、低音量の薄型テレビ音とワイヤレスコントローラー動作音とが非常に旋律を奏でていた。

俺の言葉でほのめかすのなら、混沌と無機質。

「へ？ちよつと、話しが読めないわ。今はなしたらいどう？」

無傷でボスを粉碎する古見子。

「いいだろ、今はゲームに集中する時だ。今は集中するんだゲームに、そのあとに言いたい」

結構割れながらこ、真剣に言つてみた。

「笑」

笑つた。古見子は笑つたのだ。肩で笑う。

「ちよ、あんた、私を笑い殺す気？あはは、真面目なあんたが真面目口調つて、本氣で言つているの？」

全然把握できない笑いのツボだ。どう対応していか……分からない。

「まで、笑うな！笑うとはげるぞ。」

沈黙が走る。

「…」

ヤバつ、眼が虚ろだ！救急車！消防署！ハイライトが消えかかっている。

「よくよく考え方みただけど、アナログテレビの上に…飾りとか、どうでもいい。家具とか置いたりしてたよね。昔」

飾りはないと思つけど、何の話しが？

「昔は、良かつた…そんなの過去という曖昧な記憶とともに、比較した勝手な言いつけだよ。現に、私はアナログテレビ…ブラウン管のテレビの上、よく飾つていたもん。今はちょっと、寂しい…」

カチカチ

カチカチ

昔と今、…確かに、懐かしんだり、悲しんだり、するのは、過去の記憶をベースに、今はないやるせなさ…が、そうさせているんだと思うよ…僕だって、

その瞬間、一瞬だが部屋の隅に置かれた大剣が脳裏に入る。

他人事のように言われる悲劇も、俺は17才と、短い人生で一度だけ経験したことがあった。

黒いどうしようもなく黒いは、俺が体験した悲劇の象徴だ。過言ではない…

「寂しい…か」

次回

通り過ぎた過去の記憶

ゲームを終えた彼女に僕は一言「ひづひづ」のだった。

「もし、試験が受かつたのなら、何処かへ旅にいきませんか?」と…

おれの家族はみんな死んで、僕一人。

おれが殺してしまったんだ。

正気の沙汰ではない。狂っていた。

武器による呪い…それはただの言い訳、おれは、単純に心が弱かつただけだった。

狂つてしまえば、楽だろうとか、もうどうでもいいとか。

そこから生じる、報われない結果だけが残ることも考えずに…

だから、そうなった。

元から一人しかいないのに、独り立ちなんて…笑ってしまうよな。  
けど、最後の後始末くらいはさせてくれ、殺してしまった家族ともう関わりのない。

本当の意味での独りにさせてくれ。

昔の俺が志しにしていた唯一の願い。

誰とも、血縁や友達、関わる全てを無くしたいと…誰も何もいらな  
いと…

「昔のあなたは可愛かったのね。」

イトコの声が聞こえたと思うと、

「答えは、『良いくわよ』よ」

我に返れば、古見子さんは何か、言葉を返していくのではないか。  
え、おれ、なんて言った？

「あの～すみませんが、おれなんて言ってたの？」

「ううたえるより、直接聞く。」

「あなたが私と共に、世界を旅するなどと書いてたわ。」

「そうか、我を忘れて、とんでもない事を書いたかと思った。が、思  
い違い普通だ。」

「その答えは？なんと返したのですか？」

確認の為、再度訊ねる。

「オーケーと言つわ

「そうか、オーケーなのか。

⋮

「ゲーム楽しかったか？」

なんか急に、語彙不足と話題不足に陥つたな。これは何だ？。

「楽しかった？今期もまた血元記録更新つて感じで、」

あれ？いつの間にか、ゲーム機が綺麗にてレビのトドに収納されてい  
る。

!

こいつは大方、凄腕収納の達人でも慣れるじゃないかと言つべからい。  
俊敏に片付ける。

「あの」「だわ」

被りもどきが発生した。

「俺から言わせてくれるか?」「いや、私から言わせて…」

やんと叫び、主張したい彼らなんだ…

「ど、どうぞ、そちらから、…」

控えめに譲る。これは厚意だ…

「じゃあ、宣言して良いかしら?コトシラ?」

：

「いいよ、何言われようとも、大丈夫だぜ」

イトコの古見子さんは、なんだかよく分からぬけど、深呼吸をし始める。この行為に何の意味があるのかは、分からない。だけど、彼女にとつては意味があることなのであるつ…

「あなた私のこと好きでしょ?」

!

何を言つてゐるんだこいつ。

なぜ、そのような文を紡ぐ？

誤記を誤読している。…ではあるまいな。

「(1)名答。大正解だ」

カツコ良く口が動く。意に反していはないか？  
いや、体は考えよりも正直だ。そう言つ、相場が定められてゐる、  
本でもつて記載されていた。

一番初心に返るんだ！おれ！  
初めての出会いは、いつだ！？

思い出せない。その前にイトコとかいたつけ？その前、彼女は誰だ  
？彼女はイトコの古見子さんだ！  
それ以上でもそれ以下でもない！  
血縁関係は若干使いだけの親戚だと断定する。  
だとして、なんだ。

記憶があやふやなとか、記憶すっぽり無くなつてゐるといふか。  
まず、おれ、友達がいないし。

わかつた。全てが幻聴だ。  
幻覚と悪夢に襲われているんだ！

よし、この話を手つ取り早く解決する策を思いついたぞ。

「一発、殴らせろ。」

暴力で下らない。幻影を葬つてやる！。

「テレ隠しの行動にしか、思えないわよ

何とでも、ほざけばいい。今日の俺は絶好調だ。

「俺が殴りたいと言っているんだ。殴らせろー。」

明日の試験なんて、カンニングでどうともなる。今の俺には、過度の緊張の所為で、可笑しな幻影が前方に座りすくんでいるのが、許せないのだ！

構える。正しい構えだ。

先生に習つたからな。当たり前だ。

「…」

「そこまで言つのなら、殴らせて遣らなくはないわ」

羽織つていた。ジャージを脱ぐ。

ガサガサ

ゴクリ

「ああ、思つ限りの力を握つて、拳をふるつが良いわ」

無防備過すぎる。彼女は正座。田は閉じたままだ。

「怖くはないのか？」

「怖くはないわ」

「そうか

「一つ、お願いがあるのだけれど、」

「なんだ。言つてみる。」

「あなたからの質問は、何だつたの?まさか、殴らせる!ではないでしょ?」

頭に浮かぶ。

「あの」「だわ

「ああ、あれは、もう夕方出し、帰った方が良いじゃないかって、言おうとしただけだよ」

「あら、そう…」

「いくぜ。これが真実だったら、こんな街をいつまでいたい

「…うん」

バシュン、ズバキッ

……

試験当日。

なんだか、審査員思つて、いたよりも偏屈だな。

そこには、長袖長ズボンのラフな感じの男が立ちすくんでいた。

「それでは、回答用紙と鉛筆を配るから、絶対それ以外の筆記を無知あわせるなよ」

今日もいい天氣だ。アイスが食べたい。

試験会場は、『我バルト王国』の首都『ノキベ』のとある一角にある『クノベラクドナス』。

王国最も領域、聖域と言つた方がいいか。

ここには、古人からの言い伝えがあつて、神が降臨し、全てをを葬り去つて帰つたといつ。

まるつきり、間抜けな話しだがバカには出来ない。なんせ、堅つ苦しい國の長や役人が神神神神信仰心むき出しへいるからな。めんどくさい事に巻き込まれないよう、神つているが、いつ、神病院にかかるか分からぬ。

だからこそ、試験は筆記に置いては、有利と言つべきか。

殆ど、神類で助かると言つた、別に、簡単な訳ではないが、出て来る問題に結構、高確率で神類のワードに絞られるため、ああ、もう、強いて言えば、簡単だ以上！

「それでは、問題用紙、回答用紙、受け取つた者、さつさと始める。

失格にするぞ！

それから、休んでいる人は即、失格だぞ！

あと、消しゴムを使用したり、鉛筆の芯が折れて記入できなかつたり、回答枠から線が飛び出したり、紙を落としたりしても失格だぞ！  
最後に、頑張れ。」

言いたいだけ言つてくれて、お疲れさん。悪いが俺は、今言つた注意に該当するへマはしない。

どうして、そこまで自信過剰に判断できるのか疑問符を捧げる彼らに説明するなら、今の今まで、爪楊枝と墨汁だけで、授業を受けていたからだ。

それと、…

天井に張り付く蛍光灯を見上げる…

家におれを待つてくれている人が居るから…

絶対失敗なんて出来ない…

次回

諦めるな。前をみろ、  
友達になれそうよ。

母は言いました、「そんな、死ねない人間に育てた覚えはない！」

問3) 上記の演出から見て、適切な応答を答えよ。

答え（神を称える）

本当に、こんな問題ばかり並べていると、まるで奇人が書いた隨筆の用に見えてくる。

早めの内に書き終えないと、こっちの精神が狂いそうだ。

筆記如く、鉛筆を滑らす速度は一定で周囲の音響と同調して、至極場にとけ込んでいる。

それでいてか、試験にこれまでにない集中力と可動力が追加される。怖いぐらいに…

…恐怖さえもこみ上げてくる。

考え過ぎかどうかは知らないが、アイツ等はこいつして、洗脳じみた、儀式と言つべきだな、そう言つた儀式を俺らに強要して忠誠心を言えつける策なのだろうか？

…手は動く。頭も働き冴えている。

この調子で行けば、確実に成功を納める。  
だがしかし、何かがこみ上げてくる悪寒。

気の所為と言えば、無論気の所為になるのである。考へても性が

ないが、考える」としかできない。まるで尋問だ。

「テシフは、ふと、何処でもある教室、訂正、聖域を視線だけを巡回させる。

「彼らは、何だ？」

彼ら、僕らから観ると、彼らはようやく視察のそれと同等な巡行を施している。

つまり、彼らは、このお国の上等にあたり、王国の所有を有する。天皇な輩だ。

これはこれは、女々しいお嬢様まで登場の様子だ。毎年毎年二つして、低受験者共々の視察を繰り返し行われているところのなり、さぞかし退屈な動物園巡りであろう。

「彼らに、鉛筆でも投げてやろうか…」

回答用紙は既に、神で覆い尽くされている、完全回答だ。終了時刻まだまだ幾度か、時間が余っている。

心にゆとりが出来たからこそ、言えた口だ。それでも、つぶやきレベルでほざいた口ではある。

考える猶予もなく馬鹿な口が開いたまでの話だ。

と言つて、呑もじいろを探す為、再度彼らを吟味。

「…」

なんだか、この街ではどう観ても浮力が違います、物理的に浮い

て見えそうな、女々しいお嬢様を取り囲む、白ずくめな連中は、実際に邪魔苦しそうだし、暑苦しそうだし、観てられない。

頑張つて働いてる熱意的なものは感じるが、残念ながら脳内で存在削除しています。

一方、女々しいお嬢様は、このお国の上王様。とは、僕の知識からは判断しがたいが、外見から観て、肯定を呑もう。

まず、装備品からして品質、デザイン性、実用性の無さ、が一段と格別だ。次元すらも歪んで見える。

「えんぴつでも投げてやろうか…」

おっと、いけね。

少し前の声音量より、若干大きめの声がため息と共に逃げていった。

念の為、顔を伏せて、平然を強する。  
わきの下から、横目で様子を伺つ。

幸いなことに、審査員は耳をくぐもるだけだった。

「ふ~」

精神を落ち着かせ。顔を上げる。

!

おれは、生きていてここまでバカな奴は観たことはない。  
一番始めて、一徳べきだったな。

前方に居座る。受験生。

脳内削除も完璧に、完了していたがまさかこじで伏線が忍び寄ると  
は…

受験番号記載の番号布を安全ピンでくくつけて、始終、落ちとかな  
い」様子の受験生が立ち上がった。

「やつてられねー、帰る」

受験生はスタスター歩行し、教室を飛び出す。

ん？それで？

…もうおしまい？

「哀れな愚民ですわ」

お嬢様、が喋つた。

思つてたより、古典的で助かる。

第三者の立場から傍観してると、世界があからさまに見えてくる。  
都市伝説的な受験生、その言葉だけを言つために生きてくるような  
お嬢様。

けどけど、やっぱり俺には、アイツしかいない。

早く帰つて、家がどうなつているのか。  
出迎えて暮れるのか。

考えるだけで満たされる。

と、そろそろ時間だ。

試験なんて言つても所詮は、紙と筆記で力キカキするだけのお遊戯なんだと実感の色が隠せない。

「えへ、それでは、終わりだ。終了終了、筆記を置きたまえ」

黒板の教室は、なんて物寂しいものか：

イタツ、

激痛は一瞬だ。どこの一般生徒が放り投げたのが偶々頭部に直撃したらしい。不覚にも痛点を突かれたと述べるべきだな。

頭をさするながら、剥げていいか確かめる。

大事には至らなかつたが、もしもの事柄を想像したら… それだけでゾッとする。

「ハハハ、無用に筆記を投げるではない、投げた者は失格だぞ～」

は、  
へ、

ざまーみる、いわんこつちやない。

氣を抜いて油断するから悪いんだよ。先生始めに言つていただける。紙じゃなくて神だ、筆記、回答用紙、問題用紙合わせて神と呼ぶ。この聖域では、三つ揃つて、神の私物と呼ぶらしい。既に、この情報は情報屋から引っ張つて来たからな。

「先生へ、そんなのないっすよ～へへ」

「ちょ、聞いてないぜ。ルールをもつと分かり易く解説して欲しかったー」

観ろ、木偶の坊らが戯れ言を訴えているぞ。今夜の飯は美味しいく頂けそうだ。

「あれ？綺麗なべっぴんさんと厳めしい近衛らはめどりに行つたんだ！」

帰つた、としか言えないだろ。

「四の五の言つ前に、後ろから紙集める。答案用紙と問答用紙は、「ゴミ箱にでも捨ててくれ、」

答案用紙と問答用紙？嗚呼、回答用紙と問答用紙のことか。

言われたとおり、一枚の用紙を握力で圧を掛け押し縮め、紙屑ボル形を整え、教室の隅に、設置されたゴミ箱に大車輪投法で放り投げる。

見事に吸い込まれる紙屑。

あれ？さつきまで、手に汗握つて、記入したあれは、どこ行つた？  
そうか、「ゴミ箱に捨てたのか…

すると、後ろからえんぴつを回収する生徒が近寄る。試験が終れば、ただの他人。

…えんぴつ…を握つてゐるぞ？この一般生徒。おれのえんぴつが欲しいのか？

変わつた者もいるな、この世には。

「ほれ、えんぴつ

「え、あ、うん」

ちょっと、拳動不審で穏やかな人。

多分、この人も苦労しているんだろうな～感傷に浸るおれ。

「では、これで解散とする

これで終わりかと、弱なる物足りなさとやっと終わりかと、労働感に誘われる。

「ふー」と一息切らし、

「さて帰るか、過ぎ帰るかっ

おれは、オレでらしく。両手に何も携えずに、教室を飛びした。

この時点での僕は、まだまだ、全然知らなかつた、知るはずもない。ここまで、脇役と思われ、一度と関わらないと思いすら起きない彼らが、いずれ、深く関わってしまうことに…

次回

帰宅路につく。

ここから自由だ。

明日は面接だ。気を引き締めなくては…

僕はコトシラ。帰路に定着し、今は落ち着いた歩調で一足歩行の真つ最中だ。

神の聖域は、王国最大の建造ビル、通称『バマクラマ』の北から斜め八十度に広がる『自由線境界』の中央に分布している。

普段は『自由線境界結界』で一般人は観光も出来ないが、この特別な日だけ、場内に入場出来るってわけだ。

イメージは、なんだか安い造りのミステリーサークルにもよく似た地上図で取り囲まれた廃墟の学校のような、如何にも、風変わりと近寄りがたく悪趣味な仕様が施されている為、歪だ。

広さは、『マイガル広場』四個分と思っていた以上に、狭い。  
教科書に載っている画像写真を見てもそうだった。

未練がましく、もう一言言うのなら、聖域内に入る時など、バスとか、証明書とか必要ないらしく、威風堂々とポツケに財布と小銭だけを詰めて、ガリマタ歩行で聖域を去ろうとはしたが、

クールに外に出た。

ちなみに、おれは商店『ハジキ』道草を食おうと思っている。

時間帯にしては、午後二時を回つており、程良く、思想錯誤に小腹が空いているような気がして、いた事による、自分自身の食欲精神が刺激され『食べたい』と思いたいが、『食べたい』と想つてしまつ

たのだ。

「なぜ、想つたかつて？…カナメはやはり、昨日のアイスが心残りだつたから、ハハ」

自分で自分を突っ込みます。小難しい語源を並べて誤魔化すより、初めっから、アイスが食べたかったと言えば良かつたんだよ。はは、ウケるウケる。

と、前方不注意でじなたかとぶつかるコトシラ。

しつかりしるーコトシラー

「おっと、いけね。」ん面なさい？何方さん？…」

おれ、コトシラはぎこちない体制と不バランスと揺らぐ体をあつとつと、と額に手をやり、状態修正しながら、地面ばかり観ていた視線を前へ…

「すみません…」

「その前に誰だよ」

あ、

思い出した。ここ、受験番号419番の『やつてられるか！帰る！』君だ。

名前と顔を覚える習慣の無いおれでも、コイツだけは、伏線で脳内に血の気が弾立つほど印象を獲得している。

「」は尊敬と敬意を孕んで省略して、『シイク（419）』君だ。

「なんだ。シイク君か、何をしているんだい？こんな所で…」

今日は気分がいい。偏見的な彼の姿だけ許すし、立ち話もしたい気分だ。

「シイク？…キミ僕の知り合い？かなんかだけ？僕記憶に無いんだけど」

僕とは誰だ？ああ、シイクか。

「そつそつ、おまえの知り合い…で、気に障るのなら控えるけど、自動販売機の前で右往左往立ち往生しているのは…どうしてだい？」

お金を落として、茫然自失となっていたが、金が無いから邪な考えを企んでいたかのどちらかであろう。

試験中に罵声を吐いて教室を飛び出す奇人だぞ？ろくな人間ではないのは確実だ。

「あ、いや、これは、自分の情けない姿を悔やんでいただけです。」

角度を変えて、自販機を観てみると…彼の言ひ通り、鏡の劣化版並みに、冴えない眼鏡がそこにいる。

「メガネの調子が悪いのか？発狂してしまつぽじこ、レンズの度が合わなかつたのか？」

心で笑いながらも、クソ真面目に返答する。

「あ、いや、あれは…恥ずかしい所をお見せしたようですね。あれは、反抗期です」

うふ、シイク君。羞恥心とか備わつていてほつとするぜ。何よりだ。「反抗期？お前は、社会的に一人前になつて、独り立ちとかしたくないのか？親孝行したりしないと親が悲しむぞ？」

我ながら、俺の人生観では説得力もないとんでも無い事を口にする用になつたもんだ。迅速にアイスが食べたいし、今の言葉は墓場まで持つて行こう。

「親？笑わせますね…うひや、親なんて、今の世に生んでくれて、ありがとサンキュウベリマッチつて所ですよ。」

親に虐げられる気持ちは僕には、わからなくは、ない。だって、殺しちゃつたもん。

「それもそうだな、親孝行はお金で解決する。ただし、それは哀しいこと…」

チラリシイクを面と向かつて觀ると…

メガネが覆い隠す顔は、意外と整った顔立ちで、びっくりした。

「僕も終わっていますけど、貴方も綻びますね…」

意外と良い奴！

「これもなんかの思ひ出しだ、商店『ハジキ』で美味しいアイスでも飲食しに行かないか？」

彼とは、馬が命づけられて分かれるのも中途半端な気がした。そこでの提案だ。嫌な感じはするが悪くはない。

ただ単に、同類の磁力が働いただけであるうと察する。

「良いですね。行くとしましょうか…それと、質問があります

そう来るか。でも、問われたら答えなくてはな。

無言で、言つてみろ?の仕草をする。

「僕の知り合いではないですよね?」で縄絵を知ったのですか?」

想像はしてた分、返答には困らなかつた。

「お前の席の後ろ。…から高みの見物で知つた。」

お前のその番号布は、本名なのか?妙にとつ掛からなくて、不安の汗まで垂れてくる始末だ。

「僕の存在なんて忘れてしまつた方が賢明なのに、…敢えて、覚えて声を掛ける辺りから何か良いことでもあつたんでしょうね

「ああ、そうだが」

王国のある一角に徒歩で進行中。

「良いですね。僕からも何か、差し上げて良いでしょうか?」

なんだか、気持ち悪くなつてくるのは気の所為か？

「」

ん？ 消えた。

どこ行つたんだ？

おれは、その一瞬で何が起きたのがわからなかつた。  
何かが変わつたようにも思える。

しかし、何かが変わつた氣配がない。さつきまで居た街並みは町並  
みのままだ。

判断に、どうしようが混じるがまだ現実だ。

正氣ではある。

並大抵のことらり何とかなつた風に、…何とかなつてゐる。  
しかし、しかしだ。

どうして、シイクはいない？

意味が分からぬ、全く皆無だ。話しがつかめない。

……

やっぱりか。呪いは持続中つてわけか。

『忘れるのない』

襲いかかるか…

ま。気に悩むこともない。

バグつてゐるのは、俺の方だからな。

この後でコトシラは、商店ハジキでアイスを買つが当たり付きで  
もないアイスに、当たりがでた奇跡は、彼の仕業がどうかなんて知  
るはずもない。

シイクは、一番始まりから存在していなかつたのだから…

時間は経ち、我が地元と実家。

コトシラは自前の持ち合わせた。脚で故郷まで辿り着いたのだ。

「フー、五時間ぶりの家だぜ。」

ドアノブに手をかざす。

年期の入り浸る突起は、ひんやりと冷たい温度がほとばしる。

自動ドアとか思つたら、違うんだなこれが。

「あら、何方ですか?」

何とも言えない。棒読み。

おれは心なしな、言葉に温まる派なんですよ。滑稽ですよね?

次回

明日は休め。



動静、微動だにしない。

其れ即ち、この家の動向だ。

「あの～ 古見子さん？」

「何かしら？」

おれは所持品ゼロ、それでいて、驚異的な速さで家内にあがる。

ゼロではないが、財布とそれ相応の小銭がポツケに混入している。

歩いてる時は、ジャラジャラ効果音は響かなかつたが家にあがると、息なり発声を上げる。

どんな構造になつてゐるのか、これを購入した完全西円均一『マガノルノライス』に問い合わせしたいと思つた。

思つただけだ。

「ソリで腰座むことになつたのは、おれの所為ですけど、恨んでいいませえ？」

よく見なくとも、彼女の頬はコットン纖維質のテープで痛々しい。やうのこの門をぶつける。少なくとも確認のためだ。しうつがない。

「別に平氣ですけど、問題はないわ」

恨んではこません、と答えたのであります。

「ん? 一見、前より生活感のある家の見取り図に変貌しているが、掃除等の家事をこなしたのか?」

引き出された出かけた後の記憶と、今観る、[家の景色]とが一致しない。

要するに、綺麗に片付けられている。

暇なのか?思つまでもない、今なのであります。選りすぐって腕を掛けて掃除したに違いない。

「う……ん」

一応。

「ありがと」

午後五時、胃の内部では生半可に溶けたアイスが吸収されていく頃  
合ひだりつ。

自覚はないが。

そんな、じつでも良ことを思想しながら、おれはその足で茶の間へと移動する。

この季節、外は薄暗い設定だ。現に薄暗い。

「アーリヤット」

古見子さんが先に、こたつに和んでいる後に、カタカナ口調でゲーム機をワイヤレスコントローラーで電源を入れる。

言つておくが茶の間に、ゲーム機本体は存在しておらず、自分の遊戯室イコール寝室から、出力コードを引つ張つて来てのゲーム機の起動だ。

「午前中はずつと、将棋遣つていたし、今回は『風のクロノア』 +<sup>2</sup>でも交互プレーするか?」

説明しているわけではないが、午前中は内蔵ゲーム『将棋』を仕切りに、一手一手返しプレーしていたのだ。

「何でも良いわ。遣るなら徹底して遣るだけ

そのノリ、おれは好きだ。  
一番ゲームが遣りやすい。

雰囲気的に。

「それでは、行きますか」

ボン

キリキリキリ

ホワン

起動音といい、高画質と良い、最新鋭のゲーム機はとても好感覚に、楽しめる。的確な言い方ではないが一文字で、

愉快だ。

瞬きする間もない、ロード時間にふと、思った。

多分、おれは矛盾している行為行っているのかもしれない。と、

ドコからドコまでが、矛盾しているか…言いくるめるなら、生き方についてだ。

『過去おれ』は、独りで生きていく、苦惱とお菓子さえあれば充分だ、などと言っていた用な気がする。

『今おれ』どうだらう?ほん少し、暖かいこの気持ちは何だらう?知つてはいるんだ。分かつていなフリをしていだけだと…

初めっから、弱い人間で、実際にも強い人間なんて居ないのだと実感する。

これが現実。

どうしても、人間な俺たちには、そう言つ者が必要なんだ。  
どう言つもの?  
どんなもの?  
もの?  
いや人

人生のパートナーが…

「聞いても良いかしら?」

「ジモービル、」

こたつには特殊加工を施した電熱線が取り付けられている、使用するときだけこたつ内の気団を暖めてくれる。

夏には涼しく快適に、

秋にはほんのり熱く、

春は、微妙に寒い。

と設定され、設計されている。

豆知識だと思つてくれ。

「夕食とかどうするの?」

把握していたわけではない。

そうなるような気はしていただけだ。

「カップヌードルとかで、良くないか? 手軽く」

健康面に配慮されていない、食品を選択する。…彼女も読み通りだ  
るつ。

おれの華麗なる朝晩の食事種は、

カレーラーメン弁当だ。

一から全て、コンビニ品。

自分で言つて笑いそつだが、前にも同じ事で笑つてしまつたので  
今日は、お預けだ。

「それはちょっと、マズくないかしら?」

「どちらのマズいだ?」

食品自体の味での過程の不味いか？

では無いと肯定しての

食品種の厳選が誤ったか？

ラーメンは嫌いか？栄養面での気遣いか？

ここま…

「分かつて、これからは健康にも気を使つよ。」

拍手ですね。なかなか言い出せないよね。僕も成長したな、選択肢の選び方…

「あら、分かつているじゃない、そう、それ」

ああ、生命再臨回数がぬきそつだ。

「はー、ぱす」

本体とコントローラーを繋ぐ紐がないため、放り投げ、手渡す。

大丈夫、彼女に任せれば、必ずゲームオーバーは回避できる。

力チャ

「へビにに行くのかしら？」

「ドッカラつた、？… 憲り所にお手洗いしだが？」

上半身を錐揉みしながら、手を突き、立ち上がり祭に、言葉を返す。

憲りはトイレ。

「うそ、いつてらっしゃい」

彼女のいつも口語が、たまに脱線してしまった傾向は敢えて、とやかく指摘しないことにした。今決めた。

ギロギロ

冷たい廊下を一般的な要因で踏みつけ進む。  
毎度毎度語りうが『歩く』が正しい表現。

ギロギロ

足音がビビッたがこれはいつものことだ。年期が入った五十年前の建築物だ多少のボロは許すしかない。

ガチャ、パタン

おれが家族というモノがまだこの世に留まっていた時は、まだまだ、ガキで今よりずっと楽しかったに違いない。

仮説論類に、よっぽど近い言い方だがおれには、過去は過ぎ去るモノで未来は、大剣に貪られるモノでしかない。

願つたモノは叶つたが、きっと誤つただけの性もなく哀れで悲惨なお話なんだ。

いつもだつたら、そうであるひとか、そつだつたが用意られる。けど、こればかしははつきり言いたい。

ザザー

ガチャ、キイイ。

どうも俺は、脳内演説が人より一、三歩得意らしい。  
滑稽な人生観を長々と語つて何になる？

ハハ、説得力が感じられない、おれはもう、人としての何かが虫の  
息なんだろう。

自覚はしている、親殺す所から自覚している。とうに語っていた。

ギ「」

本当に名残惜しい気分だ。  
体が壊れる前に心が壊れるな。

ギ「」

「よう、元気してる？」

これは自分の声、古見子に話しかけたのだ。

「相変わらず、元気してるわよ」

あつという間に、行つたことのない初めてみるステージへ進行形で  
進んでいるキャラを観る。クロノアだ。

「凄いな、お手上げだ、お前が如何様を屈してプレイする人ではな  
いとは、思うが、疑い深い…」

信じていない、訳ではないがそう言いたい。願望？

「こんなのは容易なタイトルは、如何様する価値がないわ」

つてことは、何処かでこうそりしてたりするのか？他のタイトルでは…

次回

強火で三分

あらすじに、予め細工している。

ゲームは好きではなかった。好きではなかつたが弄ぶのは好きだつた。

イカれた事にも、おれは確實に着いていない。ゲームが俺らを、進化させ、ゲームが俺たちを縛り付けたのだ。

証拠、何もない。

「次はおれの番だろ。貸してよ」

怒鳴るように優しく呟いた。この様な高話術を磨くのは、苦難な道のりと道程とが入り浸る、険しい道筋を通行しなくては身に付けきれない賜物である。

「良いわ。取つてみなさいよ。…けどね、渡さないわ

ムキになつたら、こんなの反応を反響するのか…なるほどなるほど。

徐々に、彼女の脳内回路が手に取るよつに解つてぐるのせ、時間の問題らしい。

「そんなこと言わはず、な、早くよこせ~」

有望視なものを見方で、説得と回収に当たる。

「性に合はなことは、避けるべきね…」

田を反り曲がりして、アナログコントローラーを放物線上に乗せ、徒手する。

「お…わっし、

健気なしへHビフライをキャッチ。

「うーからは、おれの時代が始まるぜ。」

コタツの角に、上記の言葉をぶつけ、操作開始する。

確認もとらずに、世界観移動を選択し、強豪揃いの場所に転生を図ってしまった。

ピコン、ビルビルビル。

わっふー。

「な、なんだー、語彙では表現できないそれがウソウソーー！地獄編だ！」

画面中央の可憐なしげにキャラクターが、愛くるしへ悩んでいた。

ひとまず、一時停止。

「どう？ コントローラーだけで電腦世界から落としたのよー・慰めしたい通り過ぎて、有頂天が精神を駆け巡るでしょ？」

確かに、確認と同意を取らずに先走った行動は、血迷った結果にしかならないことがよく、

思い知つた。

あれだけの語彙では表現できない軍勢が中央無人に、物理法則をすっぽかして、爛々乱舞を展開してしまつたつては、打つ手は既無に同等だ。

「やられたよ。おれの負けだ…」

折角、おれの気持ち悪い兼用で動きに動くコントローラーをばきを、トクと診せてやみつと思つたのに、

それつきしのそれだな。

「もしもの事は起きないと想つけど、負けたら、夕食と一緒に作ってくれるかしら?」

一方的な条件だが、拒否権は剥奪されているに同等だ。おれ自身がゲーム使用権限を剥奪したようなもんだからな。

迷つたあげく、テレビ画面、再度確認と現実逃避をする。

そこには、観るも無惨な、語彙で語源不足で表せない『それ』がウ三四ウ三。

愛くるしくキャラの眼前には、『それ』がすぐそばまで来てくる。

「へえうるわー…」一択しか無いし、片方は自殺行為よ?」

一択とも、爆弾だ。

一つ、ゲーム再開、ぎゃー。

一つ、コントローラーを返す、ゲーム再開、ぎゃー。

後者の場合、おれの方に所有権があるため、イトコにやらせた所で、イトコが無操作に、スタートボタンを押すだけでおれの敗北が決まる…。

おれは、冷や汗を欠き垂らしながら、イトコな彼女の双眸に眼球を送る。

大きく深い瞳は、おれを観ている、…何を考えているのかは、論されも上訴出来そうにない。

これをおれの危うい語彙量でほのめかすのなら…

漢字二文字で深林。

が俺から観てのイトコの印象だ。

「了解だ。承知した…」

少し休憩とばかりに、コタツテーブル上に置いて置いたコントローラーを手に取る。

引力の影響力交えたかのよう、吸い込まれるハンド。

本気も本機も部屋の中だ!…これは、コントローラーとハンドしが

ない！

ヤられると分かつて、ヤられる！  
別に良くはない。けど、悪くものない！  
どちらでも良い！

一番の重要視は、ヤるか、ヤられるかだ！  
「ひとまず、深呼吸させて？」

「良いくわよ。止めはしない」

ひー

ふー

みつちり、リッヂな気分。

よし、今なら逝ける！

今まで以上に、力いっぱいスタートボタンを叩く。

ギヤー

終了、『J愁傷様。

「ま、けた…せ」

当たり前だ。割り箸を横に割ると非常に見えるくらい当たり前だ。

なにせ、眼前の迫る『われ』をどうやってみけるか・自問自答をして、不可能だ。

テレビ画面の世界は幾何学的に成り立っている為、無理化が利かない。あるに会つたとしても、それ自体が世界の一部で、その道筋を通れば必ず、歪みが生じる。

必然的に成り立つ世界。テレビ画面。

出来すぎて、偶然すぎる世界。おれら。

族に言う。越えられない壁だ。

おれも、世界の理屈は了承済みだ。影響力可不可もパワーバランスも頭に刻んでいる。

そのためか、学歴は並み以下だ。  
それでもいいか。

「負けね…」

「ああ、完敗だよ。」

まあ、神様も許せる範囲内だろ。

おれの未来を代償に、しているのだから。

「んで？ もう、真っ暗だが今何時だ？」

ホームボタンを押せば、分かることだがそんな事の為に、手を可動されるわけにはいかない。一種のプライドだ。

「体内時計を実用化なさつたらどうかしら？午後六時を回った所よ  
…」

おれが帰宅してから、一時間しかたっていないのか… ここまで楽し  
んでおいて、それだけの時間軸しか…

「へビうしたの？顔色が悪いの？それとも腹の調子が悪いの？」

根回しの良し悪しがいいね、腹が減っているんだよ。

「心配すんな、腹が減っているだけだ」

とりあえず、遊び場終わり。ゲーム本体の電源を落とす。

まだまだ、おれらはガキだからな。色々と引き締めていかないと地  
獄を見る。

「と、と、と、だ、厨房に急ぐぞ」

兎に角、コタツから出ないと話が進まない。おれは勢いに身を投じ  
て、螺旋の如くとコタツから脱出する。

それは、イトも同じだ。

普通に、コタツから脱出。

トコトコ厨房に向かうおれは小学生の様に、輝かしい無邪氣な姿に  
見えたであらう。

厨房目前と差し掛かった所で、ふと、あることを思ふ出す。

今日の昼は、食材がなく。蓄えていたカツラーメンで補つたが果たして、料理が出来るほど食材は貯蔵庫に在るであろうか？「つて、買い物とか行つてきたのか？貯蔵庫は、アテにならないくらい、貧困な食材量だつたはず……」

期待と過度な不安が募る。

「安心して、あなたが頑張つている間に、調達してきたから……」

と言つのは、イトコの古見子だ。

古見子は、その柄に合わないとされる、『笑み』を浮かべる。彼女はイトコだ。

頬には、昨日の件での痛々しい有り様が現れている。応急処置は施してあるが……

「ああ、そうか、助かるよ……」

つまり、ありがとう。

次回

夕食おろか晩飯

外堀をありの巣が囲う、考えただけで怯えてしまう。

まさか、モンスターの肉片だったしないだらうな。だとしたら、厨房某台所が生臭くなつてしまつて、それでいて、慣れてしまつてしまつた、自分を想像するだけで腐つてしまいそうだ。

おれは、冷蔵庫と対面、露わに、立ち廻くす。

相対立と対照的なおれと冷蔵庫。

取っ手は、開けんとするばかりに飛び出している。

それに対し、彼女は、じつやら何を作るのかに迷つてこるうじく電気のヒモを田見つめている。

…それが怖いのだ。

何を買つてきたのか、言つてくれないし、何より、何を作るのか決まっていないのに、食材売り場で買つてあやつた食材とは一体何だ？

考え方るのは良くない傾向だ。

されど、今は慎重に行きたい。

冷蔵庫を開いて確かめるだけなのに、こんなに用事深く心の準備をしないといけないの？とか言われただけど、なんだか怖くて、怖くて性がないんだ。

「せめて、じつう風な物が収納されているのかだけでも答えてく

ださい。ヒントをください。」

媚びるよつに頼むおれは、怖がりな哀れなお人に違いない。でも、開いたとたん…バーンと効果音と反響音に狭まれて死ぬのは嫌だ。

「発想が豊かすぎるのよ、あなた、中身は普通よ」

普通…どこまで信じていいのか、計りが必要だ。囮を忍ばせても良い。小鳥にせがむのも良い。

つて、おい。

何言つてんだよおれ。

雰囲気に呑まれすぎだろ。何も考えず、あければいいじゃねーかよ。

かけ声と共に、冷蔵庫の取っ手を握り開門する。

ほれ

あつと言つ間に、内部を一覧出来るほどの大空間が出来上がった。

…思に過ごしは、思に過ごしだつたと息を呑む。

至つて普通が適当とは、恐れ入る。

てな感じで、普通を連想させる品々が列を創る。

今晩は、カレーだ。

普通な品物を觀ると定番色彩の『カレー』の単語が思想雇用空間にこぼれ落ちる。

「今日はもう、カレーで即決だ。言葉に出して、伝えよ。」

「今日はレタスとほうれん草を刻んで炒めて食べよー。」

「どこの口が駄弁を申す？あ、おれか。

「そんな、料理があるの？私の耳が覚えている限り、初耳よ

当たり前の朝飯前だ。おれの口でも初口に当たる造語を想像しないと解釈がつかん。

「引いても無駄だ。これに決めたんだ。変更は死体になつても変えられん」

「壊れたか、おれの口。薄々気づいたがここまでとは…」

「そこまで、大胆な発言をするのなら、そのレタれん草炒めと斬新な食べ物を作るしかないわね。それでもいいの？」

確認の意を圧す様に、返答。

心此処に在らずな発声器は言つ事を聞かずにして、紡ぐ。

「料理なんて、手引き書や調合書なんかに頼らずに完成させり、させてしまつが普通何だよ。」

冒険者は一度は、吐露したことがありそつた言い回しだ。

「……ぬうわね。なら、早く調理に当たりましょー。」

本気で口が自動的に動いた。制御のしようがない口を、黙らせつつ。

頷いて、食材を取り出す。

：冷蔵は、長時間開いたままにしておけば、節電など環境などの小賢しい勿体ないお化けがそこに辺を闊歩遊覧してしまつと妄想してしまつので、すぐ閉じる。

両手で持ち上げた作物は、低温度を維持しているため、冷ややかに手が冷たい。

まるで、凍りそうだ。

早めに急いで、イト「が用意したまな板に乗せた。

「危ないわよ、そんなに焦つて、持つてきたら…勢い余つて、包丁にでも突き刺さつたら事故死すまされないわよ」

と、言われ申されても、両手両腕が冷たいんだもの。と言い訳は心に吸い込まれる。

「おれも手伝うよ。その法が効率に良いし」

料理が苦手そうなおれだつてそこそこ、親の手伝ことかしたし、家庭科で鍛え上げたし、問題ないハズだ。

「じゃあ、米を」飯に変えて、…

？炊飯器に電源か入つていない事に、やつと気づいたのか？

おれが冷蔵のボディを吟味していた頃合いから仕込みはしていたが、わざと電源を入れていなかつた。

つて、線で觀ていたのだが、まるつきし、忘れていたのか…？

「了解」

言い放つたコトシラは、炊飯器のコードをコンセントに言えるところから始め、早炊きモードで開始ボタンを押した。

達成感の無さに驚く。

もつと、手伝わせる。

「他に、手伝って欲しい作業とか在る？手伝い足りないぜ」

イトコの横顔に話しかければ、包丁を手際良く使いこなして、緑の野菜たちを切り刻んでるではないか。

流石、武器に同じ様な刃物を両手で使っているだけは、在る。

無駄に、接近したら何気なくバラバラにされてそうだ。

「…じゃあ、次はフライパンを加熱させて、私的に適温かな？と想つた時点で灯油を注ぐの」

トントントン、まな板が悲鳴を上げている。

おれ、コトシラは、スライドする戸棚からフライパンを取り出す。

焜炉にフライパンをかぶせ、凹の字と似た相似でセッティングして、からの着火。

バチ、ボー

白い閃光と共に、青い炎が靡輪たる（ナビワたる）。

言つておくがただ火が着いただけです。深い意味はありません。

「…」

手伝う事がなくなり、辺りをぐるぐる放浪。

古見子さんの前に存在するまな板の家には、観るも無惨なレタスとほうれん草が広がる。

バランスを考えたのか。そこに、ペーマンヒーンジングが混じついた。

「…」

無言な彼女は、すでに準備を終えた熱たぎったフライパンの上に、まな板ごと放り込む。

ジャーッと、奇声と罵声を奏でる野菜たち。程よく、様になつてゐるフライパン中の住人たち。

「味付けとか、どうするんだよ?」

フライパンの住人を炒めつけるイトコに聞いてみる。

「コショウだけで充分、でしょ? どうせ、畠袋に詰めるだけだから

…」

納得のいく解答に、同意。

「明日の面接技能力表現試験とか、あるじゃん? お前は、どんな感じで受けだの?」

試験面と試験管の事について、語りたつするのだから？

あ、因みに、ほほー対一の語り合ふと思つてくれ。

変に、武道で争つたり、特技を晒したりするよりは、華々しく企画ではない。

単なる面接だ。

「……」

「おまえがひつて、くわいひつて奥こですよ。お見子さん」

背中越しだが、向となぐ、口に出すのが恥ずかしこ様子に思える。

「将来の事とか…かな？」

そうか、わづか、夢を語つたりしていたのか。

昔の古見子さんは可愛い事を言つていたんだな。

イートコの古見子さんの事を少し知った。コトシラだった。

次回  
食べ物

これは、なんて料理だ？

そんじょそこいらの家庭的な実に、お手軽料理と命名した方がいいのか？

お皿似盛られたお野菜は、主食として、一品だけ。

これが始まりの先ず始めのメニューとなるのだつた。

おれの日常では、弁当かそれ以外の加工食品。主に、カレーを中心として廻つてゐる。

食品の入手方法は、近くの市場だつたか、コンビニだつたか…大概は、コンビニだつたであろう。記憶までもあやふやになるほど、食に関してはズボラで取り留めが無かつたらしい。

自覚すら、させられる。

さて、お皿に盛られた食べ物の主觀的感想は止めよか、長々と語つても飯がマズくなる様な感じがするし。

装備は、右手にお箸、左手にお米だ。

つついで貪る方が寂しく感じられないと、イトーヨの提案で、無駄に皿が平坦で大きい。

「どうせなら、コタツの中で食べても良かつたけど、今日は調子が悪いから、コタツの上で食べる」とするよ

夜になれば、より肌寒く感じられる季節なのでそこまでしてみたいモノだと、何となく、言つてみた。

「?.またおかしな事を言つたのね、あなたは馬鹿なの?」

トイド「」、「下等動物の漢字」「文字を告げられ、とつてに領いた。

すると、安心した顔をして、今度はトイドが言葉を返す。

「…私からもおかしな事を言つておくけど、大抵の人は行儀に忠実、それは誰だつてそうであるが、基本的に何処でどう食べようが人の自由だと思つています。」

その言葉には、端から見て不愉快にさせてしまう食べ方でもよいし、とでも言つているように聞こえた。

「…つまり、今こつして、片足でゲームを遣りながら夕食を食べても良いと?」

コタツに足を入れている為、外側からは遮つて見えないが、おれの右足には、器用にコントローラーを操作しているの様子だ。

それでいて、ゲーム見取りの画面を見ながら物を食べる、少し異様な光景がそこにはあつた。

「それも許せる範囲内だと思つわ」

その言葉を聞くと、段々フリーダム化が信仰してしまい、挙げ句の果てには律儀にマナーを守る人はいなくなるぞ。

…よし、その問題を話題してみるか。

むしゃむしゃと汚らしい食い方で、論を述べる。

「あ、そうだ、今の話で思い出したんだけど、許容範囲が広いと逆に、未来が怖くないか?って話があつて…」

事細かに、話す。

「～最終的には自滅するんじゃないか?って、結末になつたんだよ。その意見に対しどう思う?」

ん?、話がズレでないか?ま、いつものことか。

「確かに、偏った見方や一種の考えだけに縛られると、人を次の段階に進めないとつし、ストレスだつてため込んでしまうだろうと…どこの友人が言つていたけど、自滅のイッテを迎るのは、遠い未来と…言つていたわ」

やばいな、味付けコショウだけなのに、美味しく感じてしまう。何でだろう?..

「多分、限界を越えるのが楽しいだけなんだろうね、人類の大抵の人は…」

イトコがまとめを表する。

「話題を出して、なんだけど、話を変えて良いかな?」

おれはまた、ふと思いついたのだ。

「確認なんて、とらなくて良いわよ。好きに話を出して良いわ

遠慮はするな。と聞き取れる。

「さつき、ゲームで一択の選択勝負が在ったが、あの語彙では表現出来ないあれはどうやったの？」

純粋な質問だ。裏技の領域を越えプログラム 자체を書き換え構築したって感じだつた。

「何となくよ、やってみたから出来ただけ、」

やつてみたら出来た…もし、あの時彼女に代わっていたら、軽くクリア出来ていたのであるつか…。

だとすると、彼女が言っていた自殺行為はおれ自身がプレイする」とで、彼女がやって入れば、僕の勝利だったのか？

いや、権利はオレに働いていたため、彼女があれの為にクリアするハズがない。

「古見子さん、もし、あの時、古見子さんに代わっていたら、古見子さんは最後までクリアしていましたか？」

無粋な事をほざくおれ。

「さあね、あなたのために、最後まで『ゴールしとるとは考えにくいいのではないかしら?』

つまり、作為的に負けて相手を負かすとか、何で敵であるお前を、とかの話になるのか。

「ま、過ぎてしまった今となつては、何ともいえないが」

一言だけ告げ、食事とゲームに集中した。

色々、会話が続かない話題を幾つかだし、食器を一緒に片づけ、ただやることもなく。

「タツにこもつて、テレビを見ながらとっぷしていた。

おれ、基本的に何もやらないがモットーだから、洗濯とか、炊事的な事とか、最小限行つていない。

けれど、イトコは少しばかりは、家事に協力的だ。

それだけ、とても助かる。

簡潔に言つと楽になつた。

これも昨日件での事件がきっかけで、始まりだつたのである。

ここから、その事件の結末を浮き彫りと晒すとしよう。

一部始終赤裸々に語ると、昨日、そう昨日の夕方頃、ちょっとイカレた俺が全身全霊をイトコの頬に放つたのだ。  
すると、おれは大勢を崩して、頭を過つた位置にぶつけ、眠りの世界へ誘られたのである。

目が覚めれば、朝だつた。

恐らく、彼女がいなかつたら、おれは寒さで風邪を引いてたに違いないだろ？。

普通の人でも、そのままにはしないと思うがイトロの古見子は、おれが寝る横で看病をしていたのか、座つてゲームをしていた。

これが今田の朝の目覚めでした。

俺が思つて、ゲームの力は世界を変えられそうな気がする。

ボケていたオレは、ついついこんな事を言つてしまつ。

「俺も明日の面接みたいな試験で話すテーマは、『将来』に決めたよ」

何にしようか、決めるのがめんどくさくて決めたわけではない。

なんだかよく分からぬけど、彼女と同じテーマで試験を受けたいと思つただけ話。

「それは、いいんじゃない？、あなたには不向きなようで意外と適材だつたりしそうだし」

おれも、そのテーマでどのよつな結果になるのかは、全く持つて皆無。

けどけど、結果が全てではない。生きてきた中で結果だけにこだわる人生で楽しかつたと言える人など、数える位しかない。結果が嬉しいわけではなく、此処まできた努力と過去の自分との比較でそう思つてしまつだけだ。？

要するに、気安く人生何て物は語れない物だといいたい。

つまり、どうにかなるんだ。

今日はよく眠れそうだ。

次回

難だらう

今日は、じんにちは  
今晚は、こんばんは  
おはよう〜。お早う〜。

田覚めは、そんなどうでもいいような夢をひたすら永遠にループし、悪夢のような気分で起きたコトシラだった。

額に汗を垂らして、息が荒々しく乱れていたが布団を除けて顔を洗えば、スッキリ爽快の気分に誘われた。

いつもなら、夢なんて虚像は見ないし、増しては、悪夢なんて悪い虚像はもつと見ない。

「今日は、何か、起きやうだな…」

予感や勘が的中した事なんてのも、ぞうりにない。

でも、思う時点で思わないときより、生存率は高こと聞いた。

人の勘はよく当たる。

有りがちだ。何処でも耳にする。

と、洗面台から歩いて、居間に向かった。時計の針は六時半過ぎ。  
おれにとつては早すぎる起床だ。

おれにしてみれば早いが、イトコはとこいつと…

多分、別部屋でぐっすり寝ていののか、朝の狩りにでも出ているのか…

と言つたが、おれも知らぬ間にここに馴染んでいるのは、なぜだ？

警備的な仕事はどう行つた？

しかも、更にいえば、ぼくに対する態度が最初と少し変わつて、どうな違和感は何だ？

ま、考えるだけ無駄か。おれは知つてゐる。そう思つだけでオールオッケーだ。

そのうちひょっこり、顔を見せてくれるであろう。

コトシラは、静かな一階立て建築の家をその足で飛び出し、家よりも静かで平穏な外の世界に立つた。

：

久しぶりの早起きとはいへ、朝のまだまだ薄暗く冷たい空氣に包まれる外の世界は、果たして、何年ぶりの事だろうか？

今の今まで、寂しいようで暖かい世界を観たのは何年？何十年？ぶりなんだろうか…

恐らく初めて、即ち、早起き不足。

かんだかい、野生の獣鬼の鳴き声が聞こえるが、これもまた心地が良いものだ。

今日から早起きしよう。

そう心に決めた。

決めたは良いが、実行に移せるかが不安。どうにか、なると思つと  
じつ。

コトシラは、至極大自然な田舎の空氣を吸こみ吐く、深呼吸をする。

肺の内部に大自然が詰まつてゆく。

肺は肺がパンク寸前まで吸い上げてゆき、肺が飛び出すほど、大自  
然を吐き捨てた。

「ふー、戻るか」

ほんの数分の出来事だった。

家に戻れば、何も変わらないただ冷たいだけの空氣が迎えてくれる  
だけだった。

やつぱり、こんなもんか…

悟つたように、コトシラはため息を吐く。また、居間へ向かつ。時  
計の針は、もう、7時と言つても良い。

数分の出来事は、体内時計を狂わす。

「おはよー、古見子さん」

玄関前から連なる廊下の末端に、古見子はいた。

ダルそうな、足取り、昨日のあれはゲームの力だったのか？恐れる  
べしゲーム様だ。

「おはまひ

一言、文字じゃこんなだが力は入りきつていない。

びひしてだらひへ理由は知つてゐるがわかないことにした。

「あ～ダルい、ダルい」

と言いつつ、自室からコントローラーを手にとり、居間に再度方向を向け変え、歩行中にコントローラーの起動キーを叩いて、ゲーム様を起こす。

ダルさを表現するために、ナチュラルに首に手を添え、首を傾げる。端から見れば、あいつ、露骨にダルモーにしてつぞ、とか思われるレベルで自然体でダルさ加減をアピールしている。

何のためだよ！と聽かれても、自分の為つて答える。現にダルいから。

此処で語らせていただくのなら、疲れた体を無理して、平然たる様子を裝つても、さらに疲れるだけで、周りの人々に、不愉快と言うの災いで危害が及ぶ。

だったら、ダルピールしか無いだろ。

と自問会議の結果でそつさせて頃いています。

「よつと」

7時半、「タツ」に居座りゲームを開始する。

この姿を誰が観ても思つだらう。朝からマイナーなゲームをやる奴とか奇地審（きちがこ）の世界では、このよつた漢字が使われる）だつて…

けど…

好きな物は何物にも代え難い、んだよ。

と言つてみる。  
別に、好きではないが遣りたいからただやつてているだけであつて、  
別に、普通だ。

力チカチ  
力チカチ

「あら、コトシラ君は朝から熱心な事ね  
そこに、イトゴが参加した。

「熱心とかじやなくて、日課かな」

否定する所を誤つたが、

意味合いは「うちの方が力オスだ。

「なら、邪魔しちゃ不味いわね。…朝ご飯でも、作つとくから」や  
つくりどつぞ…」

「また、おれにも作りせる。朝食を」

反射的に、言葉がはらんだ。おれ自身も理由が分からぬ。

「…分かつたわ、」

んで、片手でゲームを遣りながら、

なんだかんだで朝飯を作ちやつて、食べた。

料理内容は実にシンプル。パンにさるそば乗せるだけなので…

「古見子さん、これ結構不味くて、美味しいです」

ゲームの遣りすぎか、味覚が狂ったのかもしれない。

「奇遇だわ、私も美味しく頂いているって感じだわ」

⋮

逡巡たる一瞬。

それには理由がある。

それは、昨夜の昨日まで遡れば分かる。

僕たちは、一度ゲーム世界に呑み込まれたからだ。

それで全ての疑問が解ける。おれが観た悪夢も、彼女があれより遅く起きてきた事も。

回想

あれは、おれらがボケてテレビ画面を長々と虚うな田で視聴していたその時に起きた。

「そろそろ、寝るか…」

理屈は睡魔が襲つたから、

「良いわ、賛成」

道理は彼女も眠いから。

錐揉み混じりに、立ち上がる。うつとした。

「…」

いきなり、日中逆転や重力が逆転したかの様に、視界が歪んだ。  
言葉が出ない。常識的に、それが道筋つて奴だらう。

蛇に睨まれたカエル然りと恐怖で一時的な言語生涯が起きたのであ  
る。うつ。

「ん? ここはどこだ?」

始めて見る場所だ。なんだかんだ、何処かの平面世界のようだ。ゆ  
とりが感じる。

ガサ、

何がなんだか、状況がいまいち理解出来ていらないコトシラの背後に、  
邪悪な物体が蠢く。

「どうしようかなー、北がどっちか分からぬ…」

学校の授業で習つた、拉致された時の為の方角把握訓練で上位クラ

スだつたオレでも、確実に、磁気の歪んだ空間では、その力を發揮できない始末。

常識上これは異常だ！意外の単語が浮かばれない。

コトシラは頭を搔いて、如何に困っているアピールを取る。  
誰か、が助けてくれるかもしれないを装つて…

ズバッ

邪悪な物体は、それと同時に動き出した。  
襲いかかった。が適切であろう。

第三者の視点からは、絶体絶命が正しい…はず

次回

死なないハズ

此処がゲームの中だと誰がいえようか？

定理で語るなら、ここは非常に別世界で在る確實が高い。

洞察力や判断力が無くとも、知っている人はすぐさま理解するはず。

ゲームと言つ名の電腦世界。

電腦世界とは、有りつ丈の導線回路の集合体。言わば、人の頭と同じ、もしくはそれ以上だつたりする。

どうして、ここが電腦世界で有る…と断定出来るか、判断出来るか、の冒頭で聽かれたのなら  
オレは素直に、おれの元居た世界には有り得ない物を観てしまったから…だと、答える。

即答の領域だ。だつてそうじやないか？常識的異常な現象を田の当たりにしたり…いや、現に『何ら違う世界』に飛ばされた自覚があるから、これは確認の一つか。

コトシラの眼中には、邪悪な化け物の姿をはっきり捉えていた。

その化け物は、知つてはいるがコトシラが知つてる限り、こんな事は起きたりしない。

ゲームのモンスター。

それがコトシラの眼中に映し出されているのだ。

先ほど、前。

コトシラは、背後から襲いかかる化け物を難なく蹴り倒し事なきを得た。

問題は其処からだ。

物理的にもあり得ない世界に居たコトシラでも、次元を渡つたり、時間を跳躍しり、する事なんで出来るはずもないと思つてたからそらにたちが悪い。

風の感触がなく、空調の音が無機質、増しては空氣の温度を感じない。

数日間、この世界をさまよえれば確実に、精神が朽ちる。

大変なことになつた。言わなくても分かる焦りと緊張感、落ち着く事なんて彼には出来ないと思われるが、この様な状況下に限つて、彼は平然だ。

逆に、この場を楽しんでいる。

「所で何か、ヒントはないのか？」

ゲーム世界に入つてしまえば、本当の意味でのゲーム感覚に陥るのであろう。

彼はそう唱えた。

辺りを巡視しだす、コトシラ。

ヒントなんて物は転がつては、くれない。

だから、探す。

周りを見回すような詮索は、かなり有能ではない。状況把握の一つとして、役には立つが、彼が探しているのは、そんな安い情報ではない。

彼が最も探して、見つけるべき代物は：

元の世界に帰ること。

もしも、思想が脱線してもその目標に、必ず、辿り着く。  
もひ、物凄い確率で辿り着く。

絶対なんて無い。そんな哲学はほつといて、まず、家に帰りたい。  
普通に思つたりしないか？  
と、コトシラの脳内会議で可決が下された。

「誰か居ませんかー」

大声で自分以外の人間を呼ぶ。

：

返答なし、おまけにヒントもない。

どひしたものか、とコトシラは悩みに悩み満ちて行く。

「どうあえず、手当たり次第に、わざりことじよつ

先ほど来た世界に、手当たり何であるのか？手がかりも無いくせに  
生意氣だ。

進行方向は、適当に決めただ歩む。

よく出来た世界のため、歩くとチタチタ音が鳴る。ここまでは耳障りな足音は聴いたことがない。設定などで効果音等のボリュームを消すか、減らすか、したいものだ。

ふと、またしても怪物が現れた。

グガー

おりや、シユワー（蒸発）

びつやう、えぐい死に様を拌めることなく消えてくれるひじこ…

最初の化け物は、氣絶させただけで外相に何ら変形のない姿でくたばっていたから、視野に納めるることは出来たが、そう何匹も観たくはない。

気が狂い出す病の魔の手が侵攻してはしまっからな。このシステムは認める。

と

三四四

は、シユワー

：一方的に、殴つたり蹴つたりしているけど、これ、これくらつたら、どうなるの？

疑問符を浮かべる「トシラは、まばらに発生する鬪技のルールに関してよく知らない。

「ま、一撃でも攻撃をもらえば、即死って事だろ」

気になるのは、その後、僕は何処へ行ってしまうのだりつと言つ概念だつた。

敗者復活は、システム上に存在するのか?と前提を肯定した上で、何度も再起出来るのか…

ますます、不安要素はつるばかり…  
誰とでも話せるのは、良いことだが、おれにはまず、周りに人がい  
ない。

どうすんの?

その果てに何が待つているのか、よく分かる。人の温もりや愛情  
が行き届く事なく滞り、残念な人は沢山観て來た。

終わりは田の前だ。

悪魔の囁きだつて聞こえる気がする。

うわ、やべ、涙も出てこない。

「う、うああああああああああああ

土下座に近い物腰で大地にへばる。

心は平常だが、体がそれを保とうとしたい。いかにも滑稽な姿が誰の目を通して、印象は綻んだ哀れ人と思うだろう。

最悪だ体が言う事を利かない。これで自己紹介したら、第一声に、『つああああああああ』が飛び交い、笑いにもならない。

此処まで体が正直だと、正直、思わなかつた。

イトコの古見子さんが助けにでも来てくれた…  
贅沢を言つているのと言うのなら、試験中、大声を出したシイク君  
でも良い。

貴族なお姫様でも良い。物静かな青年でも良い。

誰か、声を掛けてくれ…

⋮

沈む。視界はうつすらとはつきりしない。落ちていく感覚とほとんど同じ。

バイバイ。おれの人生…

⋮

「何してこらの?」

「精神的に参つていったんだ」

「おかしな子ね?医者に相談することをお勧めするわ」

「ああ、その心配は、もつ決着が付いた。」

「へ・つまつ、直つたつて事?」

「勿論や」

その声は、イトガの聞き慣れた声。

はつかり言つて、聞き慣れすぎたつて感じだ。けれど、そんなのどうでも良い。

コトシラは、ズボンに付着する、妙にリアリティのない土は払いながら、立ち上がる。

絶対何処かで、期待していただけあって、いざ登場してきても、何でもなかつた。

無かつたとは、無情感類いではなく、何かの変化が起きなかつたと言つ言い回しだ。

始めつから、演技だつた……ことはない。

此処で終わつてしまえば……それはそれで、其処までだつたつて事。

「古見子さん……」

おれは、「この言葉に、お礼を言わないとな。何時だつて、気持ちを伝えられる。」

「ありがとう……」

「……」

声は聞こえる。そこには匂ないが、聞こえてくるって事は、おれの言葉だつて、聞こえてくれているはずだ。

文法が正しいとか正しくないとそんなの関係ない、そんなの要らない。

気持ちを込めれば、何時だつて何処だつて、絶体絶命の最中だつて、

繋がる。

…かもしれない。

うん、多分きっと、そうだ。

「お礼を言われるのは、これで一回田向がするわ……」

次回  
帰る為

「今の話をまとめると、『』はそれが愛用していたゲームの中について  
事か？」

長々と話すこともない彼女は、淡々と状況を話してくれた。おれは、  
何故か理由は知らないがゲームの中に迷い込んだらしい。

「やつよ

と彼女。

この壇の発生源は、何処なのか、見当も憶測も掴めないが、見えな  
い発信機から聞こえると思えば気にならない。

さつきのさつきまで、無言で反応もなかつたのも、あちら側では、  
一生懸命おれの行方を探していた。とか。

まさか、ね。とかも言つたに違いない。

此處は一つ、良くやつたと讃めるべきだな。

「…でもよ、見つけるのが困難では、なかつたか？ゲームの中なん  
て、馬鹿馬鹿しくて、思つたとしても調べる場所ではないだろ？…  
次元的に」

現状がこうだから、違和感ありげな質問に仕上がつてしまつたけど、  
正論だろ。

「それを私に言わせて、何になるの？……やつね……強いて言えば、愛の力とか……」

「言つてくれたな、古見子さん。」いつこの場面では、聞こえなかつた事にするが吉だな。

「ふむ。……そりかそりか……話、変わるけど、此処から出る方法とか考えてないか？」

「その世界のことが、色々歪んで綻んだりしちやうで、早めに対処しないと……いけないからな。

「その件に関しては、大方、見切りは着いているわ

お、頼りになるな。これだから優秀さんは、勝てない。

「「」のゲームを壊す。」

あれ？ ブレてないか？

「壊すのは、止めてくれよ……」

弱々しい声の主は勿論おれ。

「あら？ それが駄目なら、「」のソフト内のHンディングを迎ねれば、外に出られるの推測の方がいいのかしら？」

全然そつち……いや、冷静に考えるとこれは難儀な事ではないか？

「セーブデータまで飛んで一気に、ハンドティングって、荒技を実行に移すことは出来ないか？」

ゲーム高かつたし、壊すのは可哀想だからな。いつち除けで動いて頂けますです。

「ちょっと待つてね」

無言で返答。待っている間は、レベル腕慣らしのため、雑魚を一匹殺める。

セーブデータで飛んだりするのは、難儀だからのに、まだ何個かあげられる。

五体満足に生まれたおれでも武器なしで、奴らを相手にするのは、厄介だ。

もしこれが、一度負ければ、戻れないようなルールであるのなら、おれは心構えをしなければならない。

この世に限界は存在するし、制限だらけだ。

…ん？ 今の発言には矛盾が生じてないか？

「…もしもし…コトシラ君？」

「はい、何でしょつか？」

また、脳内会議を繰り広げ展開していたのかおれは…

「出来るわよ、移動…と並ぶのかじりへ一番最下層の最後の敵の手前とかまで…」

なるほど、初っ端からラスボのお出ましが。ちつとも面白くないが、こんな所にいる時点で面白くないことは変わりない。

「気回しは無用だ。そこまでどばしてくれ、遠慮なくな。」

一度は言つてみたかった言葉だ。おれ言つて、結構滑稽。

「わかりました、それじゃ、遠慮なくな、飛ばさせていただきますね」

飛ぶ。それはどんな感覚なのだろう…生まれ出から一度も飛行機などに乗ったことのない、田舎生まれのおれに、その言葉は何処か現実味のない物に感じる。

⋮

すると、体が人為的に軽くなる。  
瞳孔を開き、瞬きもせずに観た感覚だと、下手に鈍く視界が揺れ定むのが分かつた。

一瞬の内に、夢を觀ているようなカオスな記憶の世界。そこには、今までの不幸や苦悩や災いなどの負の記憶しか蘇らない。

まるで、生きてきたすべてが負だったよつこ…。

「…」

立ちすくむのは、壁。

いまこの場所は、最下層のはず。だが、何かが違う。

「マズったわね…」

些か、頼りなく聞こえる声。

何がどのようして、マズったのか。

推理するには、材料不足。

まあ、前方が壁だから後ろを観れば何か分かるかもしれないな。

そんな悠長なことを思いながら、翻り、表を向く。

「な…」

愕然の一文字。語呂は四文字。実際言つた口は、な…の一文字。

『何』とはよく使われる文字だ。何でもかんでも、『何だと』とか、『何だつて』とか、複数に用途があり得る可能性無限大の完全無欠のワード。

コトシラの眼前には、似たような景色が広がりを魅せていた。

何故、何だか何となく、世界が一時停止していた。

その答えは分かるような気がする。

古見子さんだ。

コトシラの位置から、見える限るの視界に無数の『それ』がいた。

「語彙では表現できないそれ…」

絶望感と茫然自失の一通りの情感で、彼を襲つ。

立つてこるのがやつと…

素晴らしい言葉だ。どれだけ、慌ただしいがやるせないこの状況を説明できる。

もう終わりだ。無理に違いない。

最悪の状況下、面白くて笑い出しそうだ。

笑つてみるか…

「ひああああああああああ

しつかりと発音のとれた、哀れ声。いま現在の演出にペッタシだ。将来演出家にでもなるつか…

「はあはあ、古見子さんきいてますか?…」

きっと、イカレкиつた、おれを観て引いるのであるひ。恐いへは、愛想欠かして、帰ってしまったのだろう。

だとしてもだ。

この場が俺の墓場になつても、これだけは云えよう。

「おれは、古見子の事が好きでした、大好きでーーー。」

聴いて無くとも聴いててもだ。

「色々と守りられてばっかだけど、此處でオレがくたばつたら、くた

ばつたで、あの世で今度は、おれが持つてやるー。」

ある意味格好悪すぎて、誰にもいえない言葉が俺の意志に逆らつて、飛び出す。

これが本音なのだろう…

「…よしーー、おれ、逝つてくる！」

この場が墓場になろうともだ。

コアシワサ、構えた。

「うおああああああああああー！」

全速力全身全霊を尽くし、語彙では表現できないそれを避ける。

この局面では、成功といえる華麗な回避を醸し出した。無傷で避けたが、次の段階で一波が食らいついてくる。

とつさに、語彙では表現できないそれの右斜め下に転がり込むが…

ビッシュヤ

「ぐつあああああああああああ

転がり込む際、左手をもつてイかれた。

大丈夫か？大丈夫じゃねーよ。

三、四、五、と次から次へと、それが集中的に進撃を狙つ。

瞬きすれば、軽く三十四はいる。

終わったな…

此処はもう、どうでもなれ…

「古見子……！」ああああああああああああああ

変態じみた奇声で告白した彼女の名を呼んだ。

「全く、しょうがない子ね……助けてやりたい訳ないじゃない」

古見子さんの声と共に、体が見えない糸で操られる。

スン

スン

スン

圧倒的な無駄のない動き。

語彙では表現できない本念「なそれは、まるで、まともに、ついてこない。」

「何が起きた？」

自分が自分じゃない錯覚…何だか、別の体のよう…

そこには、『それ』しかいなかつたが、ちょっとだけ、ほかの存在の温もりを感じた。

「コトシラ君、分かってないよつだから言つておくれど、

「

彼女は言った。

「…私があなたを操縦してるのよ。」

次回  
幕完

回想終了

なる程、分かつたぞ。

お早うは、あくまで王霸陽なのか。

それならばパンは、流行らない。腹を壊しそうだから。

昨日の今日で、味覚が変化したのなら都合がいい。このざるそばパンを美味しく頂けるのだから…

さてさて、今日は漸く、期待の面接地味た試験の日。

試験開始の時間まで、日測で五時間ほど、全然まだまだ時間が余るといえる。

「今日は、わづくわづくの第一次、試験祭りだが、古見子さんは何しようとく？」

お茶を啜りながら、おれが古見子さんに尋ねた。

「…そうね、予定はないけど、暇つぶしでもして、待っているわ…」

昨夜の出来事以来やる気喪失している、古見子さんは、いつも通りだ。

元気がないのではなく、平常心をわきまえているのだ。日常茶飯事

だ。

「でもここは、古見子さんの家族達は、何をどうしてこのだ  
れつか…

観たことも、会つたこともない。、匂いもわからない。

それどころか、彼女の招待もつかめていない始末。頭のアバウトな  
記憶の棚に、この人イトコだ。って、収まっているだけである。

男性として、詮索は避けたことないが気になる物はどうしても氣  
になる。

このまま、試験なんて止めて、古見子さんと冒険に出ようかと思つ  
ほどだ。

「暇つぶし…か。其れ即ち、時間の無駄遣いだけど、遣つて楽し  
いか?」「

大抵、イマイチか、遺るにしては、とか、言葉が出てくる典型的な  
言葉の流れ。

「イマイチ…もしくは、面白くは、無いわ」

それもそうだろうな。

「試験が終わったら、旅でもしようか、みたいなこと自分で言いふ  
らしていたけど、期限を放棄して、いま行くか?」

自分の言葉に、責任を取らないおれは典型的なアレだな。

「それも良いけど、今まで遣つてきたことが役無くなるわよ？それでも良いの？」

どの部分を切り取つても、まさしく正論だ、と我に帰る。一応、分かつてしたことなんだよね。此処までの努力と知識の蓄積が中途半端に、役無しになる事ぐらい。

「良いわけはないが、でも、あきらめても良いこと思つんだ。」

昨日の今日だからな。あんなこと往々ながらの、今は、昔の自分と少し違うと思つじ。

当たり前のことが当たり前に出来ないオレだし。

投げ遣りに身を任せてもいいんじゃないか？

「弱いわね。私もそうだけ」

その通り、強う訳がない。昨日の言葉も嘘だったになるかもね。それでも、一人の人間だし、死ぬのは怖い。全然健全者だ。

「だから、さ。俺にも、少し語らして、」

完全に、試験に逃げ出す方向へカジをキつたおれからの言葉。届け、届けだろ。

「…語つても文句や反論はしないわ。だけど、私からも一つ言わせて、」

「うむ。古見子さん。

「語るなら、不抜けた感じで語つて貰える?」

!

くつ、大打撃だ。その台詞には、重量感が掛かっていた。古見子さん以外と怒ったときはエグりを使ってくるんだ…新しい顔だな。

「面接の際に、話すハズだった将来の事について、堂々と語つて良いか?」

現段階では、質問の領域、語つてはいけない。

「言つて『覧なさい』?」

吐露する。おれ。

「おほん、では…

将来、おれは、世界中を旅して、いろいろな物を観て、色々な景色を見て、歩きたいです。」

終わり。何て短く簡単にまとめた文章だらうか、自己評価はどうで もいいが…

「…」

盛り上がりに欠ける、発表会。もはやこれは、小学生並みの朗読パーティー。

「私からは何も言えないわ…」

飽きられたのか、返す言葉もないのか、どうも同じ事か。

「よし、旅の準備をしよう」

本当、何もかも意味がなかつた。

コトシラ達は、旅の為の重要な道具をまとめ始めた。サバイバルナイフを基準として、紙皿や紙コップ、そして、割り箸を備えた。これは、まるつきし小学生のピクニックと同等、笑われてもそれはそれで、仕方ない。

「ゲーム機とかも、持つて行くの？」

電力の供給のままならない、旅路でゲームは荷物になるだけだろ？…思ひ切つて、捨ててみようか？

「持つていけるはず無いだろ？異能と特殊能力を孕まないと、確実つて行つて良いほど無理」

退屈な旅路になりそ�で胸が苦しいな。ゲーム機がないと楽しめない直感的に、思想するおれもどうかしているのか？

「あ、言い忘れていたけど、武器とかしつかり、手入れする補修用専用箱をバックに入れとけよ。」

旅には、獣鬼は付き物。忘れてしまっておれは落ちぶれてしまつたのか…下らん宗教の底辺知識を蓄えた所為でもあるのか…本当何だつたんだろアレ。

「あれには関係なくなつたことだから、清々と不可思議に思えるんだろ？ね。」

この世の意味が分からぬ。

「あれ？コトシラ君は、あの禍々しく漆黒色の大剣を背負つて持つて行くの？効率悪くない？」

持つていくとは、一言も入つていながら…補修用専用箱イコール自分が武器を持つて行く…につながつたのだろう。ここは有無を言わざるを得ない。

「無論勿論さ、邪魔だな～と思つたら、ポイ捨てすらばいいだけだし。もし、獣鬼等の化け物が襲い掛からば、俺らは何をどうすればいいのか、明白じやん」

ますます、軟弱な起因に満ちていくようだった。  
何かが変わつたのは、おれだけだろ？ゲーム世界で体感した現実味のない思想。

手に入れたのは、愛？

違う。当たり前が一番麻痺することの恐ろしさだ。

今のおれは、現実逃避を行つてゐるんだ。逃げるだけで、最悪の選択肢。

現実と闘うわけではない。現実は敵ではない。敵であつて欲しいのは、運命だ。

「やうよね。わざわざ、危険な旅路に成りかねない様に、備えるのは、賢い判断ではないわ。」

古見子さん、二刀小刀を持ち運ぶ。彼女のお気に入りだと誰もが一致文語を並べるであつた。

と、おれも部屋の隅にホコリをかぶつた、黒刀を取りに行かないといふ：

コトシは、田畠あふれる間から、飛び出し、自室へと向かつた。

「行つてらつしゃい。」

と古見子

「ああ、行つてくる

とおれ。

家中には、冷たい空氣と澄んだ空氣とが降り混じり、殆ど同型類の氣体なので何とも言えない。

廊下を渡り、ドアノブを半回転させた。

目に映る。見慣れた空間は、一つの世界を物語っていた。

「おれが、数年間過ごしててきた部屋……」

おれが幼少期の時に書いた落書き、今のおれよりガキだった時に書

いた落書き…

眺めている内、言葉通り傍げに散る夢のような気分に誘われる…

落書き…してみようか。

何を言ひ出すかと思えば、落書きをしておりていうおれが居た。年を重ねて変わつていく感性。

ずっと後に、分かつてくる過去の自分の素晴らしさを詠み。

奇麗事だと、罵られてもいいが、おれに取つては、すべてが本物、どんなときだつておれはおれだから…

落書きの散乱する酷い壁に、マジックペンでこんなことを書いた。

『今のおれがここまで、情けない人だった』と、

意味は、この口を境に、おれの変わる人生観に対する暴言だ。

コトシラは、マジックペンを元に戻し、ホコリまみれの武器を手にし、扉を閉める。

キイイ、バタン

寂しさや切なさを覚える…

次回

試  
驗  
廢  
止

旅路に、足を踏み出す一歩手前がこれまで、長くなるとはな。

正午を廻つたところだ。

昼飯は、ジャムパンで済ました。問題ない。百パーセント全力で歩ける。

目的はない。取りあえずひたすら歩く。  
歩いて歩いて、世界全土をこの足で踏み確かめる。何、恐怖とか、武者震いとか、全然。大丈夫だ。  
端的に言う運動だ。

そう運動…

この運動に名前を付けるのなら、  
目的探しの旅と名札を立てても良い。

目的地なんて、歩いていく内に見つかって、歩いていく内に、見失うもの…そつは思わないか?

ちょっとひとつ、脳内をくすぐつた感覚がしたので、古見子さんに話すことにしてよ。

「ねえ、ねえ、古見子さん。目的地を探す旅つて、格好良くない?」

おれの精神年齢は、小学高学年並みであるひつて、けれど、恐れることはない。体の方が少し早走つて、大きくなつただけだ。

一方では、古見子さんも等身大年齢的には、おれより一歳上のイトで先輩だけど、彼女もどちらかといふと、心は幼い方であるうよ……

「主語が抜けている様だけど、つまり、宛先のない封筒をポストに突っ込むくらい、格好いいって事? がいいたいの?」

え、理解してない上、凄く解りづらい例えまで提供しちゃつてるよ。

「違う、違う、おれが言いたいのは、『目的を図出す』の目標があるが、それを差し置いて、『目的を探すのを図出す』って、工程が遠慮過ぎはしないか? って、格好良さだよ……」

ゆとりのある行動や言動…人類は、それを有意義と唱えた。

「仏教の道徳教育みたいな振る舞いね。」

古見子さん言葉を使って、簡潔に一言で言い切ひとつと言つ必死だけが伝わる、それが好きだな、私的に…

「駄弁は、歩きながらでも出来るし、『締まり律儀に氣を配つたし、旅だしの一歩を歩もうか…?』

急かすように、話を進める「トシ」。

「…なら、私からも一方的なお願ひを言つわね…一度、踏み出したら、背後の景色は観ないことにしましょ。」

良いわね。の古見子さんの語後に、賛成の意を首を縦に振る、のジエスチャーで応えた。

「壁の向こうには、見慣れた村が広がるのを始めに……のちに、今まで隠されていた財宝のように、次から次へと新しい景色が田に焼き付くんだよね？」

言葉だけなら、ロマンチックだ。言葉なら綺麗な言葉だけを並べられる。

あくまで、これは好意の語句をわだかまつて言つてこらわけではない。

訳すと、好きで言つてこるわけではない、になる。

「やうね。卑劣でえげつない。世界も観れそつだしね。」

その通りだよ全く。

あ、そうだ。

おれは思いました、僕の頭の中の脳内思考回路に、ワード検索が掛かった。

コトシラは、国語と数学が苦手です。そのコトシラがだす、演出に適した行動パターンがポロッとして出てきたのです。

男女、歩く、始まり。

ふふ、分かりましたよ。

こんな時は、アレしかないよね。

何かに、取り付かれたかに思える不気味な笑みと微笑みが愛くるし

く合致した。

「古見子さん。」

「アレ、何せ言つた。

「何よ？ 気持ち悪い……」

毒舌な饒舌に怯んだ。おれ。  
だが、めげない。

「手を繋ぎましょ！」

「ちから言つのも、新鮮味があつて良いな。こんな企画は、おれ  
の方から積極的に押し進めるとするか……

世界がパーと広がる錯覚が拡散した。

「…」

面白い物を見物する有り様で見つめる。  
照れはしない。徹底的に真顔で対応。

「面白い一言ね。今度からは、そっち方面を任せることにしたわ。」

どうやら、株がひとランク昇進したようだ。

それでも、試験放棄の件は、まだ、返済できそうもない……

「わかった。出来れば、次からは何となく自分のタイミングで提

供するんで、色々問題点が有ると思うが、広い心で「理解を…」

おれも多少は、チキンなのでこゝの時に、アプローチが欠けたりしそうだからな。コレだけは、前もって分かつてほしい…

「皆まで言わんでもよろしい。暗黙の了解よ」

ま、今、何より優先することは、おててを繋ぐこと、何の支障もない。

単なる握手だ。

「じゃあ、ん~と、え~」

現在位置は、室内、玄関入り口前。

靴を履いて、荷物は所持中、準備万端と言える。

正面には、扉、すぐ横には、イトン。

決意を込めて、よし、とか言つてみた。

「よし、それでは握ります」

落ち着いた面もちの彼女は、何処までも、穏やかだ。

余りに、大人しい為、「人形のような無生物」、とでも例えられそうだ

と

心構えは、澄んでる。

震えているのか、周りが揺れているのか、幻覚に煽られた気分で、彼女の手をそっと、握る。

鮮明な描写は、言い表せない。

取りあえず、イトコの手を握っている。人の手で、自分と異なる異性の手。

以上を上げる。

「ち、行こうか、未知なるそこへ」

飛び出すようにして、ドアノブに手をかける。

始まりは手を繋いで…

おれが答える演出名だ。

ガチャ  
ギイ

扉をゆっくりあける…

午後一時前くらいの芳しい日差しが一斉に、照りつけた。

「外、懸念していたほど寒くないわね」

開口一番のそれは、意外性に格段と特化し、呟せるほど吹くといふ

だった。

「何行つているんだよ。古見子さん、笑つていろ才前まで来ていた  
よ~おれ」

軽い気持ちで、訴えてやつた。

…手を繋いだまま、庭を歩く。

「待つて、玄関に力ギ掛けるの、あなた忘れているんじゃないの？」

ついつい浮かれていた、おれは現実に戻る。  
危うく、カギを欠けないまま、旅に出たとなると…想像しただけで、  
取つて食われそうだ。

「ヤバい。そうだった。」

語頭、ヤバいが着くほど、やばいことである。

「しつかりしないと駄目じゃない？そんなんだつたら、この先、の  
たれ死ぬわよ。」

こうやって、注意してくれる事までが嬉しい。いつか、注意もしな  
くなつたら、試合終了だと悟つている。

「ああ、無責任な言葉を贈るけど、『次から気をつけろ』事にする  
よ

コトシラは、手を繋いでいる左手を使わず、空いている右手でポツ  
ケから、鍵を取り出す。

## チャリン

鈴と大昔に流行った珍キャラクターの繋がれたカギ。

合い鍵はない。これ一つだけ、

家族を失つてから、このカギに触れたものは誰もいない。

おれの家族しか触れていないって事は、家族だけしか、触れない物つて解釈も有りだろ？

「あ、ごめん。おれ左利きだから、カギを扱えないんだ。古見子さん代わつて…」

さう氣ない言葉を贈る。

「何よ。独りで何にも出来ないの？…全くしょうがないわね」

コトナリは、古見子さんに鍵を手渡す。

次回

旅蛇尾

千里万里駆け巡る。他愛のない会話を進る物語は、つまらないのだろうか？

現実離れした、今回の行動。神様が居ると仮定したのなら、一般人には到底出来っこない怪奇な定めをきっと、おれらに与えたに違いない。

おれ、通りすがりの田舎者と、彼女、住所不定、家族構成皆無のイトコ、は道さえも整備されていない歩道を一人歩きしている。

現在位置を確認してみようか。

村と言つても過言ではない村を、歩き続けいる末路だ。  
段取り持つかめていないからこそ、枝が倒れた方向に、直進してい  
る。

枝が不規則な道筋を、定めるのも、神様の仕業なのだろうか？  
王国最大の都市、：から離れていくのが分かる。

活気溢れる地域とは、逆方向に向かうおれら。

風景や景色は、歩く度に野生化していく。このままでは、人類の原  
点へと辿り着いてしまいそうな赴きで、補足する。

どうでも言つようこ聞こえるが、これは、人間としての元凶です。

歩くだけで、猿になるから…話の流れではそくなつてこる。

「古見子さん、国境を越える際、何かしらのパスポートなどが必須になつてくるのではないか?と思つんだけど……そうなのですか?」

以下の話の流れを断ち切る。コトシラ。

それに、連動して、重つ苦しい荷物を引きずる古見子さんはじつは答えた。

「パスポートなど、いつの時代の産物ですか?…私は、残念ながら今日初めて、その話を聞いたわ」

この言葉の解釈を追跡し、追求した上で日本の日本文役に正しく並べるのは、非常に高度な分析力を伴つらじい。

これは、さすがのコトシラでも、頭を抱える。

「え、どひ言ひ事?…おれ、さつぱり分からなかつた。もひ、少しあみ砕いて言つておくれ…」

コトシラは、重そうな大剣を引きずりながら、再度、古見子にコンタクトをはかる。

「伝わらなかつたの…つまりね、そんな者必要ないつて事、スリルを味わいたいもの…」

成る程、成る程、危機感は一種的好奇心と同じ部類に、分布しますしね。今言つたことも、解らなくはない。

コトシラは、納得の色を見せると同様に、不安感が悪寒を誘つたりした。

でも、心配ない、今まも何事もなかつたように、これからも、なんとかなるや。

「…賛成で決まりだ。無いと分かつて、びくびくするより、無いと知つていて、堂々とした方が潔いし、俺たちらしい。」

何だろ？この愛着感、あふるる、この系統の言葉は？

昔っから、言つていた様で言つていらない矛盾と良く分からなさ加減は…

前世で言つていたのかもな。

勝手に理由を付け、勝手に納得したコトシワ。

古見子さんもその言葉以来、口を閉ぢし、話をうとしなかつた。刻々と、時間だけが過ぎていく。

歩いていく内に、

段々と、畑も見えなくなり、完全な平原と化していた。

ずっと奥には、森が見える。此処まで来れば、道なども何もない。本当のは、今までの世界なんて、幻だったかの様な素朴と過疎が心を打つ。

「地球つて、誰が丸いつて、決めたんだううね…丸かつたら、どこ行つても、隅や端で落ち着かないじゃないか…」

人は、放牧には不向きな狭い動物ですからね。特に、日本語をしゃべる僕達なんかは…。

「それは、心の広い人に決まっているじゃない。そうでないと、地球が太陽の周りを回っているなんて、思いもしないわ。」

根底を覆す一言は、なんだか、癒された気分に誘われる。

これぞ、反抗精神。反発したり、素直に認めきれないのは、それなりのプライドがあるからだ。

特に、認めたいが自尊心が阻む一時なんて、観ているだけでも鳥のよくなつかきぶんで気分がいい。

と言つだけの話だ。

「肯定論理を覆してやるつらしら？」

爽やかな草原の揺れる音。

さり気なく芳しい、草の匂い。

きっと、それは叶わぬ夢かな。

「…無料、だと思つぜ。」

「ふ〜ん、言つてくれたわね?。…なら、その理由を五文字以上で説明してくれる?」

言つなれば、創始者には慣れないと、簡潔な文書を現せば良いだけ。

「殆ど開拓者は、皆男だけだと言つぜ。」

これが越えられない何かが隔てる壁。

「確かにそうね。…何故そうなのかしら？」

うん、おれも思つ。何故そうなのだろうか？  
多分恐らく、そこには、見えない力が均衡を保とうとしているのだ  
ろうか？

「面白いことに、不平等がバランスを保つことが良くある」時世だ。  
暗黒物質のような次元の違う、不確定影響の沙汰ですゼオ」

不確定影響とは、未知の人では想像もつかない世界を構成する部品。

「基本賢いのね。あなた」

馬鹿を賢く言つても、哀れなだけだぜ。なにせ、馬や鹿ような英知  
しか持つていないし…

「あ、一つ疑問点思い付いた。…賢いかどうかは自分で決めるもの  
か、それとも、他人が決めるものか…」

「まつて、何か近づいてくるわ。」

疑問文をあげる前に、言葉を割り込まれたコトシラ。何かとは何か  
？これまで、口論できそうだ、などと考えていたのは、彼女は知  
らない僕だけの秘密だ。

「獣鬼か。この辺の獣鬼は希少価値が高いと村人がすれ違いました、  
訊いたことある。ぶつ倒して、遣ろうぜ」

動詞を組む。荷物を大地にそつと置き、大剣を構える。

イトコの方も既に、小太刀を手にしている。

一時の方位に、確かに、怪物のそれが居た。

一見、サイの様な形容。突進攻撃はダテでは無さそうな物腰。

「一撃で決めてやるわ。とか言いちゃいたいわ」

そう言えど、前々から思っていたけど、獣鬼ってなに？  
人からしてみたら、自然界に不適合とは思わないか？

普通は、俺らと同じ動物は家畜かペットとして可愛がるが、獣鬼は  
生物出すらない。

手地の固まりと同じく、タンパク質によく似た構成物質の塊だ。彼らに意志など無い、ゲームの奴らと同じ何かに動かされている。

「陰謀だな。」

その掛け声と共に、揺らぐ獣鬼。

先手は、俺らの方が早い。

イトコの機動力は、とある学校で有名になるほどの出来た動きだ。

ガサガサ

獣鬼は、翻弄されていることにも関わらず、突進する。

「直進攻撃とは、何にも考えていないゼオ」

これを見ていたかのように、大剣をこしらえる。

一撃入魂で獣鬼を葬る。

その間に、イトコは獣鬼の外装を剥ぎ取る。手慣れた手付きで顔面部分からじりこまめに、剥いでいく…

移動対象物をよくはぎ取れるもんだぜ。おれのカンカツではないが、負けた気分がする。

「はい、剥ぎ取り終了。思う存分叩いて良いわよ。」

その合図を待つていたかの様に、大剣がギミックを起します。

ゴハハハ

と機械音が奏で、さらには

ガシャゴキ、シャガツ

リーチが伸びる。

横に振るか、縦に振るか迷つたが横に振ることにした。居合いの構えと、黒き熱風が俺の周りを取り囲む。

タツタツタ

獣鬼が眼前何メートルかで、おれは動いた。

「一撃残光横なぶり。とか言つちやつて」

軽く衝撃が走り、ジェット機のように加速する長刀は円心に沿つて半回転で獣鬼にぶち当たる。

バジエコ

旋律の一瞬。

次回  
憚り所

変形型の武器とは、近年よく見られる代物。けれど、この武器は最悪すぎる。

「トシラ」とイトロは獣鬼の肉片を回収し始めたところだつた。液体質な物質は、含まれておらず、変わりにジエル状の肉質が溢れ出るだけで生き物としては、甲殻類に当たるのかもしれない。

でもそんなのどうでも良い。おれがタチが悪いと思い当たる部分は、獣鬼の体質とは異なる別の場所、… こんないかがわしい物を食べ物と認知してしまう人が怖ろしい。

いろんな意味で怖いのは、人間の方ではないか？

と、思つがままに語り合つ「トシラ」。脳内限定であるこの討論は、貴重品だ。

一方、現実世界を垣間見れば、獣鬼のそれを圧縮収納箱に詰める地味な作業だけだ。何の面白味も感じられない。

「よくこの凄くどうでもいいこんな場所、よくよく、現れたりするもんだ。陰謀とか人為的何かが裏で糸を引いていそつた予感しかしない…」

ぼやぐ。呴ぐ。どちらかで言つたはずだ。その呴きに、対してかは解らないが、古見子さんが言葉を紡ぐ。

「草原と言つ舞台で死にたがつただけじゃないの？」

獣鬼出現は、ただ切り捨てられるだけの局面を迎えるだけで、獣鬼は死ぬだけ…の考え方が定着したのは人類の技術の進化の課程と言える。

死に場所まで求める、獣鬼もどうかしているか…って、それでは獣鬼その物に意思があるのを認めているだけじゃん。

「獣鬼の寿命は、無限、誰かに機能停止を強いられるまで動き続ける…その点を押さえると、古見子さんの云う通り、何百年何千年可動し続ければ、自我の覚醒も有りつて話に納得が行きそうだ。」

皮肉で悲惨だな。無限に生き続けるって事は、地獄と何ら変わらない。

確かに、死にたがつても仕方ない筈だ。

よし、と、収納箱に出来るだけ質の良い箇所を容れ終わったコトシラ。イトコも同様。

本当なら、もたもたしていられない適所に居るのだが今更、急ぎ足なんて疲れる業はしない主義なんだ。

立て膝を突き、立ち上がる。近辺に転がる大剣を拾う。

「もつ、いいか?…ほら歩くぞ」

日が暮れるまでは、どこか親切なお人の家などに住まわないと往けないミッションがあるので、強制的に搖さぶる。

「…彼らの方こそ、あなたが終わるのを待っていたのよ？早く歩くわよ…」

現場を垣間見れば、悟る。おれが大剣を手に取るモーションより、古見子さんの刀を収めて次の立ち上がる方がよっぽど、早かつた。

誤差は三秒ほど、でも、送れていることには変わりない。  
負けたら潔く云いたくなる言葉をいつとするか。

「悪かったな。行動が的確じゃなくて…」

平然と前を向く。コンパスが無くとも何処が進むべき無知かは分かる。

只、歩数を延ばす俺らの行為は無意味と言えるが強制されて、今を本当の意味で居きられない輩の方が殺人的だぜ。

ザガーザガー

大剣を引きずる音は、比較的暖性音域、心地がいい。  
これも訓練の一つといふざるを得ない。

背後には、イトコの気配。イトコは云つた。

「荷物を持って、武器を引きずる姿を想像するだけでユニークと思えるのに、この角度から見るあなたの姿はより恍惚に滑稽よ？」

ありがと、ほめ言葉と有り難く受けつて置くよ。

「引かずるのも大変なんだぜ。特に肩に負荷が掛かるし…」

これから、何里何万里も引き摺れば、きっと、腕が肩からもげる。大げさな表現で済まない。

「肩に金具でも、はめ込めば、ましになるじゃないの？[冗句とかじやなくて…」

彼女がここまで「冗談が好きな人とは思わなかつた。[冗句を口に出して、これは「冗談ですって、表現の仕方が何とも素敵。

「まず、体を弄るなんて怖くて出来ないから遠慮しておくれ、心遣いは何とも思えないが…」

そろそろ、眼前に森が見えてきた。森の中は危険がいっぱいだから、先に云つておく。虫や害虫が最も強敵です。

「森が見えてきたわね…あ、云わなくて解るわよ。」

古見子さん、空気呼んでよ。此処は頃でしょ。

「此処からが本調子だ。まだまだ、旅は始まつたばかりだ」

足にたこが出来そうなほど歩いて、何を云つて居る？俺は、戯言を話しただけだ、何もいっていない。

「威勢が良いわね。若いつて、頃云つ言葉も口外出来て良いわよね

古見子さんも十分若いと思つうが、必要以上に遠慮しているのかな？

「森と野原の境目で、休憩しようか。」

ちょっと、此処まで無理していたから、休むのも大切ですよと云わんばかりに、僕から提案した。

『もともたしていられない』あの言葉は何処へ行つてしまつたのだろうつか…

「良い案ね。見直したわ。カタニカナグ君」

肩に金具、日本人だとあり得る名前だ。カタニ、カナグ。いいね、この呼び名もいいね。

「それ気に要つた。次からカナグとか、カタニとか言ってよ。」

「トシラ、不細工な名前だと大昔に、ずっと思つて、考えないようにしていたがその抑止力も臨界点を突破したらしい。

名前に飽きた。

誰か、出来るであれば、変えてほしい。

ポロッと発言も悔れないな。

「いやだわ、トシラと呼ばして…」

否を申した。

「そうか… そうは残念だ。…なら、俺が古見子さんとの事、カタニと言つていい?」

名前は大切だ。自分の愚かさを教えられた。古見子さんやっぱスゲ

一。

「だめ」

「なら、敬意と自尊をせりとで、『三セラ』」

一瞬の拙劣。『三セラ』とか言つてしまふやうだった。

「『三セラ』にしか聞こえないわ。けど、悪くはない……」

『三セラ』パーティーだ。森と野原の境田で『三セラ』パーティーをしよひー。

「折角だし、森野原の狭間でパーティーでもしようか？」

計一人のパーティー。絶対的に盛り上がりに欠ける素晴らしい会合になりそうだ。

「パーティは良いわね。そうと決まれば、森野原の境界まで駆けつけてのはどう? 不供臭くて良いくと思つわよ」

く、企画案を先取りされた。屈辱的だが全然悔しくないのは、完成度の高さの点がアレだからか?

「良いぜ。受けて立つて魅せよ! つか」

正直、大剣が邪魔で走れません。

「なら、号砲はあなたが担当ね。後ハンデとして、遅く走つて観せるわ

どつちもどつちか、勝ち負けなんて血口満足か自己満足か自己満足でしか満たされないし、勝負 자체氣休めな子供じみた遊びの方がよっぽど増しだ。

「満足のいく勝負には成らないと思ひけど、全力を尽くすよ」

「わー」とだせ。全力は出すけど。

「早く始めなれよ」

解ったよ。全く穏やかなのかセッカチなのか、困惑させる口調に成つたりするから、困る。

「いぐぜ、よーい…」

両者、決めの良いスタートティングポーズを撮る。

次回

森野原の狭間で  
パーティー

「始めー。」

森野原つて、地名ではないと思つだけど?

コトシラは、ちょうど良い所に放置された岩に、腰を下ろして、一休みしている。

古見子さんとはと書ひと、じこかへ消えてしまつたよつだ。此処には居ない。

まあ、考えて見た所で何かが手にはいるわけでもないし、彼女は初めから居なかつたことにしておつ。

日も暮れ始め、寒くなつてきてゐる。寒いんぢやなくて、肌寒いと自負の念を押した方が良いな。

平原の彼方には、小高い山とふもとの村々が微かに、黄畠の風を仄かに醸し出す。

奥には、暮れなずむ夕日色の太陽が眼に映る。

眼球が溶けそうだ。

何時もの今日が訪れていたのなら、おれは此処には、腰掛け居ないことになる。

…椅子の上に座つていたはずだ。

きつぱりと定められた掟を破つたのだから、こうなるのも当然。生きている内に、この岩肌を売れることも出来やしなかつたかもしれない。

次の瞬間には、明日なんて無くなるかもしない。何時もと違い、  
新たな世界観。

世界中を旅して、あの街に無事に戻つてこれるとも限らないし、地  
球を一直線に進み、元居た街に帰つて来るとも、可能かどうか分か  
らない。

知らないし解らないことだらけだ。

どうこいつた理由で、生きなくては成らないのか、どの場合で死んだ  
らいいのか…

考えは、有頂天屁と誘つてくれそうだ。

「あれ？ 何か、考え方でもなさつていたのかしり～」コトシカ…

クールに冷めた描写で、オレが岩に座り考えているであらう、その  
生きた彫刻を意識しているそれに、古見子さんが語語を飛ばす。

語語とは、所謂言葉だ。

そこまで難しい顔をしていたつもりではないが、何かを考えていた  
と察し、されてしまつたようだ。

「考えていた？、ああ、考えていたさ。…今日は野宿か！ヤツタ  
とか考えていたさ」

率直に野宿が頭を取り囲む。此処は、潔く野宿で決まりだ。テント  
も在るし、寝袋だつて完全所持しているし、文句のない備えだ。

風呂が入りたかったが、携帯便所も携帯風呂も開発されていないご時世だ、文句は言えない。

「野宿とは、大変選び難い選択肢ね……何処かに、平民用の宿泊施設でもあつたら、話は別だけど……」

そこまで都合良くな宿が分布している世界ではないだろ。旅路の道のりは、データのように甘くはない。

「この近辺に、異端錬金術式使いや魔女が住んでいるって、地図帳に乗つていただけど……」

おれは、自分の口の利口さに驚かされる。思いも寄らぬ言葉を時々、口にしたりするがこんな時だけ役に立つてくる口も、悪くはない。

そういうて、野宿だ野宿と、わめいていたおれも冷静に、地図帳をリュックから取り出す。

「魔女とか……私、ちょっと苦手なんだけど……」

魔女とは、延命や美肌の代価として、若い女性の生き血を啜り採つたりするらしい。

おれには、関係ない話だ。

「それを云うのなら、おれだって完全に異端錬金術式使いも」遠慮させていただきたい所だぜ

異端錬金術とは、若い男性の体をいじつたり解体したりして、楽し

む輩。女性には手を出せない男性の群れが殆どいた。

チキンな奴らだぜ。

「あつた。へー結構近くにあるじやん。」

とかなとか、だべっている内に、地図帳は一つの屋敷を示していた。「地図帳に載るほど有名な場所なのね。魔女だつたり、異端鍊金術式使いだつたが住むアジトつて……」

秘密基地を隠したがらない連中だつたりするのだろうか…まるで子供だな。おれも混ざりたい…

そんな場合ではない。もう薄暗くて、文字や絵図が確認に出来なくなつてきている。早めに、観ないと、今度は電灯探すのに時間がかかる。

コトネリコは、双方の眼球を凝らして、正確な現在位置と、その近辺に在るところの屋敷との座標を頭にたたき込む。

…

「どひーどひーに行けどひー」

古見子さんが執念深く地図帳を見つめていたオレに訊く。

「嗚呼、どひにか、場所だけは覚えたが…本当にいくの?」

ふーと、一息ついて、喋り出すおれ。位置関係はほぼ確認はされた

が肝心の屋敷の名が読めなかつた。

なんだか複雑に造成された字が見て取れたが薄暗い上、印刷がうまくいっていなかた為、読めなかつた。

「私的に述べれば、まだ、危険をかえりみず暖かい布団にくるまる方が良いわ」

彼女らしい判断。訊くまでもなくさう、答えるであらうは思つていたが。

おれもその意見に、否を配ることはないな。

「大丈夫。おれが守つてやるよ。」

おれが言つと天地が逆転しそうなぐらこ上辺ばかりな発言。

彼女は、

「…、ありがと、嬉しいわ。」

彼女も心が詰まつていない空疎な言靈。

「兎に角、とりあえず、決まりつて事で先に進もう。」

喋る」とは、歩行中にでも幾度となく話せる。まずは、今すぐ、この場から動くことが重要。

重剣が地響きを立てる。それ程大きな音ではないのはやぶさかだが……

「やつ言えば、今日、試験じやなかつたかしら？」

その通り、試験日だ。今日を境に試験だつたに変わる。

「何を今更、云つているのだい？おれたちは試験日をすりぼかして、ここまで来たんぢやないか」

おれたちではなく、おれは、だ。

「……だつて、本当に良かったの？つて答えたらい、考え込みそづぢやない。だから、今からでも引き返せる話をしたいの……」

？全く話が読めない。彼女は僕の心の強さでも、測るうとしているのか？。

なら、オレはハツキリ弱いですつて答えきれるけど？

「コトシワ君は、過去に戻つてやり直したりしたい？」

展開が狂おしいが、彼女の特技と言つ事にしておくか。

「過去なんて安っぽい舞台に立とうとは思わない。だつて、ゲームが旧式だもん」

過去は省みない。過ちなんて、觀たくもないし変えよつとも思わない。

「……」

いきなり唐突に何だ？！

一体、おれに何を求めている！。

「いきなり謝って、何だよ。軽く意味が分からぬ。」

理由は何だらう…

もう辺りも真っ暗で、彼女の顔も見えないがし、どういった表情をしているのかもわかりやしない。

ちなみに、今向かう屋敷の場所は解る。

超方向探知九百四十七点のこのおれがなせる技だ。

「私、あなたをゲーム世界に送り込んだの」

若干驚いた。

「え、…」

「私、昔っから、人を別世界や異世界に飛ばすことが出来るの…」

衝撃発言だろうが、全く持つて違和感がない。これは俺が麻痺しているからなのか？

「ちょっと、待ってくれよ。…その、人を送る力に関しては偏見はないが、どうして、俺をゲーム世界へ送ったんだ？。それが唯一の疑問だ」

正直に訊きたい。その理由。

「云つて良いのかしら?...」

「ああ、云つて良いとも、遠慮なく云ひなさい」

真っ暗で見えないとと思うが、優先者を譲るようなジェスチャーをしている。

次の言葉を待つていたかの様に…

「あなたの、コトシラ君の愛を確かめるために…やりました。」

次回

屋敷な宿主

なんだ、そんな理由か。

他人の深層心理を見切るのは、人だと理解されない点があるからな。けれどもそんなこんなこの会話を何とか変える十分必要があるな、まあ、彼女も勇気を出して口に出した衝動発言だろ？

ここは、次に言葉に時間を駆けたりするのは、厳禁だ。空氣は淀んで、窒息死ではない、終了。その時点で消滅しそうだ。大丈夫、おれはちゃんと人並みに好意を抱いているつもりだぜ。つて言ひついで、

「暗くなってきたし、先を急いづか」

何事も、起きなかつた様にのうのうと、そして如何にも、堂々と話を変えた。

「あ、その件なんだけど、話が逆変換する…私はなんと答えればいいの？」『わかったわ』とか答えればいいの？」

そうだな、何か不自然すぎて、言葉と感情転換の辻褄が統合しないような気がするな。

着地する答えは、

「ああ、なら、取り敢えず、『あら、話を変えやがったわ』でも、言えば大概は当たりじゃ - ないか？」

もつ、語彙不足だ遣つてられない…

「あら、話を変えやがつたわ それでは、屋敷へ参りましょ……」

此処でおれは一いつ筆ふることにしたよ。

「やうだ、行こひー。」

私とコトシラは、暗闇で何も観得ない森を駆け巡る。

私たちの眼には、何かを表す光りすらない。深くとても深く、暗黙は何処までも続く。彼は、迷子には成らない…そんな力を持つているから、

私は迷つてしまつ。印印さえも簡単に送つてしまつから…

足音だけが一番の光、それを追えば、田には見えなくとも、出口は見つかる。

そんな気がした…

コトシラと古見子さんは、徒歩と言ひ名の健全な移動手段で、屋敷へと足を運んだ。

その目に映る限り、屋敷と名掲しきれることだけはある立派な建造物だった。

壱にそれはそれは、とても豪華な恍惚物の施しようといい、美しい修飾品の数々が散りばめられた…

まるで、クリスマスパーティーだった。

折角の飾りで『屋敷』が虚しく聞こえる。

「ねへ、コトシラ君、立て掛けの様な看板が横たわっているけど、突っ込まなくても良いのよね？」

彼女が云う。指をさり気なく向けるが、観るも無惨な木版が泥をかぶつて、地に朽ちていた。

「一応、この屋敷昔は觀光地みたいなものだったんじゃないのかな？（ペラペラ）ほり、この地図帳、十三年前の物だし、誰も住んでなかつたみたい」

勇者か、英雄…どちらかの救世主の本宅だつたとかだらう。今は、腐敗な奴らのアジトとは、皮肉も休み休み、動き動きするもんだ。

「確かめるくらいこの好奇心を奢めたら？この屋敷の名くらいは覚えておかないと…色々と」

念を押す。

万が一を云いたいのだろうか？

まあ、この屋敷にお泊まりするんだし、寂れた勇者のお家の名前くらいは覚えておくとするか…。

地図帳には、旧漢字で丁寧に書いているものの読めないものは、読めないのである。

「別に、子供並みの探索意欲が在るわけではないが礼儀として、文化指定財産疑惑な建造物名を確かめるだけのことだ。しつこく言えば、それ以上でも、それ以下でもない、

「ぜ」

他言煙。

「トーリはそいつと、のこのこ木版に近寄った。  
まるで、子供のような邪氣のない振る舞いで……」

「齧語家」

齧語とは、壊れた歯車。

それは、思っていたよりも、出来すぎた文字だった。

「え、ごめんなさい。よく聞こえなかつたわ」

少し離れた場所から古見子さんが尋ね掛ける。

「ソノケだつて、土まみれで正確ではないけど、齧語家で当たつて  
いる。」

何か、言ひ返すのだらうか……

「カエルみたいな、語呂ね。下手に口にしたくなうわ」

低評価だつた。字にしたら微妙に格好いいけど、やはり、昔の人の  
センスは現代人には分からない暗黙があるだろう。

カエルみたは俺も思つたが事実。

「これでキーワードは回収したし、そろそろ、訪問してみるか……」

此処からが本番だ。すっかり忘れていた、家の中の人は、…予想がつきそうだ。

変な奴か、不自然すぎるほど普通の人か、二分の一で、人数も、複数か、少數のどっちかだ。

おれと古見子さんは、横一列になつて、屋敷入り口へと続く石畳状の道しるべを歩く。

力タ、力タ  
がく、力タ

踏み所によつては、不安定で危なつかしい踏み石もあるよつだ。

「足下気をつけてください、古見子さん」

紳士な振る舞いだ。気持ち悪だけだが…

「心配しなくても、私が転ぶ必然性は無いわ。」

身体能力に美德化した彼女ならではの発言だ、説得力に力がある。

ガガー  
ガラ　ガラ

重劍引きずつている事柄が此処では、耳障りな効果音しかしない。

この不協和音を聞いて、ヤッパ、古見子さんの美しさには勝てないな、と自負を負担した。

「なんか、耳障りな音出してごめん。」

謝つて、すまされる雑音ではないのは承知だ。けど、背中にリュック、右手にテントを持った状態で重みのある武器を持ち上げるなんて、おれには出来ない。  
ひ弱すぎで」めんなさいだ。

「そんなの気にする余地すらないわ。嫌なら、私が預かるつかしら？」

「いつまでもなく。彼女も荷物で両手いっぱいの様な気がするのだが、どこのどつ頽かるのか知りたいところだ。

「いや、気持ちだけで十分ですよ。気にしていないのなら、このまま良いですか？」

口の中に、収納するとか言い始めたら困る。

「いいわよ」

ガガー

ガガー  
ガガー

コトシラ一行は、やけに長い、石畳歩道を歩き、入り口付近まで辿り付いた。

佇む彼らは、

「これって、ノックすべきなのか、ベルマークを押せばいいのか、判

断しかねるから、古見子さんお願ひします。」

おれはちやんと、女性を優先すべきだと、差にを譲る。

「生憎、私もいつのまは初めてなので…ベルを押させていただきます…」

何食わぬ無表情で、ベル可動ボタンを指圧する古見子さん。

ベルルー

べん

屋敷中に音が鳴り響く。

少し緊張するのは、生理的なものなのだろうか？  
ドキドキ、安堵ワクワク。

新キャラ登場の期待感が体中の血流を経由して流れる。

「珍しいな、こんな田に客人なん…」

ドアの向こうから、声が聞こえた。  
ん、何か引っかかる。

聴いた事のある声質だ…。

ガチャン

キー

「ほんにちば、そしてあなた達は、何方がたでしょ？」

正しい日本語を使えよ。

現れたのは、絶妙に親近感のあるそいだつた。

「いぢらこそ、お前誰だよ」

言葉選んで、正しく使つたあれ。

「あなた、コトシラ君の知り合いでですか？」

妙に親近感のあるオレらを観て、古見子さんが訪ねた。

「まさか」 そんなはずありませんよ

次回  
物静かで穏やかな人

読みづらい言葉を連ねているわけではない。これが全力だから、仕方ないだけな話だからだ。

意味気ままに、語らしてもうつて意味合いだ。これはそんな物語の断片的解釈から成り立つ。

「何処かで会いましたか？」

軽く爽やかな青年がおれらの前に、存在感を揺るがしていた。何処か見覚えがある、ルックス……頭の何処かでは、何かブレて刻まれているような気がして成らない。

青年は、本格的に大きな扉に背中を預け、もたれ掛かっている。

「何処かで会つては、いるとは思うが、他の話がしたい。」

家主とか、家族とか、組織絡みの人達とか、そう言つた奴らと話がしたい。お前じや、話もマトモにまかり通らん。

初めに、誰ですか？とか、人物名聞き出すところから、意味が分からぬいし。

「どうやら、検討外だったようね……友達などの間柄など……」

何かの挨拶だと思っていたのだろうか？  
おれらの野郎のやり取りを観て、そう思つたとか？

「それは、見当外だ。

「話は、要するに、家が火事でなくなつた。安らぎの空間が無くなつてしまつては、手段を選べなかつたつてわけだ。」

遠回りにも程がある。

つまり、『泊めておくれよ』とすがるような言い回しだと思つてくれ。

「はあ、成る程。それで試験も放り出すつてわけか…」

青年は、語る。

「ん?、シケン?」

しつかり、聞き取つてはいたが聞き取れなかつたフリをした。

「まあ、玄関口は寒いですし、中へどうぞ」

青年は、言わばパジャマ姿でお出迎えだつたらしく、勿論、陰湿な気分に誘われる。妙にムカつくつて言いますか…その辺りだ。

「優しくはない。振る舞い方ね…」

腹黒い嫌な感じしかしないその電磁波を彼女も察していたらしい。流石イトコ。

無駄に、血縁からよく似ている。

「好感度は、不評のようですね。当たり前ですけど、ははは

笑い方がまるで声優だ。違和感なさすぎて逆に違和感つて、こんな時に使われるんだな…

何処まで、納得の行かない人種だぜ。

日本語で回りくどくてまどろっこしいだ。

青年の言つままに、屋敷内に足を踏み入れるが、内部は予想が着くほど富貴に充ちている。

ゆとりと充実した家具、あと、ちらりと見えたが箱型PCは中々、不様。

画面を木つ端みじんと叩き割つて、粗大ゴミ誘つてやるうかと思つた。

「結構、典型的で笑っちゃいますよね、はは」

庶民に対する冒涜だが、別に裕福だから等つて羨んでいると云つた、感情は混み上がらない。だって、そこに愛情といった上等品が含まれていからな。

ま、おれも付属してはいない感情の一つではあるが…

「こなんの形だけですよ…」

青年は後に紡いだ。

「とてもじゃないけど、素敵なことを云つたのね。中身は空だけど…」

言つてくれた、おれの言葉でもあるそれを…。もうこいつ、兄弟で

もいいんじゃないかな?

「古見子さん、彼には、殿方とかつてよ。あくまでこれは助言のつもり……」

名前を晒さない。青年に対しての皮肉たっぷりなんだよね。

テクテク

青年一行は、広さがイイカゲンなリビングホールに連れてきた。今、視察した限り、青年はこの屋敷に一人しかいいらっしゃい。物静かだ。

「此處で寛いでくれると光栄です。」

青年は、あまり騒がないで大人しくしていいください。と述べた。

脳内変換もお手の物ぞ。

「暴れてやるうつかしい……」

荷物等は、部屋の隅に置いた。おれが通った通路は、引きずった大剣の跡でズタボロだ。ざまーみろ。

このリビングも、『一般者』と隔離された専用室何だらう、バーカバーカ。

さて、反抗的態度は止す事にしよう。此処まで迷惑掛けて頂けているのに、失礼も有つたもんじやない。

「君たちは、夕食とか、んーと、その、済ましたか？」

青年は訪ねる。よく見れば、同じ年にも見える。

「いいえ、町外れの田舎から此処まで何も口にしていませんわ…」

彼女なりの返答。おれは口を動かすのが疲れるため、こことに任す。ゲームは出来るのにな…。

「それはそれは、田舎街から…大変立ったでしょ?」

リビング付属のキッチンで何か作業をしている青年。  
どうやら、何かの仕込みをしているらしく…

「何なら、自分の作る、食べ物でも召し上がりますでしょうか?」

正直、腹が減つて疲れているため、胃袋に詰めれば何でも良しなの  
だが…

「うん、そうしてくれ。…青年、ゲーム遣つて良いか?」

おれは、ダルそうな身のこなしで振り向かせまに、テレビの下に綺麗に完備された遊具機に指を指す。

「勿論、良いんですけど、自分の事は、『端巻居』と呼んでください。  
昔つかひ、この呼び名じや、ないと反応出来ない身体なので…」

呼び方は、タンサイだそつだ。

一つ間違えば、天才に聞こえるが間違いなしに聞いたら、短才で  
ほぼ逆な意味合いになつたやうな。可哀想だ…

「タンサイ、私にも手伝わせてくれるかしら？」

良い判断だとは思つよ。五ポイント挙げるよ古見子さん。  
スキルアップも大切だしね。

おれは、その間ゲーム遣つて、くたばつて置くからさ。

ああ、頃云うのを修行つて言つたりするんじやないかな？俺は、思  
わないけど…

「良いんですけど、自分の料理は…物凄く危険ですよ…お湯で凍傷で  
する勢いですよ？ハハハ」

心配するだけもだだと思われるのだが…彼女に危険は、足しても無  
害無傷の結果に終わるだけだし…

「大丈夫、とでも前倒して置こつかしら？、物理的な危険は大丈夫  
です」

まず、何作るかが気になるんだけど、食べ物何だろ？な？タンサイ  
さん？

「そつかそつか、いいね、なら今日は、ピザカレーでも作ろうかっ  
！」

定番色彩の怪しげな名が飛んできむる。この調子なら、心配なのか…

「ピザカレー…え？…、それって食べ物なの…？それとも、食生活  
におけるヘルシー食品…？とか、言っちゃいたい…わ

テンション高いなー、テレビ画面越しからでも、彼の姿が想像着かないわ…

コトシラは、さめた感情を研ぎ澄まし、精神だけをゲーム世界に放置してきた。

彼の手を止めることは、不可能に等しい。

操作音鳴り響くワーディング。ソファーとテーブルとテレビを反響させ、バックで料理をたしなんでいる一人…

和むな…一生このままで居たい気分だ。

ぞっと…もしくは、おれが死ぬまでこのままで居たい…

「ピザは、まず生地をこいつ延ばすんだ。」

「…？」

「せうせう、お、上手いね。いい感じだ」

穏やかな日常感在る会話だ。癒されそうだ。

端締居は、良い奴かもしけないと思つた。

「あ、それと…コトシラさんだけ? 極限破壊試験合格おめでとう

…」

ん?

次回



全部おれの妄想でしか、動いていないよね？こんなんで本当に大丈夫なの？…考えないことにしてよう。

独りつきりとか、独り言とか、こうした感情論から成り立つたりするのかな？

「自分、タンサイっす。」

タンサイは、オープンの棒状の取っ手に手を置き、内部に潜伏し加熱された円盤状の食べ物を取り出す準備をした。

様な気がしたのか、…目線は液晶モニタなので自信はない。

「味付けは良好ね。…少しコクが足りない気がするけど…」

一方、古見子さんの方だって、銀色に光沢が觀られる容器の中身を警備している。

難易度イーマイナスのミッションって感じがする。

いわゆる、ランク化と評価別に認識。

…これもまた、背後で行われているため、想像範疇。

「…タンサイさん、絶対何処かで会いましたよね？覚えていません

か?」

わざわざ、すつ飛ばしていた事柄を今、振るおれ。

「…其れは多分アレだ…筆記試験の急に、席を飛び出したお人だ。」

黄金の番りと円盤の匂いが、室内にっぽいに立ち籠もる。

は、  
どりでも良いので、訂正を試みる事にした。

「いや、それは違つと思います。現にその人、おれの眼の前で本当  
の意味で消えたから…」

シイクさんでしたよね?困惑と混乱と堂々と消えた人…

「本当の意味?…ですか…なら喰われたのでしょうか。あなたも氣  
をつけた方が良いですよ?コトシラさん」

古見子さんの気配が感じないのは流石と言える…ちょっと寂しいけ  
ど。

「喰われる?何処ぞの神が定めたルールだ?それは?」

話が入れ替わるのも少なくはないが、この件は変えざるを得ない情  
報だ。

「コトシラさんは賢い人柄みたいだから感づいて、此処まで逃げて  
きたのだと思ったのですが…違いましたか?」

初耳も此処も来ると産地直送の新鮮感しかしないな。

「つまり具体的に言ひてどう言ひ」と、それつて、試験と何か絡んでいるのか？」

やつと思い出した。」いつ、筆記試験の鉛筆を回収しにきた物静かで穏やかな人だ。

雰囲気が全然別物だから、気づかなかつたけど、家だけとか、少人数だけとかの条件を満たしたときに発動する一枚目みたいなものだらう。

「絡んでいるも何も、これは自由と養分とを分ける分岐試験だからね。落ちるか、逃げ出すかしてみたら、神の養分組入りだからね。氣をつけて、… 何て氣休めにも成らないね。必ず消される」

なんてこつた！

そんな間抜けなことをほぞけたら、どれだけ嬉しいか…

呆れて逆に言ひそうだ…

大体、神なんて居るの? つて、定理がまだ解明されていないだけでしょ。

神イ「ール何らかの自然現象なんだし、

「洗いざらいに、喰らつているのだとしたら、神は小太りしたおっさんだろ?」

フライドポテト感覚でパクパクしているだけだろ。怖くはねーよ

宗教じみた教師等も義務教育も、神に恐れを成して、出来上がつちやつた習わしだったのか…  
つづづく思いやれるとは、よく言ひたもんだ。

「神に敬意を払いべきですね。早くも食べられますよ?」

いつの間にか、液晶テレビの前には、ピザカレーと些細な菜たちが群を成していた。

何処で食べようが一緒の趣向主義者で助かる。おれは、いつもに様に足の指先でゲームに没頭するだけ、後は何も要らない。

「神といつのは、不適切だ。欲望まみれの奇人と言つべきだ。」

病気染みた、テクニックでコントローラーをコントロールする。

「あのちょっと良いかしら? 先ほどから、話を聞いていたのですけど、神つて何?」

古見子さん其ではないんじゃないかな?  
あからさますぎはしないか?

「じめんな、古見子さん僕達だけで述べまくつて、大丈夫だよ。  
ちゃんと、古見子ちゃんはいい声してるので…」

フォローでしたか? いつ言つた…

確かに、この青年だけとだべったり、話したりするのは、気が滅入りますよね。

「こんな意味を交えて言つた訳ではないけど、正直の所寂しかったのは事実ね…」

個人的に薄い人だから仕方ない…けど、放置は良くないのは解つた。これは、俺が今まで生きてきた中で授業よりも為になる知識だな。

「自分もわりと神神言つていたけど、結局、神なんて『ハハハ』

よ、ハハハ」

ヤべ、カレーがつまく感じた。

良くてきたカレーだ。何? この『アマ』。

まるで、神がかっている。

血すぎて鼻血が出そうだ。

こんな時だけ、生まれてきて良かったと思える自分に、涙が溢れて

あわづだ。

「千変万化に、いきなりどうしましたか? ロードシルバニア」

生々しい涙を拭ぬれに、小馬鹿にした態度でタンサイが話しかけてくれる。

「こんな時つて、田から鼻水が出てるって言つた方が良いの? もしくは、田の水溜まりダムが決壊したの? どうして、って答えるべき?」

おれは感動のあまり、隣に座る古見子さんに…

「両方やー。」

爽やかに、左手を肩に回す。

この友情は、愛在る印とか言いそうな珍妙な光景。

「ちよ、辞めなさいよーとか、行いちゃいたい…わ」

確かにこの好意は、デリカシーに欠けるな… 良しやめよう。

オレは、あくまで紳士で居たいのだ。

「中が良いですね。観てるとぶち壊したいな」と思つたりしますよ。

「

喜劇な事を言つた人のも」

「君たちを観てゐる…何だか、イイなこうこうのもつて思ひますね。  
…」

寂しげな面持ちに変貌。何か言つた方が良いのかといふと、意外と言えない雰囲気が身を取り囲む。

「少し昔話をしようつか…」

黙りこくつた僕たちを観て、深刻な威圧感を放ち話をしだす。

俺の足もだんまり。ゲームは一時停止だ。カレーは本当に旨い。ピザもおいしい。

「この屋敷は、昔、魔女が居たんだよ。ずっと、前にね。」

昔話ではなく都市ですって落ちたら。

「魔女は一人。孤独に静かに過ごしていましたそだ。」

童話の域だな。

「そこには人の少年が迷い出来たんだと、

その少年は、死にかけ…恐らく各街を行き来する馬車などの人達が

乗るそれに、化け物が手を出し、はぐれ離れの死に損ないだつたの  
であろうな。」

生きていても仕方ない…か。

「魔女は少年を助けた。看病に徹した。  
少年は回復。さらに元気に成長する。

魔女はといふと、何だかんだで養つていたようだ。」

ここまでは、よくありそうだな。

「すると、少年が立派な魔導流行刃刃師に成ったのだよ。魔女と人  
間のなせる技さ。」

魔法と武術を兼ね備えるか…

「その青年は、魔女にこんな事を言つた、『僕は、人だからあなたの為に、何か恩を返したい…けど、その前に人間としての役目を果たしたい』と、そう言い残し、不老不死とも言える魔女を葬つた。」

何処まで、人種の壁は越えられない物が在るのか…  
人種では無いな。家畜と所有者。

「その後、その青年は世界中の魔女を殺し回つたとさ。…

「あなたは…その青年なの?」

と、

古見子は言った。

行刀刃師 魔導流 次回

過度の笑いを取らうとした過ぎて可笑しかったのか？いや、現実味が在りすぎで、逆に嘘にしか聞こえないな。

「トシハ、彼の話を信じようとはしなかった。

「嘘か誠かなんて、証拠は何処にある？と訊いてみたり、お前は迷わず証拠は無いと言つてくれるんだろうな？」

夕食会も、終わりを迎えていた。明日からまた今日のように当てもなく歩き出す旅になるのだ。今日はゆっくり休みたい。

「え？、昔話に証拠なんて要ります？自分はただ、そんな事もあつたな……と慈しんで居ただけですよ」

とタンサイ。

「ああ、はいはい、解ったよ。お前はただ、そんな事もあつたを長々と語つていらっしゃればいい。おれには関係ない話だ。」

よしまあ、食器の片づけくらいはおれ一人で遣つておきたいな。今此処で一番策に立つてなかつた事の成り行き立つたから……。

「んじや、おれ、先に食べたやつたから、磁器でも洗つとくよ」

「トシハ、食器を洗い始める。

「…頼んだよ。」トシハ

馴れ馴れしくタンサイは、綺麗に食べた食器を手渡す。

「手伝つてもいいかしら?」

横から古見子が親切に言つたが俺は断つた。

「気持ちは有り難いぜ。けど、此処はおれ一人に遣らせてよ。立場的なもので…」

「敢えて引き受けさせない。なあに、独りで皿やお皿を黄皿で洗うのも悪くないもんだろ。」

「でも…効率面なんか考えてみても、私と一緒に一人で洗い始めた方が…」

「…」  
氣持ちを受け取るだけでも、こんなに困難なモノなのか?…

「いや、効率面よりも今は、お前が十分休んで居ただけるだけで嬉しいですよ、だからね、おれは一人で洗う。」

思つまま口にしたけど、これで良かつたのか、後々になつて後悔するのかな?

「…やう」

残念そうな顔は、おれにとつても辛いものかもしれない。彼女の一番の敵は、おれかもしない。

とにかく、タンサイの所へ在るいく古見子。

「入浴室は何処に在るのか…解説してくれるかしら?」

タンサイは親切に教えてくれた。

次の日。

本当に裕福すぎて、腹が立つ一歩前まで誘われた。

コトネリは、ふかふかベッドで心底熟睡してしまったことに、憤りと怒りなどの感情的なモノしかこみ上げきれなかつた。

止まるべきではない。よし、次から野宿だ。と宣言した。

「本當昨日は、ありがとうじやあ、元気に独りこの屋敷で居座りな

コトネリ、一生孤独そうなこの人に、憎たらしい言語を送る。

「嫌な」と言わないでくださいよ。自分だって、そうならなにように努力してきたんだから」

古見さんはと云つと…

「ま、みんなで仲良くリビングで寝たからいいんじやないかしら?」

そう云つた。

昨日は、寂しげなタンサイの為にゲームパーティーをしたのだ。ベッドとは、何故かリビングに放置されたベッドでよく眠れたつて言つ妙な話。

「それもせうですね……もし良ければ。いつかきっと、ここに再来する」ことを願つてこますよ。」

不思議と今まで、こここの屋敷に何回も来たような感覚に囚われる言葉……

「お粗末な事を抜かすな。次はあり得ない。昨日は偶然だ。」

偶然にしては、本心違和感が感じられる。必然にしては、露骨すぎる。

ちよつと、中立を保つて居るのか?

……凄い。奴だ。

「今日会つたこと、忘れた方が良いですね。お互のため……」

屋敷の門前まで見送り、最後にイチゴン言い放つ。

「では、またきつと、どうかで」

最後は最後らしく。さよならも言わなかつた。

「ねえ、コトリシラ君、今、田に見えてるこの不思議な光景をみて驚いたりする?」

する訳ではない……。しかしと、言を並べればいいのか、田に映るのは昨日とは似ても似付かわしい風景。絵画の様だ……

コトリシラ等の眼前に、広がるのは、先ほど居た屋敷。

立ち位置は、昨日初めてこの建築物をみた門の前。横には、ちゃんとした、木板が張り付けてある。

「門をくぐつて、時間移動したのか？」

現在位置の確認と時間的認識の確認を照らし合わせれば、その結果にたどり着くのは、妥当。

「そんな事在るわけ無いわ。幻よ。」

あり得ないは、幻に繋がる…違つ。

「幻で片づけて、この状況を打破するとは思えない」

こんな時だけ冷静なのは、矢張りまだまだ人生経験語り無いからなのか？

「嘘よ。彼にまんまとハメられた線とかがまだ良いわね… それはどう?」

いきなり、こんな面白みに荷送り込む欠ける場所に送り込む彼の神経がどうかしてるだろ?

「面白くも何ともないから彼の仕業ではないと思つ。」

うなだれる。うなだれる。

「… 逆発想して、最初から全部が幻だったとかは? これは俺の意見」

バカنسンな気分で、探検していかがおうか…

「そうね… その方がハラヲくれるし、…、ハハハ、探検なんかよ  
り面白く遣りそうな気がしますわね」

狂氣が芽生え始めたな。カテゴリーどんどん増えていきそつだ… 惡  
いな。

「めちゃくちや言つてくれる… 惡いな、古見子さん」

あ、この人が根源的だったりして、人様を勝手にどこか知らない所  
に飛ばせる厄介な人だしあしかしたらの案も立てるべきだ。

「怖くなんかないわよ。怖いのはこの状況下…」

訊いて観るに一票。

「もしかして、古見子さんが遣つたとかじゃないの？・能力とかで…」

その通り、で一件落着、ハズレでフリダシ。

「言つておくけど、送ることは出来ても遡つたり、反遡つたりは出  
来ないモノなのよ。」

時間移動不可、その前に、そこまで何なりと時間軸を微調整できる  
モノなのか、疑問が进る所何だが…

「よし、分かつた。これは夢だ。俺達は同時に悪い夢を見ているー」

人の夢と書いて、悪夢と読むのは、悪いことか？…いや、悪くない。

「生半可の気持ちで夢と語ってしまったから、文字通り夢も身も希望も蓋も無いんじゃないの?」

「冗談のつもりだが、やっぱり古見子さんの最初からこうだったに違いないの案が正しいのかも…」

「すみません。惚けたつもりで話してのです。すみません」

此処に一つ如言を納める。いつかひじりだつたのかな…きっと、最初からこうだつたに違いない。

「前例がないのよね。人生経験上…ずっと送る側だつたし、私

送られる側も大変だらうな。と思つのはおれだけか?

「ま、この方がずっと、楽しい旅になるんじゃないか?一世代前が生存率低かつたし、『いい旅になりそつだ』の名言もいえるし…」

「そうね…」

始まりは、此処から…

次回

竜モ飛ビ

龍モ翔ル



築き上げた創造主は、齟齬く好い加減な奴だと打ちのめされる…

「ぞひと当てつけて、四万年前の拝辞時代だろつな…」

拝辞時代とは、オレらのずっと昔の先祖に当たる彼らが、まだまだ、優れた英知を蓄えていなかつた物理の世界だ。

この時代から、魔術師がちょこちょこ現れる様になつたと歴史書に載つていた。

「軽く見積もつても、この屋敷だけは魔力がふんふんするわね…一般人が近づかないのも解る。わ」

昔は、物理で人が動いていたからな…感情の具現化なんて、幽霊を観るようなもの…だつたのだろう。

幽体かも可能になつたおれらの時代が化け物だから、何も怖がりきれないけどね…

人つて恐ろしいよ本当。

「とりあえず、街に出たいな、拝辞時の鉄筋コンクリート製の町並みが観てみたいし、森林伐採でこの近くにもやたらと住居があるだろうしね…」

進むべき方向は、変わらない。何だか、四万年前の世界だつて東西南北が変わらぬ位置に在る所が定着感があつて良いな。

提案される意見に異論を述べる古見子さん。

「でもそれじゃあ、狩人ブームに乗っ取った私達の衣装が浮いて見えたりしない？」

確かに…オールジャージ姿の古見子はともかく、軽く武装したおれは、かなり危うい…両手に腕時計なんかちゃつてるし、なんといっても、この左手に携えている重量感有り気な大剣が今後の物語を物語っている。

「…心配ないさ。」この時代の人達は、偏見や偏執な眼は向けないよ。なんせ、論理的思想ではもう自治や治安がままならない処まで来ているからさ」

正直な話、この時代は個人的に好ましいジャンルが存在していた風習が在ったため、色々、調べていた様な気がした。

「愛がなせる業とか？そう言つたものかしら？」

その通りかな。まあ、要は人の深さかな…

「良い話ね…話変わるけど、簡単に過去と接したりしていいの？属に言われる過去改変乱用罪で時空警察に「用なつたりしないの？」

古見子さん、しつかりしてくださいよ。ネタが旧すぎて、…イーチ工過ぎて突っ込みも使用出来ない。

「え、おれ、現代人つす。って言えば、問題無いだろ？所詮、時空警察だぞ？」

正論をぶちまけた。帰る余地は無い。

進むだけだ。前に…

「時空警察も嘗められたものね…今となつては、都市伝説も当てにならない御時世から来たものだからね。」

仕方ないと言いたいのだろう。都市伝説イコール情報操作だからな。「この時代のお巡りさんも拝見したいな、しつかり頑張っているか？などと、敬愛を敬い慕う意味を込めて…」

この装備で行くことにしたコトシラ。

壮大で果てしなく広かつた森は、一歩歩くごとに中途半端にマンションたちが見え隠れする安っぽい境地変貌を遂げていた。

「空気が薄いわ。此処何処なの？」

吐露するのは古見子さんの方、その口語通り、明らかに大自然に囲まれた住民からは、空気味に違和感を覚えるだろうね。

「此処何処は余計だろ？此処は『余白系第五惑星』の『区異星』だから、細かく言つと元我バルト王国郊外。あ、現在の地名は知らないな～」

一人独り言を、前方に歩く古見子の長髪に当てる。

「現地の名前を知らないあなたはもうダメね…出直してきなさい」

最初に振ってきたのはお前じゃないか…の名言は期限切れ、言った  
くても期限が限定されている為此処はこうである。

「お前、かわいい奴だな～。頭なでて良いかい？」

場の空氣の支配者とはよくもまあ言えたものだ。

イトコ、と言つと既では「これは普通の回避方法と昨日のタンサンサイは  
言つていた。

使う日が此処まで迅速とは思わなかつたが…

「はいはい、戯言はやめましょっ？此処は現実よ？別次元にでも行  
つてやり直してきなさい」

道は疎らひべだぐだ。歩き辛いつたりやありやしない。

「あ」

短い声で鳴く古見子さん。

「危ないなー実に危ない」

棒読みで掲げ、体勢を崩して森の柔らかい土に激突する予定の古見  
子さんの手を引く。

「げ、現実でこんな演出が訪れるとは思わなかつたわ…」

状況は最悪、両手塞がつて居たため、右手に許容するテントを放り  
投げての救出のため、テントは泥水たまり不時着した…

等価交換とはつぐさか、古見子さんは助かつた。

「古見子さんが無事で何よりだよ、テントの犠牲になつたんだから

…」

テントは自由に空を飛び、そして夢く墜ちた…きっと、テントも幸せだつただらひ…

「私よりテントを助けてよ。テントが可哀想…」

古見子さんは、

振り向きテントの安否を観て、衝撃を受けた…  
テントは、泥だらけになつただけだ…一度と使えなく成つた訳ではないのだ。けれど、そのテントに感傷を許すなんて…  
彼女らしいな。

「古見子さん…そんなに落ち込む成つて…俺だつて、テントの」と  
考へていなかつた訳じや何だ。どつちも大切だつた…

イカれ物腰なテントは沈黙と混沌を凌駕してい…

それを観て、悶え悲しむ彼女は、観ていられなかつた…

「私の所為なのかしら…きつと私…何の役にも立てない、何も救えない、みんなを苦しめる…そんな存在なの?…私」

言葉を選ばないと、罪悪感で死んでしまうそうだ。

「気にするなよ、お前が悪いわけではない…あれば、結果だよ。…  
俺たちは、最善をつくした。その事実だけ在れば、彼だつて、許し

てくれるな……お前等やつてくれたなって……

だからさつと、

「古見子さんは、悪くない。」

屈み込む古見子さんに囁いて、俺は無言で泥水たまりに足を入れた。  
温い温度が両足に伝わる……

生きていると自然と、立ちくらみがしたり、頭痛がしたりするが、  
今の俺は何だか……  
そんな感じた……

「よつと、」

軽くテントのバックを握り持ち上げる。足元は数十センチの泥で靴  
の中はカオス状態。その上、頭がクラクラする。

酸素が足りないのか？

「はあはあ、古見子さん……大丈夫ですか？」

訪ねると……古見子さんの返事はない。

「古見子さん？」

「うぐ、

クラむ視界に、恐怖感が進る。  
此処で倒れたら一環の終わり。

どうにかしないと…

「どうにも成らないか…あはは、」

初めっから知つていたよ。

ここは、四万年前。

知つてゐる、解つてはいた。

俺たちが住んでいた世界とは異なり、科学力が優れ、何故か、俺たちの世界だけ科学が進歩しなかつたのか…

簡潔回答を呈するならそれは、

それは、

純正の人間は、一度滅びたがら…

目の前真っ黒だ。

次回

こう繋がるのか…

最初から知っているようなフリをして、振る舞つてた。真相は知らない。

オレらは、微量に不思議な世界でずっと生きていた。それだけ…

「死んでも可笑しくない境遇だったな…生きてる心地がしなかつた…」

目が覚めたコトシラは、今を觀ている。

今は、元居た何時もの世界…

オレたちが放浪していた時代より四万年先の世界だ。

何であそこまで、破壊的な出来事が起きるのか…

全部まとめて、おれの持つこの大剣の所為だ。とでも言つてしまえば、どんだけ楽なんだろうな。

「私…何か喋つていたかしら?..」

彼女、古見子も無事でいつもと何ら変わらないはずの口調で訪ねてきた。

「私は必要ない子…的な何かを叫んでいたよ。お前、」

覚えて居る限りの事も伝えるつもりで、重要ポイントだけを抑える。

「い、生きていけないわね…」

彼女にとつては大打撃だったのか…凄まじくとも無い事を零す。

「不安がらなくとも、相手がおれだ… 大したダメージではないだろ？」

助けるを前提として、語りかけたコトシラは、その意味の重大性に気づかない…

「やうなっちゃんのがな？」

恐る恐る聞くよつの感じ…

疑問符を提供するのなら、返す言葉を変換しないと。

「やうなっちゃんのですよ」

時間の移動は、僕らに何の影響を与えたのだろうか？

取り除かれる歪みを体験する境地…

今までよく生きて来たなつて、本心思つたりするのだな…

「テントと… 同等の私はどうだったかしら？滑稽を通り越して、有頂天だつたりしない？」

有頂天になる心境も掴めないな…

良いことでも、在るかの様な言動の振る舞いだ… 心地良いものではない。

「…面白かったよ、お腹いっぱい！」

面白かったは、本心。いわゆる言霊。

「そう…そうね、私は道化にならなくちゃいけない生け贅つて訳なのね…」

初期設定とはまた、だいぶ違ひを見せる姿だ。成長したのか、変わったのか、どちらかハッキリして欲しいな。

「と、話を変えていただきますとね。歩く道筋は決まつていても、次また、泊まらてくれる人間に会えるか解らないから、…その意見に関して、言葉を聞かせて」

話を四十五度変えて、分岐を変更する。行事に取りかかる。

「さうね、…テントは在るんだし、近くに川が流れて頂けたらまだ、過ごせるわ」

それは、お泊まり断念の口の話。

今日かもしれないし、遠い未来かも知らない。

覚悟は前もって、定めておくべきだ。

「清潔を維持するのは断念した方が良いぞ、女性は死ねつて言って居るもんだがな…」

なんだかんだ、コタるのなら前もって話を付けよう。

「頭が割れそうな。問題ね…そこを解決できたら、まだ現実でも遣つて行けそう。」

現実を見直す。やつとこさ、頑張った努力も報われないのが現実とばかり思っていたが…解決できないのも、現実特有だと知るコトシ

「」。

「裸で歩くしかないんじゃない?」

「いつ言った言葉は、禁句だつにポロッと出てしまつ…

「馬鹿なことは言わないの。」

「ううです。ううです。正しい判断です。  
おれは馬鹿だから、自分の言った言葉に自信がもてない。  
哀れな人間です。」

「『めん。馬鹿で愚かで』めん…」

森は深く、方向探知を身に付けていなかつたら、絶対的な数値で遭難してしまつだろ?。

能のない奴は、生きられない。よくできた世界は、今のように単純な弱肉強食で彩られた事を言つのか…

「そんなに気持ちを入れて、謝らなくていいのに…、私の方が悪いみたいでやるせなさこつぱい…」

古見子さん、楽しく生きるにはどうしたらいいのだろう?

果たして、今のおれは楽しんでいるのかな?

そして、田の前の彼女は楽しんでいるのだろうか。

「古見子さんの作ってくれたカレー美味しかったよ。」

「クと番りを楽しんで食べていたから、あれは楽しかったのかな?」

「… そうね、懸命に必死で作ったから、それなりの味は出たじゃないかしら？」

なら不味かつたと言えば、どんな反応を起しますのだろう？

「美味しかったって言つたら、どう思ひ？」

素直に聞くのがおれの主義。

「美味しくなかつたら、美味しくなかつたで良いんじゃない？ 正直に答えた方が嬉しいし、嘘で固められた言葉なんて、飽きるだけ…

飽きると、どんな表現だ？

繰り返される」と飽きるのなら、美味しいってこたえる割合が多くて、またそれも、嘘にしか聞こえない事を示しのかな？

「頭が痛くなつてきそつだ… もつ戻れないな。」

勢い任せの言動も疲れた。もう少しでもなれだ。

「あ、モンスターが現れたわよ。ビックリ！」

今更モンスターなんて出ても、戦うのめんどくさい…

「そんなのほつといて、歩きましょ！」

てくてくと歩く。森林はやけに静かで虫もいなつだ。獣鬼はのこのこ現れるくせに、

「…無理みたいよ。」ひちに向かってぐるわ。「

その通りと云わんばかりに、獣鬼がキチガイな声色立てて、向かつてぐる「

「死にたがりなモンスターだな。ここまで死にたがる生き物は、人かぐらいだぞ」

知識や技術が進歩した時点で終わり立つたたんだろくな。獣鬼の方も、以上に満ちあふれてこる、言わば同類の感じ。

「あ、そうだ。ペツトにしてみないか？」  
ふと、思いつく。

「ペツト…？あなたもずいぶんまといつているようなのね…」

死を覚悟した蚊のような眼をしているのかな？  
鏡があつたら観てみたい。

「一度決めたから…一度試してみないか？捕獲して、監視するんだ」

無茶言つてるのは、水の泡を觀るより明らかだ。けど、何かが変わるものしねー。と言つ名の好奇心が僕を駆り立てる。

「一度…だけなら遣つてもいいんじゃない？モノは試しよ」

良ことと言つてくれる、そつと決まれば…

コトシラは、獣鬼に向かつて飛び出した。手持ちの大剣は形を変えずに、コンパクトサイズ。

「古見子さんも手伝つて、」

古見子に声をかけるコトシ。

「言われなくとも、そりするつもじよ」

素早い動きで走り出すのが解る。  
これは盛り上がる。

一瞬の間に、作戦を考え始める。

「古見子さんは足を狙つて、動きを止めてくれ」

俺は、あくまで敵を殺さないよう頭部を狙つ。  
敵は、狼型と狐型のハーフなので動きは早いように見えるが巨大な  
ので気休めばかりに動きは遅い。

「殺さないよう頼む、が抜けているわよ」

層だった。彼女なら謝つて殺しかねない…

「殺さないよう頼む」

「解つたわ」

次回

もう疲れた

無感情理論を虜げた私に、感情移入なんて高等技術、通用しないのよね…

こちらへ進撃し、直進しつつかるとはいきれない獣鬼の振る舞い。何故なら、木々が入り組みその巨体の特性が十二分に発揮できていないからだ。

森と言つことだけあって、あたり一面森しかない。雑草すら、地面の土を覆い隠しきれない。

どこかで密林と言い表していたのなら、言葉の誤算だ。すまない。それはさておき、これからの一連の行いに関して、語彙を連ねよう。

今さつき、の自分等は仲間にしよう。

とんでもなく、差別感無しぼやいた戯言とかだつたけど…実行力する段階まで来てしまえば、跡も取りも、引くことも、出来やしない。示度は、捕獲。後に洗脳。結果…の順に、用途はペツトとする。

「まだ、八時半くらいよね？…この肌寒さは、春だからなのかな？それとも、午前の太陽が休んでいるから？」

深林の空気は、喉が裂くほど澄んでいる。

その所為在つて、澄んでいる分、空氣も温度も氣分も寒い。

「曇り空なのは頭上を觀ればよくわかる、普通なら、今日は、雨だ。  
寒くても氣象に感謝しろよ。」

説明不足で悪かつたが、刺激を繰り広げた狼の様な『大狐は、俺の一撃で翻り仰け反り、喚いて逃げ出したのを追跡中つて言ひようだ。

「あの獸も大変ね。あちらから、攻撃を繰り出すと思ひきや、ただ、森なら何処でも落ちている木の実を全力で広い喰いしそうとしただけなんて…」

おれが獸鬼の顔面を軽く横なぶりしたいけど、その際、俺の背後に有つた散乱した木の実を觀れば、大方大概は『この木の実が食べたかった』に繋がるよね？

その通り、狼顔した彼は、木の実を逐一この場所に、貯蓄した。

「断言した。」

中途半端や生半可とか言われる前に、まづは言われない努力の兆しを見せるべきだな。

「何を？」

古見子さんは、おれの後を追う。  
俺は、獣鬼の後を追う。

残念なら、木々をポンポンと飛びわたり、掛け走つたりは出来ない。

「あの獣鬼の顔をほんの少し、余見して頂いたんだけど、…」

頂いたと言つより、見えた。

「あの獣鬼なんだか、愛くるしい顔付きしていたんだよね。だから

…」

此処でも断念される。

彼女は、  
だからどうした?

と言つ。

「だからどうしたの? もしかして、何かに芽生えたの?」

…

素直じゃないな

俺の予想を否定するより、言葉を追加するなんて…。

「タレ田」

俺は断念した。

「え、…」

彼女は、言葉を失う。

「あの獣鬼…タレ田だったんだ…」

そう、恐らくあの瞬間、目があった。

ほんの一瞬の出来事。出来事でもない。あれは、万物の節理の法則

の如し、そうなる定めだった… そうに違いない。

獣鬼に一瞬、心を奪われるとは、不覚としか言えない。

「なんだか… 悪寒が走るのは気の所為?」

まるで、鬼畜でも觀てる様な眼差しを僕に向ける古見子さん。オレの背後を追つて、姿が見えないのは解る、けれど、それは鋭利な視線を送つているのは解る。それだけで斬殺できそうなその眼力を…

「明日は晴れると良いですね。」

おれは、視線を中和するべく、如何にもわざとらしい話の切り替えに申し出た。

「明日は、晴れると思つけど、今日は振るんじゃない? この天氣よ?」

薄暗いし、太陽もどの位置にあるのか… オレは兎も角一般人には解らないな。

そう思うと、俺って、人より得した人間じゃないか?

確かに、この時代に生きる人等は、皆身体能力は四千年前より断トツ的に遙かに高い。だけど、それは当たり前であつて… みんなそうして生きていく。

方向を司るおれは、人以上だつたりするのかな? 自信や自惚れはないけど…

「今日は大丈夫だよ。空は雲ばかりだけど、雨は降らない。これは憶測…」

勘が外れたり、反れたりはよくある。

「あなたの勘は、女性である私の勘より的中率が高いから怖いのよ……」

今度は、化け物を観るような眼差しを送る古見子さん。

俺もまるで獣の形相で獣を探知する。

「そんな事無いよ。おれは何も考へていいのか解らない。古見子さんがよっぽど、狂魔王だよ……」

ホオローもぱっちりはらんだセリフ。

「ホオローのつもりか、ホオローに成つていかない処が絢爛ね」

何とでも言つが良いや。おれには、ホオローのつもりだったんだからな。プンスカブん。

日常会話に、勤しんでいた俺たちに一手、置いたのは古見子さんが先手。

「さつきから駄弁つてばりですけれども……あの怪獣の後を本当に追つているの?」

それは、問題ない。やぶさか、おれが永遠に見つけられないとでも思っているのか?

と、此方が思つてしまつ言い草。

「生物の行動パターンを把握している…他言無用だ」

「この発言、危ないよね？」

危ないと思われるかた、うつわーと行いつて、僕の隣を素通りしても言いよ？。

「うつわーですわ」

何処から幻聴が聞こえてきた。  
気にしない。気にしない。

「なら、頼もしい限りね。安心できやつ……」

今の言葉を起点に、獣鬼の動きが止まった。此処からは見えないが  
多分止まり停止したのは解る。

「そりそろ、タレ目ぢやんのお出ましだぜ。準備しておけよ。」

あのタレ目獣鬼、偏見と同じ物の見方で高く評価しているから頭は  
いいだろ？…。

賢いから食料は、一力所だけじゃなく複数に保管している。  
俺たちを巻いたと思って、安心して貯蔵ポイントに向かつたと、思  
われる。

あのタレ目にも悪い」としたな。

そつ言ひ風に思えるのは、オレだけか？

あつと、オレだけじゃないはず、オレは信じているからな。

コトシラは、若干木々が少ない森にぽつかり空いた敷地へと飛び出した。

「草木が見あたらさないな。ミステリーサークル建設地跡か?...」

オレの後を追っていた古見子も、ゆつたりとした歩調でミステリーサークル建設地跡と思われる敷地内に入場。イチゴン田に…

「まさかとは、思つけど…ボス戦じゃない?かしら…」

と、ゲームチックに短く語り出す。

「ボス戦とは、名残惜しいあくまで、あのタレ田ちゃんは、仲間にしたい…」

煌びやかな俺の身を観て、古見子ため息混じりに…言葉ノベル。

「上手く行かないのが現実よ。」

嫉妬心ありありじゃないか、別に、邪な考えやいかがわしい思想や恋愛沙汰とった感情は一切何だが…

ただ、憧れや良いなそつ言つのも、つて言つか…言葉にできない何かだよ。つまりは…

「萌えるって、こんな時に使うのかな?」

素性に聞いてみたくなつた。

「あなたが言つのなら、やうなんぢやない？私にはよくわからない世界なの……」

次回  
狼狐

不思議と獣鬼は話しかけてきた。

「今日のお前等はついている、何故なら、今日は曇り空だからだ、眩いばかりに輝く太陽が进つて、居たのなら…残念ながらお前等は死んでいた…」

話を聞いていると、必然的に返す言葉が出てこない。  
そこら辺に、返す言葉が落ちていたとしても拾つまでが面倒だ…。

「あの怪物…殆ど末期と言つてもいいんじゃないの?…早くビックリしないと、大変なことになりそうよ…」

と、古見子はあの獣鬼に、ではなく俺に対話を申し出る。

そうだな…今の言葉を本心本音で言葉を交わしているのなら…  
狼の狐のその外見が

犬のような、狸のような生物に関連づけて、見えてきそうだ…

「おい、獣鬼。お前は、何故日本言語を理解し、なおかつ日本人にも分かりやすく文脈を整えて語り出せるんだ?まずは、そこから疑問符だ」

獣鬼な彼の第一声がオレはどうも…

藁も無ければ、大地にすがり付きたい的な的な言葉の振る舞いにしか聞こえないのは、おれだけか?

「な、古見子さん?」

「う、うん…」

オレだけがそう解釈していたようです。

処変わつて、獣鬼がモノを言い出す。

「オレが…言葉を話せられる理由か…」

獣鬼は、全体的に脳内歴史を逆再生しているような様子だ。

繋するに、思い出している。

ひとまず、言わせて…第一自称がオレってかぶつて誰が誰だかこんがらがつやうよね?

「何か、戯言でも話したらすぐ崩れそつじやない?」

お隣で囁く古見子さん。

「おれに、其処まで相手を蹴落としたり、陥れたるする語学はないよ。」

つぶやき混じりで返す。

獣鬼の方は、脳内回想に没頭中。楽しそうだ。

「古見子さんなら、遣れそつじやないかな?その持ち前の眼力で、

邪険晒し完膚無<sup>ままで</sup>に平伏す」とも、出来ぬは<sup>あらわ</sup>りやうへ。

基本ドジ田な彼女は、こんな時こそ役に立つとばかりに思つてた。

「そんな事、容易く私に口走つて良いのかしら？」

「うん、良<sup>こ</sup>よ。何なりと……」

即答なおれの態様に、うぐ、とかの躊躇う面影が見て取れた。  
昨日退治した、イノシシは圧縮ポーチに入つてゐる。あのときは、  
ちゅうちょ無く殺したが今回ばかり話が違<sup>た</sup>いと、語りかけて<sup>いるよ</sup>  
うな古見子さん。

「交渉的な感じで行けばいいのよね?なら私にだつて、やり遂げ  
るわ……」

自信情げに、物を吐く。空氣は急降下して緊迫化の一途を辿る。果  
たして、運命はどうやら見方をしてくれるのか…  
僕には、予想も予測も附かない。

「頑張つておいでよ。新たな仲間を増やす為に……」

肩を叩いて、今から始まる惨劇場に後を押す。

勇気つて、なかなか出せないものだよね。自分一人だけで振り絞る  
のつて、困難極まりないし、後一步の処で留まつてしまつ…。  
そんな時、仲間の重大さや仲間の価値勘が決まる。

おれには、仲間何て居なかつたけど、オレの田の前にいる彼女や屋  
敷の端役居や今は、この世には居ないがきっとまた何処かで会える  
シイクだつて、

みんな仲間じゃないか…。

仲間つて良いよな…

誰かがおれに…

何時かは解らない遠くない未来にこう言い聞かせる奴が居た。

「行くしかないのよね？」

「おひー、」

「なら、行くしかないのね…」

重量感の無い足取りで、獣鬼へと向かつ。

一方、子犬の様な狼色な巨大狐は涙をこぼして嗚咽はりんで涙ぐんでいる。

なんか、とんでもなく悲しい事柄があったのか、全力で泣きしゃくつていて。

彼を観ていると…タレ田つてこんな使い方もあるのか…と感心してしまつのは、おれだけの習わしなのだらうか？

「獣…鬼…」

怒鳴つちや駄目なお分かり？古見子さん…

「ひげえうー」

ますます、興味を誘つ驚きつぱり、面白いを通り越して、微笑ましいが適切。

「あなたに話が在るのよ、聞いてくれる?」

古見子さん優しく冷ややかな視線を送る…これでもかつて良いほどに、

「な、何だ…人間か、で、どうした人間風情がつ」

この獣鬼も此処まで乗り気だと、突っ込む余地もないな…  
タレ目じやなかつたら、斬り殺して居た処だぞ。古見子さんが…  
いや、おれか…

「人間風情…ね、なら、あなたは小動物風情ね…」

遠慮がないな我がイトコよ…おれの弟より局地的に的を射抜くな。

弟

今は居ないがな…残念な話だよ。正直。

「な、なにを抜かしあるのだ。小娘よ…オレの嫁になれ」

ん? 気のせいか、空耳で虫の知らしが聞こえたのよな…

「アナタ死亡」ね。」

シウン

びやあ

バキバキ

悲惨だ…

## テイクツー

「な、なにあ、抜かしおるのだ。小娘よ… オレが本氣を出せば、貴様の女体は木つ端微塵だ… それでいいのか？ 小僧…」

何やら、話をこっちに向けてきたようだ。この場合おれはおれらしく振る舞う必要がある。下手すると得るのは、地獄谷。

「おれは別に、そんな趣味は無いけど、遣つてみるが良いさ…」

今の言葉道理に、タレ田<sup>た</sup>が動くのならテイクスリーと話が分岐地に戻ることになるからな…  
さあ、どうなる？

「やつぱ、辞めとく」

そうそう、お前はやめて置くが賢明なんだ。さつさと、おれ達のペツトなれ…

「弱虫過<sup>か</sup>ぎるわね。呆れてものも言えない始末よ…」

おいおい、敵たる目標が入れ替わっている様に思えるのだが、古見子さん大丈夫？

「オレ… オレ弱いのか？ 自覚していなかつたがオレ弱いのか？ そつなのか？」

何かの起動スイッチに点火したようだぞ、本当に大丈夫か？ 古見子さん…。

「オレは、弱い子。オレは弱い子。オレ……」

まじで、田が泳ぎ始めた。古見子さんの言靈の力量は計り知れない。「マジ怖ー。

「古見子さん、ちょっとヤバすぎるよ…何したの?」

恐る恐る、それは天性からの細心用いて、控えめに聞いてみた…

「ああ、簡単な話よ。彼の頭を多次元に放り込んだのよ…彼は一度と正氣になることはないわ…」

え、

血の氣が一気に冷めたのが解る。

彼女はなんと言ったのか…

彼女の言葉が認識をするまいと否定していたが、無理な話…

田の前に、いる変わり果てた『それ』を観れば、誰だって、信じるしか無いのだ。認識するしかないのだ。

「どうして…どうして、そんな事を…」

立場的に彼女の性格から察して、何となく理解が出来る…でも、言葉で訊くまでは、絶対に信用できない。信用したくもない。

けど…

「ああ、それは邪魔だつたからよ。あなたにも解るでしょ?」

弱せとか、そんなんじゃなくて、ただ、純粹に、邪魔だったから？

「ふやけんなよ。」

おれは、変わり果てたそれに駆け寄る。

抱きしめる。

温もりを感じる。

生きてはこらの」「…

「これじゃ…死んでるみたいじゃないか…」

動いているだけ、生きては居ない。

「それでも使えるんじゃないの？それだけで十分でしょ？」

それだけで十分…確かに、所詮は家畜やペットと言つたのは、この  
おれだ。

「少し話をしまじょい…」

次回

過ちすぎる

此処から始まりですね

だから嫌いだつたんだ。

従うつて漢字、在るから従姉とか、今問題ではない。なおさら、どうでも言い事…

それは、彼女がただ従姉と言つ設定でこの世に留まつてゐる」と、それが言いたい。

今では言える…今だから言える。  
おれ達、身内とか親戚とか、居るはずもないし、存在するはずもない。  
事細かな設定まで築けないのが設定で、それ以降のものは後付け。  
最初から欠陥だらけのシナリオの上に立つて…遊ばれているんだ。

おれが小柄な体系で眼鏡掛けていると言えば、そうなるし、はたまた、おれが小太りして眼鏡を掛けていると思えば、その様になる。

設定はルールで絶対…  
ルールは秩序で破ることのできない、一つの糸。

もつと言えば、彼女は死んだ。

そつ彼女は死んだんだ。もうこの世には居ない。悲しい。

けど、

彼女は生き返った。もう一度また、駄弁を繰り返す事が出来る。嬉しい。

何でもありなんですよ。結構滑稽なの、当然とは思いましたか？

つまり結論は、こんな風に、話、されても、…。

ですね。

此処からは、  
これは過去の話、

ちょっと昔に、なるのかな…。おれにまだ家族が存在し、その時普通の普通な日常を送つて居た頃の物語。

「お兄さんと呼ばれるのと、お兄ちゃん」と訊かれるのがいちが良いです？」

対等に、会話文淡々と並べてくれるのは、弟の方だ。

今日の天気は、雨。外で遊べなく、家でトランプと将棋を交互に扱っている最中。

暇だからやらないこと、と飽きたきたり止めようが降り混じるから、じやの問い合わせだ。

ここは無視して、遣つても良いがおれ自身の口が時間を持て余し、あぐびが出るなどのアクションを行うので仕方なく、口を割る。

「『お』抜きで、兄ちゃん」と呼んでくれると、心がウズいて申し分なこと、言つてくる…我が弟よ」

トランプで将棋をするのもまた、変わった風格だな…何て思いながら言つた口だ。深い意味はない。

「兄ちゃん」

「なんだい？あどけない弟よ」

弟は出来がよく、頭も運動能力も上位ランク。学校側も文句さえ、通知に刻むくらいだからな…嫉妬心で組み込まれた担任で可哀想な弟。

後一つ、忘れはしない人がもう一人居た。血縁関係でもう一人居たんだよ。

お姉さんが…

本当に、どうしようもなく残念な出来事だった。  
事の切つ掛けは、…事故。その通り、すごい比率で、身内が他界する原因だ。恒例行事と言つても言い。

でも、そう言い切れるくらい現実味が無かつたのは出来事ではある。  
学校から帰つて、来たら居なくなつていたんだ。

事の真相は、弟の筆箱を守るため…

馬鹿げた話で附いて行けなかつた。

筆箱の価値の値と姉さんの価値と…

どう考へても釣り合わない。計算ミスなのか？と何度も何度も繰り返して観たが…数値が合わなかつた。

人つて、死ぬ時呆氣ないんだね…

姉さんは、最後の最期までおれに優しくしてくれなかつた。

いつも、弟を可愛がつていた、俺も遊ぶ事に関しては常に一緒にだつた。

おれのクラスメートとだつて、「お前、生きている意味無い」なつて言つてくる御時世。本当におれは終わつてゐる。

姉さんからしてみれば、おれの価値なんて弟の筆箱以下だな……。

「明日、テストなんだ。」

「ほおー、テストか…なら、今こいつして遊んでいいのか?」

今なら解る、きっと姉さんも出来が悪かつたんだ。だから、弟だけを可愛がり、逆に自分を描写したかのように出来の悪いおれを虐めた。そして最後には、…決まりだな。

「テスト、諦めたよ…」

弟は思つても観なかつた、何を言つてゐる?そんなの駄目だよ…。「諦めた…とは、サボつて、満点を探らないで居る状況を意味しているのか?」

弟は満点以外は採らない。反転に、満点しか獲れない。

「せ、せへへ…」

「何を言つてゐるんだ!お前、はー満点トれよ、獲れば良いじゃん

「諦めないと満点取れない奴なんて思えしか観た事ないし、獲るつ  
と思って採れるもんじゃない、理解しれよ。」

可愛い奴には、厳しくとも言つが、こいつは少し甘つたれでいる様  
だ。

「だつて、ぼ、ぼくや…」

天性の才能を持て余す弟は、オレの中では、憎たらしく嫌い。  
どちらとも釣り合つてこの感じだ。

けど、今回は

「何も解らないんだよ…普通人の考えが…」

何でも出来るは、何も感じないのか…現に、将棋、トランプ、トランプ代用の将棋、すべて彼の勝ちだ。  
ひたすら負けている俺も、これは作業だ。何も感じない無情感その物だ。

「天才か…馬鹿らしい。思えば、弟だから可愛がつておるがお前が  
赤の他人なら、ただ死ねとしか思わないぞ。」

「言つてやるよ。今回だけは…

「なりとつて觀ろよ。さつと、オヤジや母さんは悲しむぜ。もう救  
急車まで手配するだらつよ。ハハハ」

「冗談きつすぎ、笑つてしまつたぜ。」

「ぼくは…人？人じゃない？どっち…」

「そんなことも解らないのか？」

おれは「ミ人間だから、俺こそ人の心を理解していない。友達も居ないから…

「安心しろ！心配しなくて、お前は人だ。」「自信を持て」

肩をたたいてやる、まるで、どつかのおじさんだな。

「そうか…ぼくは…人」

心に使つたのか、弟は見る見るうちに顔色が純粹化していく。これで大丈夫だろ。

「明日のテストも頑張れよ。」

「うん、頑張るよ。兄ちゃん！」

これは、雨の日の出来事。明田は学校でそれで居て、テストだったらしい。

テストとか、どうでも良いんだが、運命の歯車は前々から回っていたんだろう…。

次の日も雨で弟は死んだ。

死因は事故死。

明らかに、誰かの陰謀か…神の悪戯か…

「エリナ、これは異常だ。」

今この瞬間から、世界のコトコトを追求し始めた…

おれはこの時から、ゲームを楽しみ。

勉学も生半可に受けた。

親からは非難されるがもつといつも良こと念を押す。心に誓う。

初めっから、親しかい無かつたって…

歳月は流れ、月日が過ぎた頃合い。

親さえも疎く咎めましましたおれは、姉の部屋に向かった。

姉は、骨董品の売買や情報収集などなどしていた為、選りすぐりの呪いアイテムまでより沢山には、あり得るのだ。

漁るあさる

「これは使えそうだ…」

一つの武器があつた。

剣だ。しかも黒い。

呪いともなると、やはつこの配色…。

姉のPCを起動させ、データベースから、それにに対する影響や呪いをありとありゆる角度から検索した。

検索すればするほど、本当に誰かを呪つたかったのかつて言ひほど、超重量な呪具が出てくるは出でてくる…

「人としてやつてはいけなさそうだな。」

人は、一線越えると別人になるから怖い……。

次回  
定めの造り方

全く話が違う方向へ繋がつてくる。

弟は、毎日自転車通学していたから、その日だけを限定で危険だった。

注意の一言だけを伝えるべきではないか？何て、運命操作は、同じ人生を一度とも三度も繰り返さなくてはならない。

おれは難儀なことはしたくないし、弟とか、本当、どうでも良かつた。

と、言うより何より人が嫌いだった。

人の顔すら見たくない。人が群を成し団体行動しているなんてまるで、大規模な工場の機械で頭が痛い。

更に先に言うと、人混みは完全におれには縁がない物であつて、死んでも飛び込まない。人混みは人がゴミの固まりにしか見えない…

親も、呪うと言う非論理的遂行で葬った。これまた事故死。

両親が乗っていた車に馬鹿を衝突させた。即死の域だ。苦しますにご愁傷さんだ。

⋮

私にとって、原点の機転はどうやらが先だつたかしら？

弟が死ぬ運命は、私が操作したに等しい？。

違うわね。あれは前世の私で今の私は、ただの部外者、関わる必然的はないし、

無縁になつたこの現身もただの仮初めだし。

現在を生きている私達は、最も最善いくしている…。  
過去なんて、無駄なもの、忘れてしまえば其れまでで、終了なのよね。

「なあ？ これで良かつたのか？」

「良いに決まっているのではないの？」

「トシラ一行は、中身のない獣鬼を引き連れて、先を進んでいる。

「何か、何故か…しつくりこない。本当に感情とか、心と言つたものすべて飛ばしたのかよ？ 飛ばせるのは、人だけじゃなかつたか？」

合理的に考えると、これは良い結末。人のペットとしての存在ではなく、奴隸として、道具としてそこに滞つていいのだから…  
愛玩獣鬼など、合つてはならない。

これは絶対だ。

この前提を破る前に、世界のルール上、何処かで抑止力が働く。

昔観ていた教科書に、獣鬼は人の罪だと書き記されていた。  
何故？ 何時から？

と、原因、起原を訪問しても誰も答えてくれないだろう。

それが正しい判断なら、それでも構わない…か。  
あきらめ混じりだな…。

「トーシラはこつも以上こくよくめそめそしていた。

その後の古見子さんは、先ほど言つた疑問に対し、論を並べる。

「あれは、人の感情が混じっていたから…多分、それだけを飛ばすことが出来たんだとは思つ…」

元に戻すのは、人と人の繋がりがな…元には戻せないとは決まったわけではないし、今はこのままがいいのよ」

何を根拠に、辻褄を合わせているかは、暗黙の了解なのであるひつか?

「本当は、俺たちって色々と複雑な関係していそうだな…」

俺達、実はとっても寂しがり屋で、そして、とってもそれを否定したのかもしない。

お互い譲れないのか…譲りきれないのか…まあ薄々その壁も溶けていくでしょう。

トーシラは、武器だけは旅の途中は絶対身に外さない重剣某大剣をこじらえて、古見子さんの横を歩く。

何となく空を観れば、

止め処なく、空を隠す曇り空はまだまだ続いている。それでいてやけに雨は降ってくれない。…振つて欲しくはないけれど…

「なあ? 古見子さん…」

どうでもいい事だけが、脳裏を埋め尽くす。

「何？ 様でもあるの？」

「とかつて…ま、スルーしよう。」

「雨が降ると…雨の降り始め、古見子さんはどんな気持ちになる？」

おれが悲壮感で死ねる演出、傘を持たずに家まで一人歩き…。  
ポツケなんかに手を突っ込んだりして…

「素朴に下僕」

?ハテナ、理解し難いではなくては、言動が驚いた。驚愕の一歩手前ぐらい…

「素朴に…？」

再度確認させて頂きます。

「人身売買」

「古見子さん…しつかりしてよ…怖いよ、」

まるでどや顔な古見子の眼は超過、ひとつもなぞざわせる深さを誇つていた…。

「あ、」めんなさい。〔冗談よ…そうね。悲しい気持ちが、妥当かしら？」

もう一押しかな…

「物足りない。と言つたか、若干、的外れ?」

「なら、服が濡れる。ああ、大変」

棒読み…解っていたよ…こんな質問提示するおれの方が間違いだつたつて…

「ん? 古見子さんつて、何処の演習学校行つていたの?」

質問攻めで敵を翻弄する老婆のようだ。

「座臥ク学園。あたりの成り行きね」

一言。多い所為か、一瞬おれは機能停止に陥つた。

「嗚呼、座臥ク学園か…あそこ、机がないことで有名だよね。ソレデ?」

「? 何かしら?」

「だから、机が無いのごじうじゅつて授業を受けていたの?…かなーって」

別に、普通の会話だよね。

「そ、其方ですか…机が無ければ、授業を受けられないと思つているの? あなたは、」

質問者に質問で返すこの手際の良さは、静電気除去パッド並だ…。

「思つてゐるが…」

仮説を立てるなら、それは教科書もノートも要らない、四万年前の旧日本時代の授業でも取り入れているのだろうか？

「その通り、受けられないのよ…授業は受ける物…の根底を覆した。とでも言つべきね」

覆す、良い響きの語呂だ。物理の世界では、やさしくて靴裏返し、靴裏返し、新たな道を切り開く。

そりやつて、便利な世の中が誕生したの一部を除くが…

「最近は、先生より生徒団体の方が総合的に知識が上なのは存じ？」

まあ、学年にもよるだらうけど、その考えをそのまま授業に取り組むのは、馬鹿。

「おひとも、

「や」で、基礎知識身につけていない阿呆が、宝くじを当てて学校と言つ組織を立ち上げたのよ。その人が座臥ク学園校長。」

何気なく、やけに現実味があつて、深刻な話に聞こえるのは、俺個人の思想に問題在るか？

「正直な話、その校長先生、貴方より格好いいわ

空に広がる止め処ない雲のように…。

おれもまた、もやもやした氣の晴れないやるせなしが、憚り包む込む。

「だつたら、その校長先生と結婚すればいいじゃん」

ちえつとか言つて、ポツケに手を突つ込み小走りするコトシラ。

明らかに、子供過ぎて幼すぎる行動。

「おもしろこわね。やきもちとか、言つのかしら? われ

齒あざめ、獣鬼を撫でる古見子さん。

説明事足りていなかつたが、荷物を無理やり背負わされた其れである。

其れとは、狼と狐を足してそのままにしたのが、今言つ獣鬼だ。

心無き獣鬼は、双眸だけはタレ田だ。

のこのこ、足を進めるコトシラの背中を追つのも愉快なモノだなと実感と直情する古見子さんも心にこころにあり

「お、川の濁流音がかすかに聞こえてくる…河川はすぐそこにありますだ」

と、おれは言つてみた…。

「…そうね。私には聞こえなのだけれど、あなたが言つのなら、私も聞こえるわ…」

つまり、おれの探索能力を信用しているつて事か…。

まあ、何となく理解できる後景。

「よし、今日は野宿だ。」

最後に述べるのは、コトバ。

次回。  
今日の  
終わり

著しく空は病に罹ってしまったかの様に、雲空につぱいだ…

川が盛大に濁流を齎かしてこるのに、基本論理に基づいた理由がある。

おれは、一々回つべど遣り方はしないので、一口で言ひ切る…。

この近辺では、雨が降つていて奇跡的に俺らの場所まで雨雲が行き届いていないことが言えよ。

もつ少し、範囲を縮めよおものなり、この河の河上に当たる地点でだ。

当たり前過ぎる論だが、おれが言つと凄ことを言つてこるようだ、吐きそうだ。

「雨がやんだら、この濁った川も透き通つて綺麗見えるのかしら?」  
骨休めに、一言一句を聞ひ古見子ねえ。

「まずに、此処で…この地点で土石流の様に、濁つてなるとなると、上も同じに汚らしくだろ?」

つまり、全体が不潔な河。弱アルカリ性なら飲んでも良いかなあと思っていたけど、無駄な期待は持つべきではないな。

的外れな結果だとより虚しい。

「まあ、なんだかんだ言つても… 単なる水ですから… 私達には関係ない事ね」

いや、それはちょっと、匙の分量が大胆不敵だよ古見子さん…。

「いや、水は大切だと思いますよ。… ほら、古見子さんも疲れているだろうし、飲み物とか飲みたいんじやない？ それと同価だよ」

優しくお手柔らかに、反論を吐露する「トトシラ。 正直な処、おれも喉が干魃でくたびれたトマトの如く酷い口内状況だ。 言い換えれば、喉が渴いた。

「そんなんでこの先、生きていけると思う？」

何時食料が不足したり、破綻し足りするか解らないのよ？

それにね。この世には、

断食で耐え抜いている人もいれば、断続固、美味しい物を食べれない人もいるのよ？  
と説教気味に言つてみたわ」

なるほど、説得力が在るのか、否かは置いといて納得し、共感できるなそれ。

「そもそもうだな。よし、そんな幸薄な人のために、この濁流と濁流音に囲まれながら、川遊びをしよう。」

久々の冴えたオレの現状を把握してでの案。たまに、こういった企画が飛び交うから人生たまらない。

「それは在る意味キチガイね。微笑ましいわ。」

前倒しとして置いて置くが、これは本気だ。嘘や虚言ではない。真剣に肌寒いこの季節に水着で泳ぐつもりだ。

もつおれを止めれん奴は、古見子さんしかいない..。覚悟の上だ。

「言つて置くが…おれは本気だぜ。こんな企画も在るうかと、あらかじめ持ってきた水の中に入る際の専用服を持ってきたんだ。」

ほら、と言つて見せびらかす。変態じみたコトシワ。

「間違いなくキチガイに、昇格ね……。」

数秒間の沈黙は、古見子さんが横目で水辺を観る処から始まった。考えている様な、いない様な曖昧でハッキリとしない無表情に近い顔をするのは、やはり、標準水準な古見子さんだと思つた。

「やうね…私も泳ぎたくなつたわ。」

何という、合理的破裂な発言。

いつか、きっと、おれ達私達で世界征服も夢じやなく、身近な物にしてやるよ。と比が被るくらいの言つぱだ。

「え、まじ?」

本氣と誓つたおれも心が揺らぐ。

コリコリやんの表情も何故か、本気っぽい。

「ええ、本当よ。一緒に救えよつのない馬鹿になりましょ。」

「いいね、いいよ、良いですね。搖りあがますね。誘い乱れますよ。」

「ああ、解ったよ。」

「あ、まあつたわ、水につかる為のお洋服を持つていらっしゃらな  
いわ。私…」

「大丈夫。そんなの問題点でもないよ。…ほら、身の分持つてきた  
よ…姉ちゃんのだけビ…」

世界が混沌の闇に包まれても、彼女と一緒にやらせて活けそうだ。  
これは本気で、本物の気持ち。

今日は「」でお泊まりと…テントを設置し、安全を配慮して、駆除  
けのお札をあととあらわる木々に張り付ける作業をした。

追伸として説明するが札同士で一種の結界が完成するし、その結界  
からは出る「」とは出来ても中には入れないと、…虫除けにも繋が  
るとか。

近所のおばさんから聞いた話しだと、うち鍵の様に、結界に戻ること  
とか出来ず、仕方なく結界師とか、呼んで事なきを得たとか…。

「これで仕込みは終了ですね」

テキトウに仕込みとか、台詞に追加した。元々色々とカオスな小説  
なので、「」の程度の台詞の改竄も許せるであろう。

「結構しんどかったわ。この札も、許せる範囲くらいは、合理性に徳化してもいいのにね……」

確かに、発展途上国の大物だがなんだか……変な習わしで、この形でこの使い方じゃないとダメらしい。

名残とか、古くからのとか。本来、必要性虚無なんだけれど、やっぱり大切なんだろうな、こんな感じが……。

新たな世界から来た渡来人のよつた心境に陥るコトシラあんじ古見子。

「コトシラさんは、神様とか、信じます?」

色々支度する。古見子さんに訪ねた。

いきなり突然唐突に、とは言えたものだ。

「何? いきなり突然唐突に……

……そうね。

神様なんていないでしょ? ゆ

居るとしたら、不利をしたペテン師。類のノモのじやないかしら?」

やつぱり、この質問だけは、そつとしか答えきれないよな……物理を超えた。影響源を発見したが神を観たという者は誰もいない。居るとすれば、それはおれたち同様、キチガイ人だ。

泥まみれのテントを観れば、ふと蘇る四万年前の世界……

あれは夢だったのか?

不思議な感じだな…

と言つたか、神様以前に、俺の身の回りに起きることが一番、異常現象だ。

異常とか、不思議とか…数値化できるのかな？

「示度は整つたわよ。さ。いきましょつか」

「わいわい」

ガヤガヤ  
やぼーん

寒さの中、濁流と共に、水遊びを楽しんだ。

「（くしゃみの音）、ヤバいって、これ、まじで風邪ひくよ。」

健気に体を振るわせながら、ぐぐもつた声を吐く。

「あなた、意外にも虚弱体質とか、病弱とか、そんな感じ…ね」

ああ、そうぞ。

脳内麻薬で何時だつてハイなおれは。身体は何時だつて、女性ホルモンで満ちあふれているぞ。

そして、そう言つ、古見子さんは、オレなんかに比べて、女性らしいスタイルと抜群のスタイルで観る者を魅了するそれを養つて言いよな。

オレだってたまに、他の異性に転職したいとか思つたりするや。

「どうせ、おれは汚えない屑糞塵生物ですよ」

自虐なら得意だぜ。  
なんせ、姉の奥深な拷問に近いそれを、結構、かい潜つてきたから  
な。

「いや、あなたは、自分の思つている以上に素敵なものを持つている  
し、案外、イケていいわ。それ以下のもあるけど…」

それ以下がどんだけ目立つものか…  
考えるとヘン頭痛とヘン腹痛しかしない…。

「んじや。これだけ言わせて…」

「?.?にかしづ」

「アイシティアルコ」

次回

明日は風邪で  
動かないな。

もう私たち…結婚した方が良いんじゃない?

内心に思のは、古見子さん。物理的にも多少小さめな胸は止めどなくあふれ出しそうな思いにまで、口からポロッと零れる処まで…到達していた。

そこまで来て、拒む理由は彼女自身…わたつたもんじやないと判断する。

「ま。風邪でもひいたら困るから早く着替えてきなさい」

何故だか、優しく言つてくれるのな…と、思った人が此処にいた、  
…其れ即ちコトシラだ。

壊滅的なコトシラの震えっぷりは前代未聞と世間には広告すら出来ない有り様だ。

男子でいて、此処まで寒さにひ弱なお人は、彼くらいだ…と自負心でハチキレそしがコトシラが普通なだけで問題点は古見子さんにあるのだ。

悟つたコトシラは、内心だけに留めておくのだ…彼女は体が常人以上に、強力だと。それを前提してみて、察すると今までの超人的な運動能力と身体能力の高さが高いのも頷ける結果だと推定される。

だが、コトシラは言わない。

その長所は彼女にとつて、どの様に思われているのか、常人じやない彼女の体质を評価していいのか、相手のことをまだよく知らない上で言葉を乱用するのは、犯罪と何ら代わりがない。

だからこそ、コトシラは言葉を閉ざす。一部的な意味で…

「明日は風邪寝込むかもしれない…」

宣言口調とはほど遠い、言葉の振る舞いで古見子さんに伝える。

「疲弊なあなたを観れば、そんな弱音口調でも寛大に觀てあげるわ。明日は死んだように休んでも良いわよ」

暖かな言葉のはず何だろ？けど、語彙の扱いが愉快な事に成つてゐるから、どうしても素直に快くイエスとは言えなあ。

「わかった。思う存分頭痛高熱嘔吐で明日は天空に仰向けになつて、テントと布団をそつ上から羽織る事にしたよ…」

でもそのかわり、一つ頼みがある。

「だからさ、今田は僕に何でも頼んでよ。在る程度のことはまかなえるからさ…」

これは、交渉や取引と言つた種類に分別される。誰だつて、ただじや頼めないのがこの世のコトワリで、どちらとも利益な取引でないと感じないのも…この世理だ。

「別に頼み事とか、在りませんが？今日はもつゆつくり休んでいただけた方が嬉しいのだけれど…」

優しいなおれの親より優しいよ。姉とは、正反対のが何となく対照的な近さを感じた。

在る意味似てる其れで居て似つかない。  
これもよくある話だ。

「もうか… オレは足手まといで、単なる邪魔者つて奴なんだな。…  
わかったよ、おれが最高の杰作『四脚を作つてやるよ。夢で』」

夢の世界は力オスだが、使っこなせば何だつて思い通つた。

コトシラと古見子さんは、会話している間にも、標準装備へと着替えた終えていたご様子だ。

「（くしゃみの音）もつともな意見を言えよ、やつぱ、この衣装が一番しつくづくるぜ、だつて、毎日同じ防具の替えをローテーションで着てこるから…」

独り言に最も近い台詞。今此処に古見子さんがいなければ、誰もが樹木に話しかけていると答えるであらう。

それと、防具と言つても、ラフな上下に安物の防弾ベストの様な物を着用するだけの妙なもの。

文字なTシャツは曜日によつて、入れが変わる…今日は縁だ。

「可哀想なほど、芸がない衣服ね。私の借りるかしら?」

と言われても… オシャレとはほど遠い。彼女それも、結構なレベルでやほい。従姉の近さが物語つているな。

バリエーションついで点では、古見子さんが百本一歩譲つていいと思うが着るすべてノモのがジャージなのはいかがわせんとな……折角の美しさが搔き乱れて、普通に成つている。

言葉を搔い摘んで、容姿なんて飾りだろ？心が必要なんじゃないかな…

と、心の闇に念を押すコトシハ。

「動き易やつですね。こつか、借つむ」とするよ。古見子わふ」

まだまだ、毎週出し、腹も減ったし、木の実でも喰いながら携帯ゲームにでも、電源を入れるとするか。

古見子さんは、ちょっと探索とか言つて、川上へ向かつた。別に詮索はしないし、気も止めない。

コトシハ、「ああ解つたよ」と振り向きまに手を挙げ、手の甲を晒す…フリフリ。

くしゃみはするが生憎、幸いなことか、頭は痛くない…思考能力も安定してくる。

ゲームを二、三時間遺るくらいの体力は十分に残つてゐるに決しする。

今の今までの話なんだが、おれが携帯ゲームを持つていたことは、話していなかつたな。おれは冴えないが気持ちだけは一流で居たいんだよね。だからこそ、今まで我慢してきたんだ。

で、でも、…限界だ。おれはオレの本心誓つたつもりだつたんだ。  
巨大リストプレイのみでしか娯楽用品を扱わないと…

「ああああああーあああああ」

拒絶反応かは知らないが、手が勝手に震えだし、思うようにゲーム機本体が持てない。

でも、此処であきらめていいのか？

勿論、ゲームを遣らなかつた事で、これまでの生活に支障が生じる訳ではないが、…暇には勝てない。

明らかに、今は孤独症候群で躁病に成つて、再度川に飛び込むかもしくは、鬱病になつて、体育座りで時間を浪費するかのどちらがおれを待つている…。

ガラ…

理科の時間によく使われるカバー・ガラスのように割れやすいその携帯ゲームは、コトシラお手製自作強度強化版カバーで覆われているため、高さ二メートルから落としても擦り傷程度ですむが…

「お…おれが遊び機を…落とすなんて…」

初めてのことではない。だが、此処はテントの中だが基本野外だ。その野外で、ゲーム機を落とすなど…万死数値化できる…。

「生活保護はたいて、買った三年前の機種なのに…」

彼にはまどりみずることも出来なかつた。

そこには、ただの虚しさと置いて行かれた感しか、この場にはなかつた……。

原始的に残るのは、輝かしい光沢の光る遊び機だけ……。

「おれはもう、駄目なのか?」

ゲーム遣つて歴十年間、初めての挫折とも言える敗北感が襲つ。

「古見子さん……」

何だらうか、この気持ちは何だらう。  
不可思議的に、従姉の言葉がこぼれる……  
ああ、そうか……おれは初めっから、古見子さんの事が好きだったのか……。

思い出せば、古見子さんが現れる前から、彼女を知つていた。  
『従姉』とは違う。別の古見子さん。

：  
姉だよ。

おれは、おれが『僕』って、言つていた時だ。何時かはしないが姉は言つていたな。

「あんたも少しくらいは、男らしく振る舞いなさい」

よくおれは、気が弱く。小さい頃は、ガキ共に虐められていたもの

だつたよ。

「むり、そんなのむりだよ、おねえちゃん」

本当、あの頃は何かにすがるのがやつとで、何もかもが苦恼だった。

「黙りなさい。ほり、弟はあんなに上手くやつてるわ…あなたは、ただの害虫うじ虫…」

そうぞ、何時だつておれは、うじ虫のようだつた。今でもううだ。

「…でもね。

其れはやつぱり、考え方にあると思つた。

あなたは、害虫よ。生きているだけで人に害を及ぼす。

…其れでいいじゃない。

其れそれだけで十分よ。

だからあなたは、他人にふれるのは止めて、ゲームをしなさい」

あの時の話の言動は、今のれにも分からぬ。

けど、姉は何かを変えてくれたのが事実。

それがいい方向とか、悪い方向とかは、置いといて…

次回

起動する

ゲームを起動した上で注意事項。

体が浮遊感を覚え、さらには、乗り物酔いの様に体調不良を訴え始めるであろう。

電源入れたコトシラは、これで一度目のあの感覚に襲われる真っ最中だった。

「一度あることは二度あるってか……？」この世界のシステム、どうにかして欲しい……よ」

情けない声と共に、コトシラの姿が泥塗れテントから消えた。精確には、二進数の世界に取り込まれた…が、正しき回答。

液晶画面をまたいで、別次元に行つた。ヒ、堂々と口外出来るのはコトシラくらいの異人である。

「早めの内に帰らないとな。古見子さんが結界の外で立ち往生するハメになつて、」  
モンスターに喰われて、はい、お終い。は避けたいからな。

異次元空間を移動中。それで居て、

疑問に浮かべるコトシラは、現実と異世界の時間の比率を考え始めたのであった。

視界に広がるのは、無数の電子回路。

触れるだけで火傷しそうな、電熱線。あれは場違いな造形をしている。形が斜めドラム式だ。

おびただしい数の電気エネルギー素通り、着地したのは、何ら違和感のあるテントの中。

「此処は… テント?」

シノビの様な着地を決めたコトシラは第一声に疑問系をテントの表面に投げ交わす。

「元居た世界を忠実に再現した… 話じゃ説明できないぞこれ?」

明らかにどう観てもテントだった…。

不本意に触れてみるが、質感同様泥の付着具合も全く持て同合している。

これが初めての他次元移動をだつたのなら、おれは迷わず、「さつきの乗り物酔いは氣のせいだつた」と勝手に解釈してしまうくらいに、完成度が高い。

「瓜一つの別物を用意してまで俺に何を伝えたい?」

取り敢えず、外に出て観ないことにには、なにも解決しない。なので、外に出てみる。コトシラ。

引きこもつてばっかりのコトシラは慎重に、テントの布の壁に縫いつけられたジッパーを下げる。

ジ  
ジジジイー

内面、何が飛び出して來ても可笑しくないこの世界、先に恐怖心が  
こみ上げてくるのも笑える話じやないだり?。

恐る恐ると囁いた拳動で、テントドアを全開して、外を觀る。

「…」

予測と反比例し、今までと全く変わらない濁流音を奏でる河川敷?  
がそこには平然と君臨していた。

「あれ?…本当に夢でも見ていたのかな?」

一瞬戸惑つ。森に囲まれた河川もむつき、泳いだソレと変わらない。

「誰かの悪戯にしては、たちが悪い。恐らくこれは、人為的な何か  
だ」

分かり切つたことをまず、述べる。

このような事を出来るのは、古見子さんくらい。犯人ならとっくに  
あばいでいるが、別次元に居るつて、言つてしまえば、元も子もな  
い。

それを口にする人もなかなかのレベルで危うい。

「今日の事柄で古見子に変な処は無かつたがな…多分、何かの手違  
い?」

そつ信じたいのは、おれの古見子さんに対する甘えっだつたり、じやなかつたり。

九割方実行犯は、確定しているが動機が皆無等しい。情報量も少しい。

めぼしがつかない有り様。

「お手上げって処か…何か、アクションでも起きれば、話は変わるが…」

上手く行つたり、行かなかつたりするのがこの「時世」…期待は出来ない。

「…！」

どうやら期待できたようです。

濁流の上を歩く人が現れました。

急展開です。少しばかりのモチベーションを考えて、何もかもが動いて欲しいですよ。

コトシラは、大人びた正論地味だ。考え、思想をつい及ぼして、ため息で返答した。

「明日は水曜日で、また何でもない日々が訪れるんだよ。今ある時間有意思に過ごせたら、どんなに幸せか…」

基本、どうでもいい事を遠慮がちな声の音量で呟いた。殆ど、声にも成っていなければ…。

眼前の濁流を歩く人を、眺めていると、何だか眠くなつてくれる。生理的にポロッとあくびが出そうなのを堪えながら…

「だれだ!!」

こだわりのエクスクラメーションマーク、二つ添え。

それに返答するかのように、「うごめく歩く人は…。

「お前が、倒される人ですね。」

おいおい、倒される人とは、何の意味が隠れているんだ?もつと、初対面らし…

「シイクじゃなか!」

ハツキリしないトーンで放った所為か…声が届いていない。ご様子のシイク。

「…どうしました、」

「反抗期は無事に終えたか?」

何か、様子が違うも、シイクに話しかけるコトシラ。

「お、やおや、この僕を知つていいようですね？何処で知りましたか？」

そ、そんな事は置いとき来ましょ。う。

本題に入りたいので……」

そのキャラ、破綻してないか？  
明らかに、無理をしていると感知。

「本題？」

この世界にも、丁寧にルール等を説明してくれる「用人が居て助かる。

つまり、自動翻訳機みたいなもの。

「このゲームの… ありが、た？について、」

助けてやつてくれよ。彼の言動。シイクさん？こんなのはシイクさんじゃない。おれの知つているシイクさんは何処にやつた。

「偶にあるんだよね？くぐもった感じが帶帯しているの… 大丈夫だからさ。ゆつくり話してよ」

気長に待つてあげよう。

少し若干、優しい気持ちになりながらも、持つてあげる事にしたコトシラ。

「つまり、ですね。僕がお前を倒すか… 僕がお前に倒されるかで、お互いの人生が大きく変わるって、事ですよ」

格ゲー感覚つて事か… しかも、凄い駆け引き。

「それは、どんなルール？武器とか、使用していいの？」

武器なら、おれの背中にも有るぜ。黒光りするそれがな。

「つ。うん、大丈夫みたいだ」

瞬殺するのは、可哀想だ。同情氣味に、話と戦つわけを訊いてから潔くやる。

「トーシロは、ぐこつと、重みのある剣を握る。

「あ、ちなみに、どうした武器を扱つかな？シイクさん？」

拳動不審が悪化したシイクさんには何があったのかは知らないが、そんな事よりも、どのような先方や武撃や武器を用いるのかが一番気になる処だ。

自分で言つてしまつたら終わりだけど、おれって結構、嫌やな奴だな。

「武器…武器ですか…武器ならありますよ。」

と取り出すのは、赤い柄のノコギリ。  
いやな感じがしますが立派な日本刀のような鋸ですよ。

刃渡り一メートル二十センチは在りそつです。  
伊達に、メガネを掛けてないだけはある。いいセンスした武撃機器だ。

取り出したのがスボンのポツケからつて処がたまらない。

「少しば自重しろよ。おれの黒剣がダサく映るだろ？」「

何時もより、態度のデカいおれは、形態的にコンパクトなその剣を片手で素ぶる。

ブン  
ブン

「ま。いいとしよう」

シイクの刀に鞘などなく、本当に所持するのも大変そうだとしか思えなかつた。

「駆け出しひ、このコインが地面に落ちたらど、あるよ

と言つて、胸ポケットからコインを取り出すシイク。

「嗚呼、良ござ」

濁流流れる水面で…

次回

戦いは、命懸けですよ。

決着というのは、数秒でけりが付くもの。惑いけり。

「躊躇なく、トドメを刺して良いのか？シイクさん？」

僥ぐ散つた、までは行かないが今のこの現状は、明らかにおれが有利。

シイクはおれの攻撃、第一打で武器を濁流の彼方に飲まれる結果に陥り、仰向けに成つて倒れる始末。

猛烈な重量感のある攻撃には片手だけの握力では耐えきらない処がある。

それが現実。

人の言動や拳動に辻褷が合わない処が有つても、物理的な出来事だけは嘘は吐かずに、真実を映してくれる。

これが結果。

「負けが目に見えていたら、もつ足搔く必要性もない、だろ…？心を擡なくやつてくれ」

潔が良いのは、彼の特権。殺す？と訊かれて、有無を言えるのも彼の権利。

「もしも、此処であなたをやらないと帰れないといつのなら…同情なんて必要ありませんが最後に一つだけ訊いていいかな？」

つまり、どんな時だって、自分生存意志には勝てない事態もあるつて事。

「切り返しにでも成るわけではないし、時間稼ぎをしたいわけではない。それを踏まえて、何でも訊いてくれ。：僕は、人を殺したいくらいに僕自身も死にたい。」

殆どすべてが決着が付いている中、おれは一言彼に訊きたいことがある。

「シイクさん、シイクさんは、何故こんな所に居るのですか？理由を訊かせてください…」

何故。とは、シイクさんは前におれの前から忽然と姿を消し、今この場に忽然と現れたその理由の詮索欲を意味する。

「おま、お前も、真面目すぎるめで、真面目な質問を受けさせりやがんな…」

口を開いたのは、シイク。

この際、真面目とか、真面目じゃないとかは置いとして、眞実を知りたいだけだ。

文句があるのなら、おれにもうと英知をくださらなかつた神にでも恨め。

「そ、だな。簡単な話、連れてこられただけ、だな

意味深なことを言つて居るよつで、本当は全然当たり前のことだ。

「もつと、詳しく述べますか？」

急かすよつて、促す。

「まあ、焦るなよ。どうせ、元に戻れば時間は進んでないし……」

「元とは、現実と認知されている世界のこと。此処は、幻界。  
強ち、僕もよくは知らないが、気付いたら此処にいて、彷徨つて  
いた。」

シイクは凄く遠くの景色を眺めていた。空を観ていた、のちに  
言葉繋ぐ。

「長かったんだよ。本当に長かった。疲れたと言つてもいい

辺りの風景には、何の支障もないただの木々の間隔が広い林だ。  
他も、元のそれと同じでならかわりないトレースされた世界、  
けど、明らかな何かが抜けている……。

「知つていましたか？此処人が居ない、のですよ。何十年何兆年、  
時間を費やして、世界中を旅しましたが誰もいませんでした、誰も

……

この世界時間を費やすと言つ葉は不適格だと思われるのだが…

その通りも何も、証拠がなく、彼の話を一方的信じての結論だけどね。

「人が居ないか…きっとそれは、寂しかつただろうに…」

心の混じつていらない無機質な同情。

現実味が無いとかの前に、体験したこともないおれが言えるのは、原価の安い言葉だけ。

「いいさ…この体験は、僕だけの物、そして、墓まで持つて行こう。さ、未練何て無いかの様に、これしてくれ…」

この世界で起きたことや彼に関する記憶は、帰つてみれば全部忘れていた。

一人だと寂しく、複数居ても気分が悪い。

だったら、人はどうやって、人生やつていけばいいんだ。意味が分からぬ。

「トシラは、ゲーム世界であろうその空間と現実世界であろうその空間のちょうど、半分の位置を一人歩きしていた。

未練がましく、恨ましく、世界の狭間で独り孤独感を味わっていた。

いつもの世界には、何時だつて帰れる…しかし、この狭間と呼びつべき境界を次に足を踏みいえることは出来ないのではないか?と、元に戻ると言う判断をオコタつてゐる有り様だ。

明日があると解つていながら、『今日でおしまい、次は無い』とかの心理状況に匹敵する…。

絶える事もなく、永遠を願う者は、永遠に成ったとき真っ先に、精神が崩壊するだらうとか、無駄な知識が役にたつた時とか。

様々な思想を繰り返して、その先何が在るのだろうか?

知つていない事は、妄想で補える…だが、この妄想も何かの操作。止まることなく、変化し続ける物達。

地球が回るよし、廻る人間関係。

産まれながらにして、十本の指を持つて、十年間キーボードを叩く人。

おれは、磁気がない世界では迷つてしまつ。

ここは、思想を曲げる…よく解らない空間。

地は在り、足の平で感じる自分の重み。

感覚神経だけでは、麻痺してしまひそうだ。

本当の孤独を知りたいのなら、無限に彷徨える空間とどんなに費やしても止まることのない時間があれば、簡単に感じ取れる。

目に映る物は、一色のみ。

聞こえるのは、単調な足音。

触れていると感じるのは、自分の重みのみ。

味わうのは、唾液。

匂いは、空氣の香り。

何時だつて戻れる世界。

何時だつて、戻れるから、氣樂にしておくか…。

最初で最後なら、思う存分堪能しよう。

齟齬で出鱈目な空想論理を並べてしまえ。此処だと、本心に来る無情がこみ上げてくる…。

明田も明後田も明後田も昨日一昨日も、すべて今日で納めることが出来る此処で。

「この人、もう助けようがないんじゃないの?」

「え、古見子さん。結界をびりやつて、開潜ってきたの?」

ゲームを弄りながら、言語だけ駄弁る。

「あら?知らないの、コトシラ君。私の力。忘れたの?」

彼女は、別世界人を送ることが出来る。

でも、此処は、別世界じゃないと思うんだけど… 気の違いかな？

「気の違いじゃないわよ。… ほら、こんな情報訊いたこと無いかしら？」

結界は、隔離するが物理的な意味ではないと… 言つ話を…」

あ、在ったな。親父が偶に結界を張る訓練をしたり、しなかつたりしていた頃、何の辞書を読みあさつたから知らないがよく詫かせてくれていたな…。

「あ、思い出した気がする…

つまり結界は、世界を切り取り新たな世界として機能してゐるって事だつたよな… 多分」

近所の子供が結界結界言つていたけど、思つていたのより随分、高度な奇術だつたんだな… 関心関心。

「普通、空間を切り取るとかしたら、即、パワーバランスぐぢゃぐぢゃになつたやうものね… 恐るべき人間の技術力つてやつよ」

さつきまで、夢を見ていたような気がするのは、気の違ひって奴なのかな？…

川の流れは、穏やかで。

おれの体調もよくなつていた。

次回

不思議がつて

ひとつあえず、氣休めに

お？足の指、足してなかつたぞ？

実質上この人、意外と鈍いところ在るから何ともいえないのだが…出来れば、何事もなかつたかのように。覚えて居なかつたことにして頂けたい。

これは私の考え方。

全ての凄いと思われる現象は、大方失敗作駄作試作品の物物が多い。

凄いとは、人が人以上の何かに対する…敬意を含む単語として、誰もが口にする何ら聞き慣れるばかりな言葉。

だが他人は、正確な凄いの価値観何て知らない。全て憶測の範疇。

これが私の無様理論。

世界を渡り歩ける私の思想。

とんでもない。脳味噌しているし、とんでもなく低脳な私は賢く魅せるのがやつとで本当に臆病な娘立つたりする。

コトシラ氏には、平行世界の所かでお世話になつた、と言えば。

恩返しに成るとは思えないが、私自身の人生を彼に託すことだつて出来る。

その状況下に為、設定を…初期設定を変更し、従姉という立ち位置を所持した。

彼は私を知っている…ずっと前からあなたを観てきた。知らない事が知っていることよりも多いし、ずっと監視してきたとなると、変人や変質癖のそれと変わらない意味合いになる。人によっては、  
「なに、俺の顔見てんの？ 古見子さん？ そこまで凝視するまでに垂  
な物が着いているのか？ 顔に」

と、コトシラは、相変わらずゲームをポチって居た。

そして、コトシラ自身も何かの違和感に気づかされる。

作者は無事、事なきを得た。

お？足の指、足してなかつたぞ？

実質上この人、意外と鈍いところ在るから何ともいえないのだが…出来れば、何事もなかつたかのように。覚えて居なかつたことにして頂けたい。

これは私の考え方。

全ての凄いと思われる現象は、大方失敗作駄作試作品の物物が多い。

凄いとは、人が人以上の何かに対する…敬意を含む単語として、誰もが口にする何ら聞き慣れるばかりな言葉。

だが他人は、正確な凄いの価値観何て知らない。全て憶測の範疇。

これが私の無様理論。

世界を渡り歩ける私の思想。

とんでもない。脳味噌しているし、とんでもなく低脳な私は賢く魅せるのがやつとで本当に臆病な娘立つたりする。

コトシラ氏には、平行世界の所かでお世話になつた、と言えば。

恩返しに成るとは思えないが、私自身の人生を彼に託すことだつて出来る。

その状況下に為、設定を…初期設定を変更し、従姉とう立ち位置を所持した。

彼は私を知っている…ずっと前からあなたを観てきた。知らない事が知っていることよりも多いし、ずっと監視してきたとなると、変人や変質癖のそれと変わらない意味合いになる。人によっては、「なに、俺の顔見てんの？ 古見子さん？ そこまで凝視するまでに垂れ物が着いているのか？ 顔に」

と、コトシラは、相変わらずゲームをポチって居た。

そして、コトシラ自身も何かの違和感に気づかれる。

コトシラと古見子さんは、無事結ばれ森の中で一生を過いしましました  
めでたしめでたし。

アクスベリ。全知全能が前置きにいっては、成すべ無し、（前書き）

おまけですので

アクスベリ。全知全能が前置きにいっては、成すべ無し、

事実婚で居て、正式な婚姻を定めたわけではない。

あれから、九年が経つ。

熱い愛なども語りもせずに、時と時間だけに流れされ、体つきだけは  
だいぶ大人だ。

冷めたおれと枯れる彼女。

そう言い切るのは、訳があるからだ。

観て解る…簡単で安直に言えば、おれはもう人間ではない。  
心は有つても、身体はない。

どうしてか…の前に、どう言った理由を述べているのか?を解説  
してみよう。

一口に、おれは人形。

原理は、魂の器と人の模型。素材とその用途と言つてもいい。  
今は魔力のような物で動いている。

格好いいとかアンティークだと、一般的感想は求めては良ない。  
事実を告白しているだけだ。

人で無くなつた以上、おれはもう死んでいるのと同じような錯覚

に襲われたりする。

しかし、彼女の方も、おれより悲惨な人生を歩んで行かなくては成らない始末だ（おれ場合は人生剥奪）

観るも無惨に、生身の古見子の体は、この三次元空間を認識する際、八十パーセント重要視され伴う大事な器官を失い。

利き手はない状態。

俺達は、どうもパツピーホンドとは言え無い物語終盤の延長を迎えているのかも知れない。

屋敷は齟齬家。俺達一人の家だ。

おれの家は、火事でなくなつた。

もつと言えば、タンサイは亡くなつた。

そうだな、きっとそうだった。

物語に結末があつても、それは、人生の結末とは言えない。人生の結末は、死しかないからなあ…。

此処からは、過去を語るかのようにシナリオを進めたい。

アクセストロベリー…

「なに、俺の顔見てんの？古見子さん？そこまで凝視するまでに歪

な物が着いているのか？顔に

と、コトリシは、相変わらずゲームをポチって居た。

そして、コトリシ自身も何かの違和感に気づかれる。

怪しげと訝しげをグチャグチャにして、一刀両断したような眼力を彼女に放つ。

「明日は、何曜日だ？」

その前の言葉の回答を訊かず、「わがままに訪ねるのは俺だ。

「何を言つてこらのかわっぱつよ？ちやんと、日本語をしゃべりなさい。」

聞き取れなかつたのか…或いは、無意識に呂律が廻らなく発音しきれていなかつたのか…。再度、尋ねよ。

「明日は、風邪をひかないで済みそうだ。…今何時くらいかな？腹が減つて、指先のキレが悪い。」

「あ、そっち…なら、パンがあるわよ ？食べる？」

どこでパン入手したのかは、知らないが元々彼女の周りでは不思議なことしか起きないから、違和感はなかつた。

「お、良い気廻しだ。食べるよ。無論勿論食べるぞ。」

読めてきたぞ。この小娘の考えが…

どうせ、こんな小説を読んで居る奴なんて、携帯の待ち受け画面が可愛い女の子が映つてんだろ？この作者も同類だから安心しや。

みたいな奴らを、陥れているのであらう。

今の今までは、その場の空気のノリでなんだかんだ遣つて来たがこ  
こは、そんなに甘くはない無法地帯樹海『くるトナの深林』だから  
な、血縁が在りとも、油断は禁物。

「わかつたは…取り替えず、ゲームを終了するか、ゲームを遣つた  
まま食事を行つか？選考しなさい」

この選択肢に意味は在るのだろうか？

結局選ばして置いて、無慈悲に強制選択送還されるのではないか？  
解つて居る。解つて居る。

答えは初めから一つだ。

「お言葉に甘えて、ゲーム道程切り開いて進行しているから、おれ  
のお口に放り込んでくれ…」

一種の恒例行事な物。おれ自身が望んだ選択肢だ。本性と言つても  
過言言語ではない。

「解りましたわ。そのお口に、正体不明未確認パンを口にねじ込み  
ますわね」

承諾を受け入れた古見子さんは、器用な手つきで…ゲーム画面ディ  
スプレイ眺めておれの口に言動同様ねじ込み突っ込んだ。

優しくお口放り込まれた食べ物は、イースト菌の死骸と小麦粉の焼

けたあじと……それとあんこの感触で味覚は埋め尽くされた。

「う、美味しい。」この食パン風味のアンパンマン何処から拾つたのか、聞いてみたい

彼女は魔法でも試用したかのようにパンを取り出し、化学式の微調整を経て完成に完成度を高め、熟成した味覚の感覚神経を揺る一品を上の言葉で示す。

「あら、そう……美味しかったの……不味かつたら、まあこと言つても良いのに……

逆に、無理して不味いフリでもすれば良いのに……

それ、試作品なのよ

試作品での出来とは、にわかに信じがたい。信じないことにしうか……違ひな。信じなかつたことにしう。彼女の心境を考えて。

「試作品での出来とは……まだまだだな、正直言つて、おれが造つた方がこのアンパンの256倍は美味しく仕上げることが出来る……出直してここ」

その前の甘口な感想は何処にやつたと言わんばかりに、辛辛な語語。

二度、言葉を並べれば、それしく聞こえる日本語はこれだから使える。

気配りの利いた掌握言語と言える。

「そのへりこ威勢が良いと、作り概があるわね……明日せぱぱパンで決まり……」

所で、そのパンを作るに至つての、材料、機器、技術は何処から用いられた？此処は森だぞ？

じつと、今度はおれの番だと言わんとせんなどばかりに、羨望によく似た視線を向けてみる。

視覚が無くともゲームが出来てしまふ体になつたのも喜ばしいことなのが…それとも、疎く咎めればいいのか…

其れはサテオキ。

「何を目を水車のように丸くして、観ていらっしゃるの？…ちよつと、怖くては笑えませんわよ、あはは」

『まかしの利いたアクセントで笑う。

その水車は、カーボン製が主流だらうな。  
ま、おれは、私の事は知らないし、世界でもつて渡つて、パンの修行でも受けに行つていたのであらうよ。  
顔中ススだらけだ。

「黒滅劉派『ドン貌下ゲイツ』とでも戦つてきたかのような。顔してるぞ。顔洗つてこいよ」

ドン貌下ゲイツとは、しがらみ、トバリ、くさび、が大つ嫌いなわがままな黒竜だつたはずだ。いにしえ文書だつたのでよく読みないし、覚えて居ない。

「…あら、そうなの…顔に非道い物でも付着していたから、優しく『まかしの利いた戯言をくださるのね。』

いやいや、真っ黒クロスクリーングロテスクに、成っているわけではないので安心してくださいよ。いつの意味もハビコラせたつもりだったんだけど……

ドン貌下ゲイツは黒竜と言いながらも、美を代表する白き龍である。

新世界創造後。それは伝説と化した。

「なら素直に、顔を洗つてくれるわ」

泥まみれのテントをでて、河川へ踏み出す古見子。

「嗚呼」

驚愕するほど、プレイ時間の短い表示にしたづつむ。

プレイ時間00:00:01:33:46

次回  
新たな道

本音の所。視線恐怖症のおれは、何か作業をしながらじやないと、人とまともに話すことが出来ない。

顔を洗つている古見子さんを水中に落としてに行ひつ。

コトシリマ、テントから外の世界へ飛び出した。

コトシリマ、外の世界の壮大さに圧倒された。

「此処がその……空蝉残して飛び出した新空間か……」

つまり、自分自身の息で湿きつていたテントとは違い。新鮮な森林の空氣つて事が言いたかった。

ロマンチックな自殺のし方は、色々ある事に思い出される。

好きな女の子を田の前にして、口が塞がり何も言ひ出す事が出来ないときの自殺方がある……。

例えば、即死とは言え無いが飲み込んでしまつと必ず死ぬ丸薬を飲み込み。

その後、粉末状の毒薬を口の中貯えそのままキスをしてしまえばいいのや。

その際、成功して相手の胃の中まで到達すれば、死後の世界で永遠の愛に浸ることが出来る。

成功しなくとも、自分自身、既に死に逝き絶え、自身に恥を知らずにして無の境地へ誘われる。

現実世界では、哀れな死として祟められる。

どっちにしろ幸せな、自殺方。

自殺と言つより、相対自決。と象つた方が良いな。

想いに思い出した。コトシラ。

「何かの本に書かれってあつたけつか？」

根元が思いに思い出せない模様。

それは、コトシラ本人。

在る在るよくある…全く、思いつく物ばかりは全てが何かの模倣か  
…そつちのけの何か。

困り果てるのは、おれではない。どこかで俺らを觀てている高次元の  
誰かだ。

爪楊枝を相似したかの様な高々な木々辺り一帯を囲む中、断片的に  
両断する川は、冷たい音を奏てる。

今。おれの冷静な頭で考えて、考え方直した結果。あの冷めた流れる  
液体に浸かつた俺たち本気のバカではないのか?と思つ。

無事で何よりだが大事件勃発でもしていたら、過去としての笑い事  
は、まさに笑えない。

体中凍傷で低体温症の災禍の果てに、骸となつて、地球と一緒にいるのは明白。

ただ唯一、時期を誤つただけで命さえも塵になるから自然の摂理にはかなわない。

と。またしても述べてしまつた。

今すべき事、趣旨がズレてこるといふのはこの事を…」の時点を言うのだらうか？

ま、良いか、今は古見子さんを川に落とし、体中凍傷で低体温症な骸に仕上げることが最優先。

脳内何とかは、「…」でいつたん、機能停止。

コトシラは、古見子さんと思われる人影に恐る恐ると忍び足を繰り返す。

「しめしめ、どうやら気付いてない様子だの、突き落とすだの」

小声でぐぐもり口調でぼやく。

様子を拝見して観ると、丸くなつて顔洗つているよつた描写が見て取れる…貧弱で幼稚な語彙しか兼ね備えていないコトシラの最大限の表現だ。

不確定要素に繋がる大険は、養分たっぷりの土まみれなテントに預けて置いた。たぶん問題ない。

不審に撮られがちの携帯ゲーム機も電源を切つて、在る程度綺麗なテント床に置いてきた。ブルーシート生地の床下が直で接しているそれを床と言えるかどうかは定かではないが、そう言わないと説明できない。

あえて言おう。お化けのような構えで、地に接するのは、つま先からだと…

の「」と「」は、一歩一歩通行する。古見子さんまでの距離にして、三メートル…相変わらず、古見子さんは丸い。

…何をしているのだろ？

疑問符を絶やさないのは、恐怖心を取つ払い為の作為。さつき、脳内何とかは捨てると言つた矢先でこれだから、多分…中毒しているのだろうな。

自覚はないが仮説は立てる。

もし、そつだつたとして何が俺をなつせなのだろ？

其れの正体は簡単、不安と定着心の無さ、。

執念深く、かみ砕けばいい物をあえて、宛もなく飲み込もうとする様なもの…

つまり、どうでも好い話。

三度目の正直とばかり、今回は逃げない。

「トシラ。助走を附け助走を得て、古見子さんの背中に流用する右

腕を差し出し、突き飛ばす構えで、駆け出す。

「『//』バーナ、一因觀光昨概破裂の貶めしー。」

思に当たる語呴語呴を連ねて吐き出す。

拙劣に幼稚な駆け足と、幼稚で拙劣な掛け声に合わせて、突出。

よけて観る。古見子よ、避ければおれは水切りをしながら水辺に追撃する予定になるだらう。

諦め物腰な零下思考は、こんな時まで憚る。

雑念め消える。

「氣勢を上げたら、折角の奇襲も台無しね…私を誰だと思っているの？」

読まれていた。

否、読まれていた。  
違つ。読んでいた。

足取りは、止まる」とはない。距離感にしても田と鼻の先くらいまで狹まつてゐる、逃げる場所はない。ヒステリックな喘ぎ声でも上げて、仰け反り水面に超絶突破するが良い。

揺られと立ち上がる古見子せん、果たして立ち上がる時間なんて在るのかな?と思つぱびゅつと立ち上がる。

「見え透いた手ね…」

片手を前に出す。左手だ。

右手を差しだし。駆け出しているおれとは、引力に違いが在りすぎ  
る。

正面突破は手段だ。他の手段は好め無いが、その手段を扱わさせて  
もらひ。

ガシツ

古見子さんの左手に、おれの右手が絡む。  
餓死つて聞こえたのは、おれだけのはずだ。

力勝負なら、おれの勝ち。技術面なら古見子の勝ち。

「これを勝負と言うのなら、私は、敗北を選ぶわ。だけどね、これ  
は飽くまでも私的な面が多いから貴方にとつては、逃げにしか聞こ  
えない…わ」

凄くガラスを割つた小学生の言い訳にしか聞こえないのは、本人の  
眼前にいる俺だけにしか伝わらない慣わしなのか？

と、古見子さんは宙を舞う。

個人的には、背中を押して突き飛ばしたかった…そこに憧れを感じ  
たから、：

「おい、ちょっと待てよ、俺はこんな落とし方、望んじやいないぞ  
！」

突き落とした右手を差し置いて、暇を余した左手を伸ばす。

『掴め』の意だ。

明らかに明らかすぎる、言い草に古見子さんは…

「やつぱつ、貴方は企画者ね…」

と、無意味ありげな言葉を返す。  
そして、右手を出す古見子。

『握つて観る』の志。

ヒュ〜

宙を舞う。従姉は、それだけで何処か狙つた感のある構図で右手。

差し出す。長ズボンを履くおれは、河川敷ぎりぎりから左手。

手が届くか届かないかは、解らないし知らない。けれど其れは、今  
のこの段階や局面や場面や状況を著しく把握して、理解していれば  
結果なんて、どうでも良かつた…

手が繋がるその瞬間。

二人は、肌寒さ残る河川に再度墜ちた。

次回  
川は寒く  
浅はかな  
息を吐く。

## シクラベ・クオリティ

ヒント、『あ』に近い言い言葉を冒頭に持つてくる。

誰だつて、先頭を観るからね。最先端とかの言葉に集まるのも解るから、

ヒント、友達に伝える。もしくは進める。  
すると、すごい連鎖で広がる。

まるで、全世界がその人立てで動いてるよう見える。

これは、文中に仕組みを作ればお手の物。共感できる物に、人は評価するし、誰に伝えたくなるから、

とりあえず、造語は必須。

何か。抜け目や穴場や不覚を衝く。

誰つて遣っているように、新しい物は新鮮感のある造語を生み出せばいいのさ。

しかし、小説と言つた物には、作者のセンスが試される。

むやみに、造語を連発してしまつと、あとは逆地着陸してしまい、  
目を觀るよりも哀れな感じに成っちゃいますよ。

狂附けてください。

ただ今の物語の進行上、ローペースにも程があると作者は悩んでいます。

結局完結という形に仕上がっていますが、これは作者の未練の固まりと言つべきでしょうね。

初めに、コトノシラとか。古見子とか。

本当は文中の人物ですし。

作者が好き勝手言つてるものであつて、中身がないもでですし。

読んでくれた人は、スゴいですよ。本当に、

では、ばいばい。

シクラベクオリティ。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5555x/>

---

アksesベリ。

2011年11月27日16時06分発行